
神葬具 † AVENGE WEAPON †

井戸 命火@今日も遅執筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神葬具 † A V E N G E W E A P O N †

【Nコード】

N O 1 1 1 S

【作者名】

井戸 命火@今日も遅執筆

【あらすじ】

【主人公最強物、ハーレム物です。生々しい描写も含むので、お気をつけ下さい】

神葬具。それは、人間が神を葬る為に使う道具である。

人間への裁きを宣言した神。それに遣わされた翼持ち、天人。

軍事兵器も利かず、破滅の一方を辿るかに思われた人間達は、とある武器を発見した。

天人の死体から武器を奪取する刷り込み。

そして、それにより得られた天人に対して絶対的な力を発揮する武器、神葬具。

神葬具使い最強の主人公は『対天人育成用教育学科』初の女子学園への編入を決められ、いきなり女子だらけの場所へ放り込まれることになる。

人との関わりを好まない彼だったが、他の神葬具使い達と接することとで守る意味を知る。

大切な者を奪われた少女達と記憶喪失の少年は、神との激闘に巻き込まれていく。

絵師のおクマさんに挿し絵を描いて頂いています。
挿し絵がある話には【挿し絵】と表記しています。

00『見限られた世界』【挿し絵】

満月が似合う夜のセンター街。俺の目線の先には、道路で毅然と佇む少女がいる。

綺麗な子だ。長く、風に靡く飾りのない金髪。所々破けた服から覗く白く滑らかそうな肌と、スカートからスラリと伸びた脚。目の前の敵を見据える鋭い瞳。きつと彼女を見れば、通りががった男は絶対に振り向くだろう。

『x & amp; ;% \$ “ \$% & amp; ;% \$
ツツツツー!』』

体が痺れる程の怒声。地響きで揺れるコンクリートの地面。

少女が対峙している超巨体の巨人は歩道に置き捨てられた車を手で掴み、紙のように握り潰す。石で造られたであろうその体の重量は凄まじく、歩を進めた後のコンクリートがそれを物語る様に無残に割れる。

車を握っている手とは逆の豪腕が、少女に振り上げられたのを見て、俺は更に走る速度を上げた。

「っち、間に合うか!？」

距離は遠い。気付いたのが遅かった。もう少し早ければ、割っては入れたかも知れないのに。

彼女は自殺願望でもあるのか、その場から一歩たりとも動かない。逆にその肝っ玉を尊敬したいくらいだ。仮に自殺するにしても、普通ならあの巨体を目の前にすれば脚が竦むし、逃げようとする拳動くらい見せるだろう。

少女にはそれが無い。まるで、振り下ろされる石の豪腕が天から

の贈り物かのように、佇むだけ。

まさか立ったまま意識を失っているのか、こちらからの呼び掛けにも反応しない。奥歯を噛み締める。また守れなかった。また、目の前で人が死ぬ。今度は、若い女の子が。

無意識に手を伸ばした。届かない距離にいる彼女に向かって。

石の豪腕が　　少女に向かって無慈悲に振り下ろされる。奇跡的に拳が狙いを外す、何て事はなく、目に飛び込むのは、少女に突き迫る巨人の拳。

「来なさい、神葬。分け隔てなく包み込む風をここに」

> i30079 — 213 <

「我が名は天使ラツイエル。神の決定により、人間はこの世界に必要な物と選定されました。よってここに、武力による人間の駆逐を通知します」

30年前、あの出来事が起こるまで天使は慈しまれる存在だった。紅い翼を生やした純白の西洋甲冑を大量に引き連れて、天使は人間に宣告したのだ。神の意思による人間の清掃作業を。

人間は鎧を纏った翼持ちを、嘲笑いながら皮肉交じりに「天人」と呼んだ。それもそうだ。天人達は槍や剣と、今では武器になり得ない代物を掲げ、人間界に攻め込んで来たのだから。

一見、その装備から人間の一方的な戦いになるかと予想された戦争。だが、想定は覆された。

天人の鎧は強固で、戦車の大砲でも吹き飛ばさない。傷は付くが、そんな一体に対して戦車一台なんて到底無理な話だ。なんせ同じ者が何も無い空間からわらわらと群れを成して襲ってくるのだから。

無力な物と思われた武器も、一薙ぎすれば何十の首が飛び、天人

を10体倒したと思いきやこちらは軍隊の一個中隊が壊滅。力の差は歴然だった。

天人の脅威はそれだけでは無い。

天人が破壊活動を行った場所は例外無く、凍りついたかのように雪色で染まる。研究者がその白を調べようと土地に足を踏み入れた瞬間、体が凍り付き、遂には彫像の如く固まってしまった。

雪色に対する解決策が無い現状では、制圧された場所は元に戻らない。通称『凍った土地』の出来上がりである。

日本は被害を受け、北海道が既に白く染まっている。それでも、随分マシな方で、アメリカと中国はこの白で本土の大半を奪われ、為す術無く後退。

人は天人に恐怖を植え付けられ、世界はこのまま終わるかに思われた。

そこで全ての国が打ち出した計画。

対天人育成用教育学科を全ての学校に取り入れさせること。確かに、ただの人は太刀打ち出来ないが、対抗出来る手段が見つかり、その素質を持つ者を集め、訓練しようというのがこの計画の目的。その手段が今、固唾を呑んで見守る人々の面前で行われている。

厳しい戦闘中に死んだ、傷だらけの天人の死体。装着した鎧は所々が粉碎され、憎々しく思っている人でさえ、哀れに感じる外傷。もう、どんな物でさえ生きているなら息を吹き返しはしないだろう。実験室のような薄暗い空間の中心に寝かせられた天人の亡骸に、まだ幼い子供達が順々に手を当てて行く。その光景は、冗談の利かない踏み絵のよう。

代わる代わるに子供達が手を当て、何も起きないことに安堵する

者もいれば悔いる子供もいた。

順番が回って来た少女が前に歩み出て、恐る恐る手を伸ばす。当たり前前だ。人で無いとしても、それは列記とした死体。怯えない方がどうかしている。

「ひっ……！？」

少女の手が天人の亡骸に触れると、死んでいる天人の体が光りを発した。少女が驚き、手を離そうとすると動かないの筈の天人がその手を掴む。

周囲がざわつき、その少女が泣き顔を浮かべた時、天人が兜で隠れていない口元に微笑みを浮かべた。

突如、天人の体から現れた溢れんばかりの光が少女の腕を覆っていく。まるで色が付いた風が腕に巻き付いているかのような光景に誰もが息を飲む。

光が弾け、皆が少女を見るとその体躯に不釣り合いな古めかしい大剣が握られていた。代わりにそこまで横たわっていた天人の姿はどこにもない。

『刷り込み（インプリンティング）』

人間が一生に渡り一度しか行えない、言わば天人との契約行為。

天人の亡骸から情報を奪い、その天人が扱っていた武器を体に刷り込む。それにより、刷り込まれた天人が扱っていた武器を呼び出すことが可能となる。

刷り込みが完了した後の亡骸がどこに行ったか、見当もつかなければ、刷り込んだ武器がどこから出現するかもわからない。謎だらけの行為である。

共食いという表現が正しいか、刷り込みにより生み出された剣や槍は天人の体を安易に断つ。

呼び出された武器は使用者の体力、精神力を食い、それが限界に

なるか所有者が意思で返すまで現界し続ける。

何故、天人は刷り込みを許すのか。そして天人が使っていた武器を刷り込みで呼び出せるようになるのか。国のお偉い方も分かりかねている様子。

言えることとすれば、天使の体から作り出された武器は、皮肉にも悪魔の兵器だった。

そして刷り込みで天人から受け継がれた武器を『アベンジウエボン神葬具』という。元々、生前の天人が使用していた物で、稀な例で一人の天人から剣と槍とか斧と弓なんてこともあるが、限り無く0に近い。全世界で両手の本数満たない例である。

その説明通りに通常、1人につき神葬具は1つとされている。

今まで現れた神葬具は大きく分けて『剣』『槍・鎌』『弓』『盾』の四つ。近代兵器とは違い、趣向品として扱われそうな、西洋武器のみである。

剣にも大剣や細剣があるのだが、それを言っていたら切りがないので省略。

これらの武器は例外無く天人に絶大な効果を発揮する。弓は弓で空で引き絞ると光の矢が出現して相手を射抜くなどその武器その武器によって現れる効果が違う。属性なんてものも出て来たから更に驚きなのだが、結局は殺しの道具だ。

そして神葬具を手に入れた者は男女関係なく対天人育成教育学科に送られる。

そこで学びながら近くで天人が出現したら急行、直ちに撃退。そんな命の紙一枚分くらい横を鎌が振り子でゆらゆら揺れ続けている。そんな状況に晒されるのである。

確かに今現在、普通に働くよりも良い暮らしは出来るが、それでもハイリスクローリターンといわれている。

それは何故か。

戦場に出て10人中3人が死ぬ。そんなことが週一程度の期間で起こる。

つまり

死が目と鼻の先に仁王立ちでそびえているのだ。

00 『見限られた世界』【挿し絵】（後書き）

> i 2 8 9 6 8 — 2 1 3 <

練りに練った学園ファンタジーです。

楽しんで頂けたら幸いです。

ツツツツ！！」

先程までは怒声に聞こえていた巨人の咆哮が、言葉にならない悲鳴に変わったように思えた。彼女が跳び上がり、振り被った見事な踵落としては巨人の脳天を見事に捉えている。

石造りの頭が欠けた巨人がぐらついた瞬間を狙い、地面に着地した彼女は一回転しつつ巨体の軸足に回し蹴りを見舞う。

痛恨の一撃で横倒しになるかと思いきや巨人が踏ん張り、コンクリートに足を減り込ませた。ゴーレムと言っても下級なのか知識が浅はかで、自分で自分を縛り、身動きが取れなくなってしまう。

絶好の好機を逃がさず、彼女はまたも驚異的な脚力で跳躍。

空中で振り被った回し蹴りを巨人の顔にぶち当て、衝撃で遂には巨体を押し倒した。

「
………アテンド
解放」

彼女の足に装着している脚鎧レギンスの磨き抜かれた輝きが、薄緑色に染まる。色の付いた緑色の風が、金色の髪を靡かせる彼女の右足を軸に突風を吹き荒らす。

空中で一回転二回転とし、風を纏った右足で倒れた巨体に踵落としの追撃。

踵が着弾した巨人の胴体に亀裂が入り、そこを中心に亀裂が波紋のように広がっていく。まるで卵の殻が破られ、雛鳥が生まれるかのように。

「やっぱり、人形の中に隠れてたんだ」

巨人の腹部に立ち、こちらから窺えない割れ目の中を見ながら彼女がそう言つと、割れた胴体の中から一人分程の光の球体が飛び出す。逃げ去るような動作だが、直ぐに空中で留まり、光の膜を剥

いで姿を曝した。

顔を覆い尽くす西洋風の甲冑。背中^{ハルバード}に生えた血色の見事な翼は、羽ばたく度に赤い羽根を散らす。手には、見るからに重々しい斧槍が握られている。

地面まで辿り着いた羽根は粒子になつて霧散し、天人は優雅に羽根が落ちた地面へ降り立つ。

正直、先程でのゴーレムよりも性質が何万倍も悪化した。ゴーレムは巨体だから小回りが利かないが、制御していた天人は違う。あの巨大な斧槍を軽々と振り回し、一向に疲れを見せない。人類の宿敵、天人。

これはそろそろ助っ人に割つて入らないといけないかも知れないな。

目の前で人 ……それも自分と同年くらいの子が死ぬのは寝覚めも胸糞も悪い。

「本番はここからつてわけ？随分余裕そうね、人殺しの機械」

背丈を優に超える斧槍を軽々と振り回して構えた天人に向かい、彼女は喧嘩を売るように両手を腰に当てる。

感嘆した。ここまで届く無言の殺気を当てられて真正面から言葉を発するとは、随分と肝っ玉が据わっている。もう彼女の度胸はあぐらを掻いていることだろう。

「ゴーレムに入ったままやられといてくれれば楽だったんだけど、これはこれで感謝するわ」

金髪の少女は脚鎧を装着している脚を、見せ付けるように持ち上げて言う。

「これで真正面から殺し合えるもの」

憎い。憎い憎い憎い。

八重歯のある歯を噛み締める。もう目の前の敵しか見えない、仇しか見えない。

殺す。逃がさない。この手で、必ず殺す。

紅く広げられている翼が、暗闇で覆うように月光を隠す。こんな暗黒の中でも、天人の持っている斧槍は不気味に鈍く光を発している。

斧槍。ハルバードと呼ばれるそれは漢字で表される通りに突いても難いでもどちらにも使えるお互いの短所を補っている武器だ。接近出来れば直ぐに片付くのだが、距離を離せば槍が、近付けば斧が、互いに襲い掛かる。こちらが頼れる物は脚だけに纏っている鎧のみ。

(……上等。やってやろうじゃない)

相手がどんなに強くとも、力量差があろうとも、押し通してねじ伏せるだけだ。

静かに呼吸を整えると視野を狭める。敵の一挙手一投足を見逃さない。今ならば相手の吐いた空調の乱れも見通して見せる。

(やっぱり呼吸なんてしてる筈ないか。これじゃ、相手の息切れなんてわからないわね)

殺すのには変わりはない。だが下手をすれば胴体が半分になっていることも十分あり得る。何より、こちらの場合、脚の装甲以外にあの斧槍が当たれば即死。掠っただけでも出血は免れないだろう。

殺す為に冷静になれ。焦るな。

「……ッ！」

先ずこちら側から打って出る。持ち前の速度を活かし、右脚を振り上げ渾身の力で振り抜くが、相手はもう既に移動済み。

視界が追い切れていない。そんなのわかっている。だからこそ、全身で感じる殺気を引き寄せ、相手の場所を探るしかない。

バク転で後退すると、先程まであたしがいた場所を決る斧槍。コンクリートが粉碎され、その下の地面までも貫いている。飛び散るコンクリートの破片が掠れ、巨人との戦闘で破けた制服にまたもや傷が入る。

「やってくれるじゃない」

手汗が滲み、冷や汗が頬を伝う。

普段車が横行する道路は、ゴーレムが暴れ回った痕と天人が付けた斧槍の傷で、もはや原型を留めていない。間違いなくゴーレムに入っていた時よりも破壊力が増加している。

天人は地面に深々と刺さっている斧槍を軽々と引き抜くと、馬鹿正直にあたしに向かって直進。

ガキンツと鋭い音と共に、真正面から脚鎧と斧槍が衝突する。衝撃波が周りの物を吹き飛ばし、あたしは大量の冷や汗の量を流す。

(……凄く強い……今まで訓練で戦った天人が人形で、こいつは殺人鬼って訳……?)

相性はきつと、こっちの方が勝っている。相手の武器は重量がある斧槍、振り被る動作、突く動作には必ず行う為の隙が出来る筈。そう、筈なのだ。

衝撃で吹き飛ばされながらも受け身を取り着地。奇跡的に損傷は

無いが、それ以上に恐怖が湧き上がった。

(勝てない。隙が、身軽なあたしが入り込める、そんな隙もない)

力量の差を思い知った瞬間、相手の全身が城壁のように思えて、恐怖で足が竦み、体を鎖で縛りつけられるのを感じた。

目の前で無然と立っていた天人が斧槍を退屈そうに一振りすると、衝撃波が飛ぶ。

必死で横へ転がり、間一髪で無傷に終わる。だが、その攻撃であたしの背後に建っていたビルに縦の傷が深く刻まれた。

へたり込んでしまう。そうか、一任務の中で十人中三人は必ず死ぬ……その3人がこんな気持ちだったんだ。圧倒的な力量差の前での戦意喪失。これ以上の理由はない。

どんなに噛み付いても相手にとっては野良犬以下なんだろう。

(……ごめんね。パパ、ママ……泣き言言いたくないけど、もう貴方達のところに行っちゃうかも知れない)

立ち上がろうと力を振り絞るが、恐怖の余りどうやら腰が抜けたらしい。

俯くと自分の金髪が地面に着いていた。ここまで伸びたのは、実際伸ばそうとしたからじゃない。こいつ等が……本当にこいつ等が憎くて、時間を忘れて特訓して、身の回りを正す暇なんて無かった。化粧の一つもやったことが無ければ、無言で過ごす日々の連続で友達もいない。

もうちょっと、自由にしていれば良かったと少し思ってしまう。

顔を上げると天人が先程と同じ位置で斧槍を振り被っていた。間違いない、あの衝撃波が来る。

わかっていて避けようにも、足が動かない。ダメだ、本当にここで終わりなんだと悟ってしまった。残念ながら走馬灯なんて大層な

物は体験出来そうにない。

「……今までの人生に後悔はないわ。ただ、腹が立つだけ」

あんなに特訓して、ようやく、ようやくこいつ等と戦うだけの力を手に入れた。そう思っていたのに　　現実はこちらだ。蟻が象に叶う訳がない。束になればなんて言うが、自分は所詮働き蟻一匹。

「アンタ達みたいなのに……太刀打ちも出来ないあたしが、惨めで、馬鹿で……どうしようもなく悔しいだけ……！」

目蓋を強く瞑り、歯を噛み締める。涙は絶対に流さない。きつと他の生徒はわたしを教訓に訓練が無意味だと知ってくれるだろう。そんな人柱になるのは絶対に嫌だが、この際そんな生け贄のようなことしか出来ない。

「誰か、仕返しても打ってくれるなら嬉しいんだけどなあ……」

でもきつと、これで死ぬ人が少しは減ってくれる。無意味に戦場へ出される生徒は減るだろう。ここまでの力量差、あたしはそれでも実技試験の成績は最上位だったのだ。

「テストとお勉強は、違うか」

体を引き裂こうと風が迫る。突き迫る風の刃、それが黄泉の世界への迎えだと思つと、吐き気がした。

「なに情けなく諦めてんだよ。ゴーレム倒した時の威勢はどこ行つた」

01 『衝突、土塊の天使』（後書き）

バトルパートはもう少し続きます。
どうぞお楽しみ下さい。

02 『穿つ銃口と少女の逆ギレ』

黒い小型の銃身を月光で瞬かせ、ベレッタM92FS拳銃の銃口が弾丸を撃ち出す。的から逸れぬよう、狙いを付けた弾丸が少女へ放たれた狂気の風鎌を相殺。生まれた衝撃波の中を躊躇無く走り抜け、助走を付けつつ斧槍を持っている西洋甲冑に飛び蹴りを浴びせる。

天人は渾身の蹴りを腕甲で覆われた片手で受けようとしたが、遅い。紙一重で蹴りが顔面を捕らえていた。

展開は気付く物じゃない、読む物だ。登場して片手で投げられるとか穴に籠るくらいの出来事だぞ。

天人との距離を引き離れた事を確認し、未だに死を覚悟し続ける少女へ声を掛ける。

「なに情けなく諦めてんだよ。ゴーレム倒した時の威勢はどこ行っ
た」

我が身の無事に驚愕したのか、目を見開いてこちらを凝視する彼女に微笑む。子供をあやす父親の心境とは、こんな感じなのだろうか。

長時間飛行機に縛り付けられていたお陰で体の反応が若干鈍いが、仕方がない。目の前の障害を突き崩すには十分。どう足掻こうとも相手は天人一人。

疑問なんだが、天人って一人の単位で良いのだろうか。

下らない考えを払拭し、蹴り飛ばした相手に再度視線を向けると既に起き上がって体勢を立て直し済み。やはり巨人に乗っていた時よりも万倍今の方が戦い難そうだ。

「なら最初からゴーレムじゃなくて生身で来いよ……」

先程まで金髪の少女に向けられていた殺気が、全身に嫌と言う程浴びせられる。

笑いながら答え、空の右手に力を込める。創造するのは、拳銃と同時に発砲可能な小型の短機関銃^{サブマシンガン}。威力は低くても構わない。極力反動が小さい物を選び取れ。

想像に込めるかのように、何時の間にか空だった右手には重みを感じさせるFN P90の短機関銃が握られていた。

自分で言うのも何だが、片手で撃つには最適な選択だ。拳銃と両立可能で、尚且脇下で挟み固定する事が出来る。他の短機関銃より随分小型なそれは、重量も比較的軽量。

「さあ、準備万端だ。始めようぜ」

こちらは確実に腰を抜かしているだろう少女が足枷になっている。彼女を狙われては、防戦一方になるのも必至。そうなれば戦闘の辛さは五割増になると述べても過言じゃない。

天人の攻撃対象を俺に絞らせ、且つ迅速に勝敗を決しなくては。

拳銃と短機関銃、両方の銃口を向け威嚇行動を取ると、天人が斧槍を地面と平行の構えにして突貫してくる。突く為の突撃だけでない、意外性もあり相手の隙も突く事が出来そうだ。

しかし銃器構えた敵に真っ向勝負仕掛けるとは、正に凶戦士。意思が欠如しているから当然とも言えるが。

「なら、こっちも加減無しだ」

闘牛顔負けの突進に対して、脇下で挟み込んだ短機関銃を弾切れ上等の覚悟で撃ちまくり、威嚇を交えて拳銃も投下。引き金を弾く度に地面へ放り出され、散らばる空の葉莢の音が心地良い。威嚇射撃最高。安全第一の中距離万歳。

何十発もの短機関銃の弾を受け、通常の銃とは違うと悟ったのか、天人は空へ飛んで攻撃を躲す。銃弾は際限無く牙を剥き、逃げ惑う天人を狙い続ける。

悪役真つ青な戦い方をしていると、天人は痺れを切らしたのか銃弾に構わず攻撃を再開。

先ず空中から槍の突き刺し。それをバックステップで難無く躲すと、地上へ舞い戻った天人は刺さった斧槍を抜く動作はどこへやったのか素早く薙ぎを繰り出して来る。

「はい残念賞。鉛玉をプレゼントだ」

払いを跳んで避けると、背骨を痛めそうな体勢で短機関銃の銃弾をばら撒く。命中した弾は天人の鎧に銃痕を残し、所々が抉れている。

普通の銃では豆鉄砲と同等の威力に落ちぶれるだろうが、俺の手に握られている二丁は違う。形こそ近代兵器だが、神葬具に変わりは無い。

（流石にこれくらいの豆鉄砲じゃ、鎧をひしゃげられても決定打にはならないか）

それならば、と拳銃と短機関銃を投げ捨てる。投げ捨てて二丁が地面に着いた瞬間、銃達は後片も無く消滅。一見隙だらけだが、新しい武器を練り出す為ならばそれも厭わない。

重量のあるロングコートを引っ剥がしながら、更に威力の高い銃器を想像。

（ショットガン……違う。グレネードランチャー……無理があるな。無難にあれだな）

考えを固め、創造し慣れた武器の構成を映し出す。

作り出すのはAK-47のアサルトライフル。短機関銃の低威力とは違い、アサルトライフルの威力ならば鎧くらい吹き飛ばすことが出来るだろう。

脱ぎ捨てたコートが宙を舞い、俺から離れた時、既に右手には創造したアサルトライフルが握られていた。今度は反動が強く、撃つ為に両手で構える必要があるが、威力を考慮して妥協点だ。

「その鎧、剥ぎ取らせて貰うぞ」

早速銃口を天人に向ける。この距離ならばスコープを覗かなくても百発百中の自信がある。

天人からの斧の振り下ろしを難無く避けると、上半身に狙いを定めて、撃ち抜く。銃口から放たれた銃弾が重々しく天人の鎧に突き刺さった。頑丈な鎧に穴が空き、天人の体をも貫通。

流石だAK-47。反動は大きいが見返りも大きい。

痛みを表現するように斧槍で乱雑に繰り出される乱舞。視線で追いついて、避ける。避けて避けて、隙が出来たところに着実に銃痕を重ねていく。

「退けよッ!」

大振りで繰り出された斧槍の足元への薙ぎ払いを後ろに跳んで避けた後、間髪入れず接近し顔面へ向けて鋭い蹴りを放つ。耳を突く金属音を響かせ、怯んだ天人が後退。その隙を逃さずにアサルトライフルの追撃。着実に追い込みを掛けて行く。

ベルトの背中にぶら下がった重々しい果実を乱暴にもぎ取り、ピンの型セーフティの安全装置を口で引き抜く。

「おい、目を瞑ってるよ!」

顔面への攻撃が後を引いているのか、ふらついている天人に球状のそれを投げ付け、眺めている彼女に向って叫び、自分も目を瞑る。フラッシュバンの閃光が辺りを真っ白になるまで照らし尽くし、目を開いている者の視界を奪う。

天人にも視覚はある。加えて、天人達は光りが満ち溢れてた世界にいたのだらう、視力が悪い。耳鳴りがする音刺激で聴覚も無効になれば完璧に標的を見失う。人間よりも立ち直りは素早い、奪えないと奪えるでは万倍違う。

俺は天人が声を出さずに頭を振っている間に、アサルトライフルを捨てて左腕を右手で握り力を込める。

「アテンド
解放」

左手が白く輝く。まるで冷気を蓄えているかのように、神秘的な淡い光。

天人が斧槍を構え直そうとする動作を見た俺は、左手を引き摺るように地を駆ける。ここを逃したら機会を作るのは難しい。必ず、仕留める。

手を引き摺った場所は傷跡のように抉れ、しかし脚の速度は増す。広げられている手。天人の目の前でそれを強く握り締め、拳は敵を射抜くかの如く雷鳴を響かせる。さながらエンジンを最大限まで掛け続けたバイクのモーターのようだ。

拳は引き込まれるように天人の心臓へ　ぶち当たる。

「……I o l o l a s c i o」
とっめだ

殴った天人の鎧が砕け、心臓を拳から出た波動が穿つ。

威力は天人の体を抜けてその後ろのビルに巨大なクレーターを形作った。

パリンツ　と不自然な、ガラスが割れたような効果音がすると
天人の体が光り　その光りが消失した。これは天人達の絶命の合
図。この音が聞こえると、ようやく息を整えられる時間が訪れる。
1体では少し物足りない感じもするが、贅沢は言わない。

一息吐き、事切れた天人の死体を放り捨てると、俺は未だに座り
込んでいる彼女へ歩み寄る。

戦っている時も安全を配慮して本気を出せなかったのだが、天人
が彼女の方に意識を向けなくてくれて心の底から安堵している。こ
の子を守りながら戦う、これが加わっただけで戦闘の難易度が爆発
的に上昇するのは言うまでもない。

「大丈夫か？」

腰が抜けているのか、全く立つ動作を見せない彼女へ手を差し出
すと、応じるように握られる。

掛け声を掛け、彼女を立たせようとするが足元がおぼつか無いよ
うで、こちらに倒れ込んで来た。彼女が付けている香水の香りかは
知らないが、ブドウ独特の甘酸っぱい匂いが、少女と俺の間に漂う。

「……………あ、ありがと……………」

天人から助けた事か、転ぶのを防ぐ為に抱き締めた事か、どれに
感謝を述べたのかは分からないが、取り合えず受け取って置こう。
美人からの御礼程嬉しい物はない。

確実に腰が抜けているであろう金髪の少女。

抱き締める格好になってしまったのは悪いが、彼女には少しこの
ままでいて貰おう。

本当なら安全な場所まで運んでやりたいが、この後は用事があるし、出来れば少女には、早めに立てるまで回復して貰いたい物だ。

「……ん？なんか腰の辺りが生暖か……ッ！」

驚いた、心底。天人の攻撃なんて目じゃ無いくらいに。

暖かくなっている衝撃的な理由は、少女の為に比喩的に表すと、濡れていたのだ。彼女が今まで座っていた場所が生温かい液体で。

ついでに伝染するかのようになり、液体は俺の腰辺りに染み込んで行く。俺には特殊な趣味はないのでクリーニングだな、これ。

しょん……うん、そうか。天人と戦って驚いたらこうなるわなと思いつつ下を見ていた俺は次の瞬間

「い、いやあああああああッ！！！」

バシッツと夜空に気持ち良いくらい鋭い音が木霊した。なんだよ、全然動けるんじゃないか。

02 『穿つ銃口と少女の逆ギレ』 (後書き)

戦闘パートはここで終わりです。

ここからはヒロイン達との出会いとなっていますので、お楽しみに。

03 『対天人育成用教育学科女子学園』【挿し絵】

助けた女に張り倒された、あの事件から半日後。後始末に来た人達に事情を説明して、ここまで辿り着いた時には太陽がもう昇ってしまった。

「それでそんなに頬が赤くなってたのッ！」
「うっせえ笑うな！こっちは助けてやったのにまさかビンタで恩返しされるとは思わねえよ！」

目の前で笑い転げる人格腐ったような女に悪態を吐く。
学生と同じ制服を着込み小学生の高学年と思われるような身長、そして半目のやる気のなさそうな顔付き。ここの学校の生徒ですと言っても苦しそうな、そんな外見の少女は黒ストッキングに包まれた脚を組んでこっちにニヤニヤと視線を送ってくる。

超不愉快。

> i 2 5 8 9 3 — 2 1 3 <

「まあ、わたしの学校の生徒が粗相なことをしたことは、わたしが詫びる。済まなかつたね」

「うっせえ。そんな外見で学校長とか言われても納得出来ないうっせえ」

そう、目の前の小学生と見間違ひそうになるこのチビツ子。名を黒羽^{くろは}レツチと言つこのチビは何を隠そうここ日本初の対天人育成用教育学科女子学園『明星学園』の学園長なのだ。

建てられた理由としては、共学が大多数で男子学園もあるのに、なんで女子学園はないの!? ……から来ているのだから国の予算

の行く末が気になる。

それはともかく、納得出来ないけど証拠は出揃っているから問題。ここにある俺への推薦証と俺からの彼女への信頼だ。

「黒羽、アンタ、何歳だっけ？」

「ここら、女子に年を聞くもんじゃない。まあ、永遠の12歳とでも答えとこうかな」

「その年は洒落にならないから止めとけ。マジに信じる奴が出て来そうだ」

持ち前のモミアゲ長し肩までの銀髪を得意気にすくい上げている所作を見ると、如何にも子供料金発生しそうな発育劣化。お可哀そうなことで。

伊達に永遠の12歳ではない。ランドセル背負っても違和感無さそうなのが泣ける。

「それよりも良いのか？俺、男なんだけど。だいたい、この学園入ってこの部屋に来るまで何度チラ見されたことか」

「あら、考査過程の特別推薦。それも男一人。ハーレムじゃない」

まあ黄色い視線は嫌いじゃないけどな。何あの男の人カッコ良いって言われた時は柄にも無く喜んでしまっただった女の子に手を振ってしまった。女子学園様々。

その代わり気まずさもある訳だが、補って余りあるな。軍隊の男臭さに比べれば万倍マシだ。

「そこは素直にありがとうと言おう。でも良く通ったな。国は堅物だし『勝手に守れ、けど指示は出す』みたいな亭主関白のアホで固められてんのに」

「ここら政治家を悪く言わないの。国からたっぷりお金入れて貰

「つてこつちも運営出来てるんだから」

紅茶を飲みながらさっきまでの雰囲気を払拭するように落ち着きを取り戻す学園長。

なんか子供を見るような、母性に満ちた目で見て来るので思わず顔を反らす。久々に受けるとむず痒い視線だ。黒羽以外、俺にこんな視線を向ける奴なんていないし。

「貴方を呼べたのは貴方の肩書を国に言ったから。その子を呼べますよって電話したら即OK貰った。やったね」

「また悪びれもせずによくやるね、アンタも」

「褒め言葉として受け取っておく。最強の神葬具使いさん。それとも白の防人の方が良かった？」

「その呼び方やめる。向ここの兵士にからかわれて殴っちまったから」

「あら、喧嘩したの？」

「いんや、一発で昏倒させた。軟やわだよな。黒人だから殴り合いに発展すると思っただけだ」

その言葉に呆れたのか学園長は溜め息を吐きながら推薦証を摘まんで振り子のように振る。こらこら重要書類で遊ぶんじゃない。

第一、それって俺が女子学園にいて良いつていう許可証も同義じやねえか。無くされたら警察に捕まっても可笑しくない。証拠つていっつのは大事なんだ。

「ほんとさ、アメリカからの緊急要請で君を送ったのは良いんだけどさ。戦場で暴れ回るし処構わずフラッシュ炸裂させるし作戦は無視するし…君の名前、覚えてる？」

推薦書類の名前欄を指差しながら呆れた目で見て来る。視線が痛い。

確かに全てやったことだが全部理由があるのだ。

Q1・暴れ回ったのは？ A・困まれて面倒だからロケットランチャー呼び出してボコンボコン

Q2・フラッシュ炸裂させたのは？ A・ほら、必殺技には隙が出来るから補おうとしたんだよ

Q3・作戦を無視したのは？ A・仲間とろいんだもん

結果的に全部成功させたんだから良くね？と思っっている。

というよりも名付けた目の前の人に失礼なんだが名前は恥ずかしいのだ。なんか女っぽい気がして。

「……白^{しろ}レッチ^チ……だけど」

「はい良く出来ました。君が向こうに行ってから2年、わたしは記憶喪失の君を拾った時以上に胃をキリキリさせたよ。わかる？二日ごとに苦情が舞い込んでくるあの状況」

そこまで問題起こしてないんですけど。

まあ白レッチという名前で大体が勘違いするんだが、事あるごとに処女を自慢するこの黒羽という女性は俺の実母では無い。

5年前、血だらけの天人の前で佇んでいる俺を見つけ保護したのが黒羽。名前から記憶、全てを無くしていた俺に白レッチという名前をくれたのも彼女だ。

育ててくれた恩義は感じているし義母として愛情も注いでくれた。だから俺は性根を曲らせず、ここまで着実に育って来たのである。……いや、ちよっとくらい捻り曲ってても許容範囲ってことで良いじゃないか。

「まあでもね、元気にやってるってわかって嬉しかったけどね」

「そ、その目止める……なんか恥ずかしくなる」

「バカね。2年しか会わなかったのに生言っんじゃないの。今でも白はわたしの可愛い子供なんだから、母からの愛だと思って受け取っておきなさい」

ダメだ。やっぱり黒羽といると変にむず痒くなる。あのいつでも本気にならなそうな半目が、優しい瞳でこつちを見ているのが良い意味で苦手だ。

「寮室はこつちで振り当てであるし、制服はその部屋にあるからね。それと着替えとかは今度都市に出て買って来なさい。お金とかならちゃんと出してあげるから」

学生証と思われる手帳を渡され、それを受け取ると席を立つ。ダメだ、黒羽といるとどうしても不器用に接してしまふ。

寂しいような、そんな切なそうな黒羽を背に、学園長室を出て行くこうとして、少し踏ん張ってみた。

「……色々ありがと、母さん。今度、飯作ってやるからな」

改めてこの明星学園の広さを思い知った。

中世ヨーロッパから来ましたと言うかのような校舎の風貌に教室は広い雛段式。大学のような作りに少し目を丸くしてしまった。一回で多く終わらせたいというのはわかるが、それはどうなのだろうか。教卓にマイクあったし。

そんな校舎はレンガ造りで計5階まであり、どんなことに使っているんだとツツコミを入れたくなる場所が幾つも転々としていた。国が文句言わないのは守って貰えてるからだな、うん。

他にも闘技場があったりその奥が地下迷宮に繋がっていたりと…

ついでに訓練授業でそこに学園長の神葬召喚具から出現したかなり弱体化された天人を使い、迷宮バトルロワイヤルをするんだそう。ちよつと楽しみではある。俺はもしかしたらボスに配置されるかも知れないけど。

黒羽の神葬具の話は今度ゆつくりしようと思う。軽い説明ではちと無理だ。

バカ広い中央庭園に噴水、学生が食事を取るカフェテリア等々。確かに全寮制で外出は提出制でも学生から文句は出ないだろうなというほど施設は充実していた。石畳の通学路を歩くと言うのは新鮮な物だ。

しかも出会うのは女子ばかり。天国か、ここは。

「ちよつと、ちよつと……ねえ、アンタよアンタ！」

後ろから声を掛けられ、ついでにロングコートの裾を引っ張られる。いや、なんで引っ張るんだよ、肩でも叩けばいいだろ。

誠に遺憾であると言いたくなる行為に不満そうな視線を向けると、

「アンタって……昨日の夜の……？」

ビンタしつき……えほん、昨日助けた女が不安そうに俺のコートの裾を握っていた。

03 『対天人育成用教育学科女子学園』【挿し絵】（後書き）

学生編の始まりです。

主人公達の名前やヒロインの名前もここから出し始めます。

プロローグ2だと思っていたら丁度良いかと思われます。

04 『木枝に揺れるマカ』

「い、言って無いわよね。その……あのこと！」

俺の目の前でうう〜とか唸っていた金髪は顔を真っ赤にして怒鳴る。そんな大声出さなくてもきこえるつつつのに。指で耳を塞ぎながら少しだけ衝撃を和らげた。

分からない人もいるだろうから説明すると、目の前にいる腰までの長い金髪。昨日助けに入った俺を引つ叩いた張本人だ。

俺は心が広くないからあえて言おう。結構痛かった。予期していない攻撃は痛みが3倍、覚えておくといい。

感謝されるなら良いが、しつき……あの現場を見たくらいで叩くのは幾らなんでも腹が立たない方がどうかしている。美少女だから何しても許される訳ではない。

学園の敷地内にあるカフェテリア。

そのこのオープンテラスで黒いロングコートを着ている男と日本では珍しい金髪、それも美少女が見方によっては痴話喧嘩を繰り広げているのである。登校中の女子達の視線を一手に引き受けている。

話題の独占だ。ここ女子学園だ。男がいるだけでも視線が集まると言うのに。

「お前、授業は良いのかよ……」

「そ、それより何より話されていないか心配なのよ！それを脅しのネタにされたり……そ、それで色々……色々されて……」

男が女子学園にいることに疑問を持つ前に己の問題か。図太いなこいつ。

うんざりしながら自分で買ったホットのエスプレッソを煽る。ちまちま飲むのは性に合わないな。これで徹夜の眠気が飛んでくれた

ら尚良いのだが。

そついや事後処理が大変だったから忘れてたが、俺のスボンってこいつのあれが染み込んでるんだよな。忘れてたし、目の前の金髪もまだその品を履いているとは思うまい。暴露したら脚鎧で襲い掛かられそうだから止めて置くが。

「きつとあたしが抵抗しても止めてくれないのよ……それどころかもっと興奮して……い、いやぁ獣！」

勝手に妄想して勝手に赤面して俺を強姦魔扱いか。しばくぞこの女。

「バナナを啜えてる写真を撮らせるとか、縄で縛られたりするんだわ……絶対に許さない！」

> i 3 2 8 6 4 — 2 1 3 <

今ので俺を殺害リストに加えたみたいだな。来たら返り討ちにしよう。

とりあえず頼んだ物は飲み終わったので席を立つ。会計は…この女が頼んだ抹茶オレの代金を出すのは癪だが払っておくか。

伝票を取るとすぐさま会計に向かう。

ぼわぼわした雰囲気のお店員さんが出て来て伝票の代金をレジに打ち込んだ。

「はい、エスプレッソと抹茶オレで400円ですね」

「安いな……ほい、丁度。美味かったよ、綺麗なお姉さん。また来る」

「あらら口が上手いですね。彼女さんがshitしちやいますよ？」

なぜに嫉妬を英単語に置き換えたのかはわからんが来るのは少し遠慮しようと考え直した。

「それから監禁されてSとかMとかされて……ああ、あたしは違うの！SとかMとか……そういうのに興味はないんだから！か、勘違いしないでよね！アンタがやりたがったから付き合っただけであげて
あれ？」

きつとあいつのことを知っている奴は下ネタを空に向け連発しているあいつに驚くのだろう。くわばらくわばら。

（んー、視線が気になる。男が物珍しいのか不審者と思ってるかどつちかだな）

嫌だな、編入のこと通達されてなくて不審者に見られてるってのは。珍しい方にしておこう。

それはともかく、現在は登校の時間だ。やっぱりというか当たり前前と言うべきか、通りを歩く俺の視界には女子しか映らない。

違っんだよ、断じて視線が追ってる訳じゃないんだよ。石畳の通学路を歩いて登校しているのが女子だけなんだ。

俺はまだ編入していないから授業も出ないし、通学路を逆走しているのも目立つ原因なんだろう。

（嬉しくもありむず痒さもあり。声掛けて来てくれるならずっと楽しただけだな）

どうやら女子だけの空間でフレンドリーさを求めるのは難しいよ
うだ。

視線が合つと逸らされ、こつちが逸らすとまた観察される。研究動物にでもなつた気分。

こつなつたら観光者にもなつた気分で色々見ていこう。景色が綺麗のは確かだしな。アメリカじゃ、廃墟になつたビル街やコンクリートジャングルとかしか視界に映らなかつたし。

「お、下ろせ下ろせおゝろゝせゝッ！」

なんだろうな。昨日くらいから俺は面白い者ばかり会うようになってしまつたみたいだ。

前方に変なのが見える。道の端っこ、洞窟コウモリよろしく足の裏が高い木の枝にピツタリとくっ付いた女子生徒。腕をバタバタと動かして…あれかな、落ちたいのかな？頭から。

いやしかし、あれだね。捲かれて見えている健康的なへそ。ライムグリーンの下着…眼福だ。ちよつと拝んで置こう。手拍子三回。

「ちくしょうバカ神葬具！ひゝん！うわっ！高いし！めちやくちや高いし！下ろすな！わたしが下ろせつて言つたら下ろせ！今落としたり主人の頭蓋骨が夏のスイカみたくなるぞ！」

そう言うといきなりジタバタを止め、腕を組んで唸り始める。

かと思つたら突然死人のような顔になつて、

「……………あゝ、血が上つて来た…………。死ぬ…………こんなパンツ丸出し状態で頭に血が上つて死ぬとか…………まだ飛び降りとかの方が綺麗だよな。うっ、解決法を考えようと思つたけど…………あ、ダメだ…………頭が真っ白になつて来た。神様、今会いに行つてやう…………わたしが叩き潰してやるから…………こんな運命にしたテメエを呪うがいい…………」

本当にぐったりしてしまった。

顔見るとかなり可愛いな。ショートヘアに飾り気のない力チューシャ。幼児体型ではあるが黒羽ほどでもないし。いや、絶対Aだと思っけど。身長も中学生くらいだろうけども。

はい、手を重力に従い逆さ万歳にしている彼女の右手にご注目。大剣の刃、その背と腹に嵌め込まれた2振りの双剣。重複神葬持ちだ。

「……おお、なんだ、その金色の水を飲めば良いのか……？」

世界で10人いない重複神葬持ちがこんな奴で世界は大丈夫なのだろうか。今本気で世界を心配してしまった。

説明すると、神葬具って言うのは本来一つしか持てない訳じゃない。生きている内のたった一回。現在、神葬具持ちのほぼ全ての刷り込みで使用される天人は下位。つまり歩兵みたいな物なのだが、稀に中位の天人と刷り込みを成功させる者がいる。下位の天人を殺すことすら危険なのに、その倍増しの強さを誇る中位の天人。

つまり殺すことも難しく刷り込みにも全く反応しない。

だが例外は存在する。中位に認められて刷り込みの成功。武器が二つや三つ付いて来るなんて話も聞いたが。それが10人にも満たない重複神葬持ちである。

俺だっけ話には聞いていたが、実物を見るのは初めてだ。

「やゝめゝろゝ！うえ……血が頭に回ってるのに人を振り子みたいに揺らすな〜！」

おお、顔面真っ青から息を吹き返したか。体の作りなんかも若干変わったりするかも知れないな。

疑問に感じたのもっと揺らすことにした。

「人が止めるっていつてんのになんでもっと揺らすんだよっ！……うぷ！？ ……神は信じていないにしても仏もいねえ……。まさか助けを求めて、近付いて来た奴に振り子にされるなんて……世界を呪ってゲロってやる……」

まさかの嘔吐宣言に慌てながら少女振り子を止める。本当にゲロられたら描写として形容し難くなること請け合いだ。モザイクとか掛けなきゃいけないなんて嫌だぞ。

酔ったせいかわ青白い顔している彼女の右手に握られていた大剣が滑り落ちて、地面に突き刺さる。

「あわわわわわわわわ！」

落下した大剣に逆さの秘密があったのか、焦った声の後に大剣へ続くかの如く落ちる彼女。

それを優しくお姫様抱っこで受け止める俺。完璧だ、これで俺はきっと少女の中で通りすがりの紳士にレベルアップすることだろう。

「大丈夫かお嬢さん？」

「お前のせいで大丈夫じゃないんだよ！喰らえ怒りの右ストレート！」

助けた女の子からまたもや暴力を喰らってしまった。

しかも今度は拳と来た。人を助けて認められないとは、世知辛い世の中である。

というか酔いから覚めるの早いな、おい。これも重複神葬持ちだからなのだろうか。

遠くで大きな鐘の音が響く。俺の頬に拳の痕が無ければちよつとした結婚式の新郎新婦のようだ。もう鐘が祝福してくれているよう

に感じる。

「幸せにするよ」

「何言ってるんの!? 何言ってるの!? っていうか今の始業の鐘だよ思いつきり遅刻だよ! 言い訳が思いつかねえよ! なんだよ朝に神葬具の練習をしてたら木にぶら下がって男にお姫様抱っこされて遅刻しましたとか! わたしが教師ならその生徒を石で殴るぞ!？」

04 『木枝に揺れるマカ』（後書き）

はい、サブタイトルのまんまな内容です。

今回から本格的な新キャラ登場です。金髪もちよこちよこ出てきます。

ヒトイン出番少ないってなんだ、ワロス。

出来る限り二日に一回ペースで投稿したいと考えています。

05 『たこ焼きの香り』 【挿し絵】

「へえ、男のお前でも女子寮に入れるんだな」

「それは俺も思った。国が許しても寮生が許さなそうな気がする」

俺は隣で歩いている女子の意見に同意する。黒羽が無理矢理意見を捻じ込んだとは言え、許容範囲つてもものがある。人間それが爆発する頻度は比較的多いのだ。

「ま、いいんじゃないの？わたしは問題起こさない限り良いと思うけどな」

言葉使いの割りに人差し指を頬につけて考え込んだりと仕草が可愛いのはどうなんだろう。

とりあえず寮部屋の番号を生徒手帳で確認する。一番後ろのページに『C-201 白レッチ』と記されていた。2人1部屋なのに俺1人なのはやはり男だからという配慮なのだろう。

アメリカにいた頃は軍隊の奴と盛り上がったたり神葬具使い同士で戦い合ったりと結構騒がしかったので、少し寂しい気がする。

「そっぴや、お前は授業じゃないのか？木からそのまま来てるけど」「どうせわたしはサボれる口実が出来れば良かったしな。これで怒られずに済む」

どうやら優等生とは程遠いらしい。重複神葬持ちだからって特別待遇はないと思うんだが。

さつきから俺の隣を欠伸びながら歩いているちっこいのは、^{さき}「勾坂^{まが}舞佳」という明星学園2年生。つまり1年に編入する俺の先輩に当たるのだが、

「いいよ、敬語とか面倒だし」

「じゃあバカって呼ぶな。名前の方が使い易くていいな」

「舞佳つつつてるだろバカって言うな！っていうかお前ホントに遠慮って物知らないな！背か！わたしの背が低いからかこの野郎！」

なんか容姿とかを差っ引いても敬語要らない関係でやっていける気がする。

だがこれ以上からかい続けると涙目の彼女が大剣を出して来そうなので止めて置く。言うだろ、侵攻時より引き際が大事だって。

「はあ……はあ……からかうのは良いがそれをした時がお前の最後だと思えよ……ッ」

釘を刺されてしまった。

これからはわからない程度にからかう事にして置こう。

「舞佳の身長は何センチでちゅか？」

「あ？146……ぶっころすぞお前！やっぱりあれだ！ここで真っ二つにして桜の木の下にでも埋める！テメエを埋めたら桜が枯れそうなのがそれでも埋める！」

ぶちギレた。

コートの中の飴ちゃんをあげて気を沈めて貰った俺は、先程まで火を吹かんばかりに荒ぶっていた舞佳を隣に寮のCを探していた。

ちなみに寮はA～Iまでであり、A～Cまでが1年、D～Fまでが2年、G～Iまでが3年の寮になっている。A寮の隣にB寮、では

なく。なんかランダムに建てられているので探すのが大変なのだ。

「おいおい……なんでAの近くにDがあるんだよ」

「なんか学年同士での馴れ合いを多くする為らしいぜ。気に入った奴なら天人出た時のグループ分けも学年別で好きに出来るし。ほら、神葬具が弓の奴とかどうしても前衛欲しいじゃん。無理に誘うより部活の先輩ってな」

なるほど。寮生活で親近感を持たせようってことか。

「白はこの寮等なんだ？」

蜂蜜レモンを舐めながら訊いて来た舞佳に生徒手帳を開いて確認させる。

「へえ……お前白レッチって言うのか。どっかで聞いたような苗字……って寮……わたしのEの隣じゃんか」

目に見えて脱力するの止めてくれませんかね。

そりゃちよびつとからかい過ぎた気もするがお茶目なんだよ茶目っ気。

「隣の寮同士つてちよこちよこレクリエーションしたりすんだよ。神葬具使い同士で対決したりバーベキューしたり。嫌だぞお前と一緒にピーマン焼くとか！」

なんでピーマン限定なんだよ。肉にしる肉に。串が緑一色とか罰ゲームだろ。

「えっと、A寮がある……ってことはこっちか。付いて来い、こっ

ちだ」

流石に通い慣れた道。今度は舞佳が俺を先導してずんずん進む。いや、こうして後姿みてることやっぱり小さいな。マスコットのな趣きがある。アメリカとかだと長身な美人しかいなかったから、こういう小さな美少女は見ていて飽きない。

146の高校生……なんだか嘘じゃないかと疑ってしまった。実はもっと低いんじゃないだろうか。

今度は周りを見渡す。石畳の道に屋台なんかも出ている。

「お、たこ焼きだ」

「はいはい道草してんな寮についてから買いに来い」

耳を引つ張るまでしなくてよくないか。久し振りに見た日本の風景が懐かしいんだよこっちは。

あゝマヨネーズにソースの匂い。思い出したんだけど朝飯食ってないんだよな。

「舞佳。たこ焼き奢って」

「何でわたしがお前に奢らなきゃいけないんだ！むしろお前が奢れ！ここまでの迷惑料で！」

「おじちゃんたこ焼き二つ」

「いつの間にか買いに行ってるし！どうやって抜け出したお前！ああ……わ、わたしも食べる！おじちゃん、もう一個！」

> i 2 5 6 9 5 — 2 1 3 <

「はむ………んでだな。緊急招集時は寮内にバカデカイアラートが鳴るから……むぐ……寝てても飛び起きるぞ」

緊急招集。

つまり天人の出現をリーダーが感知すると、学生は追撃体制に移る。一刻も早い行動が必要で、風紀委員は常日頃、交代制で警備役を買っているらしい。全て黒羽からの受け売りだ。

アメリカにいた時は目視で天人の群を発見すると雄叫びをあげる奴がいて。それを合図に皆が騒ぎながら武装整えて戦い始める……そんなアバウトな戦い方だった。それでも持っているんだから流石アメリカ。軍隊も常時最大火力である。

「勝手は違つたろうけど、出張るのは殆ど3年とか教員だからな。わたし達が出るのは天人の出現ポイントが前以って分かった時とか、戦争並みの全面对決みたいな、規模のデカイ時だけだ。やっぱり、半人前は出したくないってことなんだろうな」

じゃあなんであの金髪は天人が出た時首都の中心街にいたのだろうか。

今度会つたら抹茶オレの料金徴収ついでに聞いておこう。勘違いするな、料金徴収が最重要だ。

「ほい、ついたぜ白」

カメラ目線で決めながら最後のたこ焼きを頬張っていると舞佳の声が現実を引き戻す。

目の前にヨーロッパ建築だろうとツツコミを入れなくなる建造物がそびえている。何階建てなんだろうなあ。

「ここがC寮だぜ。それと、向こうに見えるのがわたしの住んでるE寮だ」

舞佳が指差している方を見ると、通りの向こうに同じような建物

発見。わからねえよ、どつちがCでEなんだよ。

「案内だけで終わる授業って楽だよな。はむっ」

働いた後の飯は美味いとしても言いたいのか。お前働いて無いぞ。

最後のたこ焼きを頬張って俺の持っているビニール袋にゴミを入れると、学園までの道へ走り出す。

「そんじゃ、わたしは午後の授業に出たいからここら辺でな。結構楽しかったぜ、白」

「おう、またな。それとあんまり走るとライムグリーンが見えるぞ〜!」

聞いてから気付いたのか、焦りながらスカートを整えようとする舞佳は目の前の壁に気付かずに 「あべん!」 衝突した。良い子は前を見て歩きましょう。

「……………あ?」

突然視線を感じて、C寮の屋上へと視線を向ける。

そんな少年と少女を、監視するように見つめる人影。

長く、柔らかな白髪が風に揺れ、その手に握られた黒い鎌が鈍く光る。

寮の屋上とはいえ、かなりの高さなのだが、少女はそんなことに表情を一切変えず、鎌を抱き締めながら縁へ屈む。

(あれが……普通の人にしか……見えないけど)

少女と別れた少年へ視線を送っていると、突然少年の視線がこち

らを向く。目が、合った。確実に、こちらに気付いている殺気のような雰囲気、少女は瞬きをする。

(気付いた……?こっちに……?気配は消してる……答)

困惑しながら身を翻す。

その瞬間少女の姿は消え、後には黒い羽根が幾枚かふわふわと漂っていた。

05 『たご焼きの香り』 【挿し絵】 (後書き)

舞佳の登場です。

武器は大剣&双剣。彼女の出番が現段階で一番多いでしょうかね。

06 『金髪、再来。それと鮭の皮』

「んー……そうか。飯は一旦外に出て食堂に行かなくちゃダメなんだな」

生徒手帳に書かれた案内図を参考にしながら通りを歩く。

現在夕方の6時。10分前くらいに集合して6時30分から食べ始めるらしいので早く出て探そうと意気込んでいる所存である。

もう夕日は沈んでしまつて、街灯で照らしている通りが神秘的な風景に見えてくる。

こう見るとヨーロッパみたいな外見も良いものだ。見た目を重視する黒羽らしい。ここにいたら褒めたいくらいだ。

俺と同じように通りを歩いている私服の女子生徒達。

あんまり人数が多くないのはギリギリで間に合うように調整している生徒が殆どだからだろう。

(まあ、好奇の視線は絶えないんだけどな)

そこまで男が珍しいんだろうか。共学からここに入った生徒もいるに違いないんだが。

「おーい！白ー！」

知り合いがいるだけで心強いつていうのを実感した。

後ろから走って向かってくるちびっ子に手を振る。遠目で見ると更に小さいな、本人気になっているみたいだから茶化す程度に済ませているけど。その代わり元気だからマスケットキャラ的な存在だな。他の女子生徒の視線が集中しているが無視しよう。

「ふう…白も随分早いな。まだ20分前だぜ？」

「いや、道に迷ったら不味いなって。でも他の生徒について行けば良いって今更気付いた」

息を整えた舞佳が、俺の隣に並んで歩き出す。黒羽で慣れたこの身長差が、傍目から見たら痛々しい。きっと買い物をしていたら兄妹と間違われること必至。

昼間の制服とは違い、健康的な脚を露出したショートパンツに、赤いスニーカー。活発的な印象を与える舞佳らしい服装で、素直に似合ってるなと思ってしまう。やはり言葉遣いとかに難があっても可愛いからな。頑張れ元気っ子。きっと高校生からだ身長は左程伸びないぜ。

「引越しは終わったのか？」

「荷物は元々少ないし、おやつ前には終わってた」

「お前の部屋って殺風景そうだな。こう……ベッドだけ置いてそう」

「俺の部屋は牢獄かつ。机も本棚ちゃんと置いてある！」

失礼な舞佳の歩調に合わせながら食堂に向かう。なんかこいつの歩調に合わせると早歩きみたいだな。脚は長いんだろうけど身長に致命的な難点を抱えている。

「そっぴやさ、学校で放課後にお前の話されたよ」

なるほど。好奇の視線が増してるように感じていたのはそれが理由か。

どこまでの説明かは知らないが、ここに編入されるだけの理由。神葬具の世界最強くらいまでは伝わってるんだろう。じゃなければ、いきなりの男子の編入を女子学生が納得する筈ない。それ聞かされ

ても男の編入反対派はいるんだろうけど。

「世界最強で、アメリカで大暴れした神葬具使いって言うのは聞いた。ついでに学園長の養子って言うのもな。騒ぎになってるぜ、尾ひれが付いて。説明にしてももうちょい言い方ってもんがあるだろーとは思っただけどよ」

隣のちびっ子は昼間の態度と変わらず、鼻歌混じりに隣を歩いている。

「……なんで俺のことを聞いて近付いて来るんだ？」

正直、世界最強とかそういう説明は無くして欲しかった。仕方ないんだろうけど、きつと近付いてくる奴が少なくなるから。

アメリカでだってそうだった。近付いてきたのがムードメーカーの男で早めに馴染めたが、神経質な奴が多い日本で、こんな肩書きの奴を早々と受け入れる奴なんてそうそう居ないだろう。

訊くと舞佳は不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「別にお前はお前だろ？昼間のことが無くても、わたしはお前に話し掛けたと思うぜ」

ああ、アメリカのあいっと同じこと言うんだな。このちっこいのが日本でのムードメーカーになってくれるんだろうか。

「……はは、お前って物好きだな。頭撫でてやるっ」

「子ども扱いすんなっつってんだろ！年上だ！こっちの方が年上なんだぞ！わかってるのか！」

食堂は広く、2寮毎に入れ替えて食事をするシステムになっていた。俺達のC寮はE寮と同じ枠組みで最初の班。30分で食べ終わらなきゃいけないというタイムリミット付き。

食堂のおばちゃんに飯を注文し、出て来た焼き魚定食 曜日別に魚が違つらしく今日は鮭だった を受け取るとテーブルを1つ確保している舞佳の元に向かう。

舞佳が麻婆豆腐定食を既に食べ始めていたので、俺も席に着こうとした時、

「や、やっと見付けたわよ！」

もう一人物好き発見。今度は紅いミニスカートに薄い星型の刺繍が入った黒ニーソを履いている金髪だ。外見だけなら人魚も真つ青だが、喋ればメドウーサが真つ青になりそうな性格してる。

というよりまだ敵対心を持ってたのか。執念深いな、お前。怒りたいのはズボンをクリーニングに出さざるを得ない状態にされた俺の方なんだが。

「ほい、200円」

小便ズボンの文句を言うのも面倒だし、丁度良かったので予告通りに徴収を開始する。

手を出すと目の前の金髪は首を傾げて、

「は？」

と間抜けな声を出した。突然何を言ってるんだこいつみたいな顔。美少女がそんな顔しちゃダメだ。

「いや、カフェの抹茶オレの代金。立て替えといたんだから払ってくれ」

「うわあちつちえこいつ。200円くらい奢ってやれよ……」

麻婆豆腐をご飯に掛けて牛丼さながらにかき込んでいた舞佳が、女子目線からの抗議を上げるがこの際無視しておこう。つかそんな食い方する奴に女子目線は似合わん。今時小学生でも行儀良く食べるぞ。

「ああー、確かにそれ気になってたのよ。ほら、200円ピッタリ」

ちゃんと律儀に財布から200円を出して来たので、冗談半分だった俺は固まってしまった。

こいつには理由をつけて払わないかもと疑っていた俺を殴って土下座させなければなるまい。金を握った金髪の手を押し返す。

「……冗談だ。取っておけ。それは受け取らない」

むしろこつち側から謝罪料で1000円払ってあげたいくらいである。

「まあそつちがそう言うなら。今度あのカフェで200円分奢ってあげる」

今時珍しいくらい律儀な奴だな。ここまで素直だと何かの詐欺に騙されて行くところまで行かされてしまうかも知れない。神葬具持ちなんだから状況は打破するだろうけども。

財布に金を戻すと、金髪は再び挑戦的な視線を向けて来る。

「アンタ、あたしをカフェに放置したわね！」

「なんか妄想に浸ってたみたいだから邪魔しない方がいいかなあと。決して面倒だなとスルーした訳じゃないからな」

舞佳が後ろで「絶対後者だな……」とか呟いている。

分かっていても口にするんじゃない。面倒事を回避するには、否定し続けるのが一番なんだよ。

「アンタが声かけてくれないから……あたしは遅刻して教師に教科書で殴られて！しかも角よ！？あの鋭利な凶器って言っても過言じゃない分厚い教科書の角！ムカついて殴るうにもアンタはどこに行っただかわからないし！」

転校生だしまだ未紹介だから当然だよな。

というかここにいるんだから、この金髪は俺と同じく寮か舞佳のE寮なのか。寮にいる時に出会わなくて良かった。もしかしたらこいつが逆上して神葬具出すかも知れないしな。割りとは本気で。

半ば呆れたような目で見ていると名前も知らない彼女は人差し指で俺を指す。こらこら、マナー違反だぞ。

「昨日のお礼……言いたかったのに……」

小声過ぎて聞こえなかったが文句の類だろうか。

昨日のことを感謝されても、キレられる言われはない。まさかこれが日本特有の逆ギレという奴か。怖い国だな日本。アメリカでは拳で黙らせればそこで文句が終わるって言うのに。

「いや、殴られたのとか俺のせいじゃないし」

なんか金髪の方　主に頭部辺りで　何かがぶちリツと切れる音がした。

「ここに宣言するわ！明日の放課後、あたしとバトルしなさい！」

「うわ、この鮭美味いな。」飯と合うようにちょびつと塩が効いてるところが更に高ポイント」

「一切れよこせッ」

俺の鮭を褒める言葉がナレーター真っ青だったのか、飢えたハイエナのように舞佳が俺の鮭を奪う。取り返す間も無く奴の小さな口に鮭が吸い込まれた。

「テメエ俺が取っておいた通な部分の皮をこつそりと！許さねえ！お前のファーストキスと等価なのに！」

「わたしのファーストキス安いな！？なんだお前の中のわたしは尻軽なのか！？ まだ一回もしたことないのに！？」

「人の話を聞きなさいよ！」

無視されていた金髪がキレてテーブルを叩く。その反動で定食に付いて来た味噌汁が少しトレーに零れる。

だが俺の心の傷は金髪の怒鳴り声くらいじゃ微動だしない。鮭の皮を求めて禁断症状が出始める。

「だってお前……俺の皮をこいつが……ッ。舞佳、等価交換だ。唇を差し出せ」

「あれマジだったのか！？ 誰がやるか鮭の皮一枚に！重過ぎるだる鮭の皮！」

テーブル越しに『鮭の皮の重要度』議論が勃発し掛けた時、更に金髪がキレて風が吹き荒れる。

「鮭よりあたしの話を、」

「さあ舞佳！簀巻きにされて今朝の木に吊るされるか俺とキスするか選べ！」

「なんで選択肢が両方重いんだよ！選択の余地が無いぞ！？誰かから貰って来るとかそういうヤツはないのか！？」

「聞けつつつてんでしょバカ！鮭の皮は良いから決闘よバトルよ闘技場よ！」

その後も決闘が明日の放課後と決定したり舞佳へのキス未遂事件が勃発したり事態を見かねた2年生が俺に鮭を一匹くれたりと……
ん？重要なことがついみたいに記されてる？

関係無い。今の俺には頂いた鮭の方が大事だ。

「良い！？覚えときなさい！世界最強だろうとなんだろうと、あたしが倒してやるわよ！それで……勝ってから昨日のお礼を言っ

……素直に、カッコ良かった……って言って……」

「あ？まだいたの？」

「殺すわ……アンタのその豆粒みたいな脳味噌を更に縮めてあげる

……ッ！」

なんかまだ名前も知らないのに怨まれ度が急成長してる。

「あたしの名前は小波こなみ 楓かえで！1年！覚えておきなさい、白レツヂ

！」

……あ、C寮なのな。こいつ。

06 『金髪、再来。それと鮭の皮』 (後書き)

はい、次回からは転入編に入ります。新キャラ多いです。

07 『編入先は女子だらけ』

教室、といつても難壇式なのでそう言っているのかわからないが、朝のホームルームで転校生紹介。どこもかしこも、通過礼儀は同じらしい。

着慣れない白と青が基調の制服　即興で作られた物らしく本当に女子制服とデザインが似ている　を嫌々着た俺にもその通過礼儀の洗礼が待っていた。

転校は慣れないな。今回は見渡す限り女子しかいないからもつと落ち着かないんだけど。背後の黒板に思いつ切り頭突きしてこの場を凌ぎたい気持ちに駆られる。

「えー、今回『男子神葬具使い特別推薦枠』ということで転入して来た白レッチくん。皆、仲良くするように」

うわ、やべえ場が無音だ。胃がキリキリする。

さっさと挨拶をしよう。無難なヤツにギャグを織り交ぜながら挨拶をしよう。それならこの場をやり過ごせる筈だ。

「白レッチです。男子は俺一人みたいだけど、畏まらなくても良いし、好きな呼び方で良いんで。とりあえずこの学園にいる間よろしく」

おい、どういうことだ。ギャグも何も無い上に場が静まり返っているぞ。

先生ー、保健室に居座ろうと思うんだが推薦で入ったら登校免除とかあるんだろうか。本気でそんなことを聞こうとした時、一人の声が聞こえた。

「思ってた感じと違うね」「もつと筋骨隆々かと思ってたんだけど」「わたしは結構タイプかな。彼女とかいないなら早い者順だよね」「かなりカツコイんじゃない!? 春が来たわよ女子学園に!」「席が後ろの方にも情報か写真ぶりーず!」

わらわらと姦しい騒ぎ声が広い教室を満たす。

担任だと思われるスーツ姿+メガネの先生に(これは良いんでしようか)と目で訴えると首を横に振って諦めるように溜め息を吐いた。

質問タイムの到来である。根掘り葉掘りとはこのことだ。

Q「彼女はいるのー!? いなかったら好みのタイプはー!?」A「別に性格が清楚なら良いんじゃないか?」

Q「世界最強ってほんと!?」A「なんか喧嘩っ早い奴がいてそれをフルボッコにしたらいつの間にか」

Q「学園長がお母さんの!?」A「いや、義母だけど……」

計50問くらいこんな質問がずっと続きました。

25問辺りからテキストウに答えてたよ。今日の夕飯何にしようとか考えながらな。

自由に座っていいと言われたので、何故だか5人掛けの席に1人で座っている女子生徒の隣を選んだ。

好奇の視線が一瞬でハイエナの目へ様変わりしたので出来る限り静かな場所にしたかった。他意はない。

「え……」ここで良いの?」

何で1人で座っているのかと聞きたくなるくらい可愛い子だった。

ポニーテールにまとめている髪に気遣い上手そうな大和撫子の雰
囲気。吊り上がってはいいないが意思の強そうな瞳。制服の下から自
己主張している適度な胸。うん、金髪にこの子を見本にしると等身
大ポスター送りたいほどだ。

「いや、ダメなら移るが……ちと視線が怖くてな」

「ち、違うよ!? ダメな訳じゃなくて……その、もう1人の子が
問題なんだけど。後悔しないなら……どうぞ?」

なるほど。1人じゃなくて普段は2人で座ってるのか。

それで他の奴が座らないのはもう1人のせいと見た。なんだろう、
不思議ちゃんなのか。それとも問題児なのか。

不良系でも仲良くする自信があるぜ。アメリカで培った喧嘩腰を
披露しよう。まずは拳での語り合いからなんだが、これは相手によ
って省略もありだ。

「では、1限目の天人学はこのまま開始する。レッヂくん、野々宮
に教科書を見せて貰うといい」

日本には天人学なんて物が導入されてたのか。初めて知った。律
儀な日本が作りそうな教科だな。アメリカじゃ軍隊仕込みの大雑把
な知識しかないから有難い。

それより野々宮って…隣の子だよな、やっぱり。

「すまんのみや、で良いのか?教科書見せてくれ」

「良いよ、頼まなくても!も、もうちょっと近くに寄るね……?」

長椅子で少し距離が離れていたが、教科書を見せる為に恥ずかし
がりつつ野々宮から歩み寄ってくれる。

気遣いの出来る良い子だ。この席を選んで良かった。こんな良い

子がいるのに、他の生徒が寄り付かなくなるほど問題児な同席者。日本刀を常備してたりサングラスを愛用している不良レベルじゃないと、この子の良さは相殺出来んぞ。

「ちなみに僕は”野々宮 灯火”だよ。宜しくね」

「おう、白……って紹介されてるか。こちらこそ宜しく、灯火」

友達作りに全然困らなくて良かったと安堵しながら言うと、それに灯火が反応して席を立つ。おっとり気味の性格とは裏腹に、驚くほど見事な起立。何か変なことを言ったか。今の発言の中にそれらしい言葉は無かった気がする。

「ええッ!？」

「……いきなり奇声を上げるんじゃないぞ野々宮」

突然の綺麗な起立に担任も驚いたのか、少し躊躇いながら注意する。

その注意をされた灯火本人はと言うと顔を赤くして「は、はい……と返事をする」と力無く席へ舞い戻った。起立と着席の落差が激しいな。

しかし何に反応したのか全然わからないんだが、不自然な行動をする灯火に、

「どうかしたのか?」

耳打ちすると「ひゃう……ッ」と言いながら距離を広げられる。最近の日本の女子は恥ずかしがりなのだろうか。俺の鋼の心がちよっぴり傷ついた。

少し遠ざかった距離のまま無理矢理作りましたと言っているような笑顔。

「な、何でもないよ……？よ、よろしくレッヂくん」

レッヂくん……って俺のことか。呼ばれ慣れないから全然気付かなかった。

「白って呼んでくれ。ファミリーネームは慣れないんだ」と諭すと、

「な、名前で呼び合っの！？」

また注意された……結構堅実でいたつもりなのに……。

担任の注意を受けて頂垂れながら着席する。散々だ。1限の授業中で二度も注意されるなんて明星学園へ入学する前も後も無かったのになあ。

隣に座っている男子生徒へ視線を向けた。まさか初対面で灯火と……名前を呼ばれるなんて予想外。こちらとしてはレッヂくんと呼ぶ気満々だったのに。

(アメリカとかは……やっぱり男女の仲がオープンなのかな。いきなり名前で呼び合うなんて……し、白くん？それとも白ちゃん……？白さん……？お、男の人と話したことなんてお父さん以外全然なかったのにッ)

朝から奇妙なことばっかり起こる。

灯火こと僕が、朝6時に起床すると隣で爆睡している筈の相部屋生徒が備え付けのシャワールームで仰向けに倒れて爆睡していた。これは日常的に起こることなのでそこまで驚かない。彼女は寝相が

悪魔に乗っ取られたのかと問いたくなるほど悪いのである。

良い天気だなあーと窓辺を見ると、カラスが一羽留まってこちらを凝視していた。

パジャマを半分脱いでいたので、慌てて動物相手に体を隠す。

カラスが怒声を上げる。ルームメイト起きてキレる。窓を　寝起きとは思えない速度で　開けてカラスの首根っこを掴むと地面へ投げ捨てた。ここ三階なんだけど……。痛々しい効果音の代わりに悲鳴が聞こえて、投げた本人はそのままの格好でまた爆睡していた。

朝食は個人制なので、制服に着替えて階別に設置されているキッチン部屋へ。

多くの生徒が自分達の朝食や弁当を作っている中、明らかに異質な物体を形成している生徒がいた。化学実験部だったらしく、無断でキッチンを使用し、惚れ薬を作っていたそう。

完成した暁には強烈な匂いだけで惚れ薬効果が発生。目にした生徒を追い回す。

僕はその光景に戦慄し、キッチンから出て行くこととして背中が壁にぶつかる。視線が集まった時にはもう遅く……。被害は下着一式でした……。

ポロポロになりながら部屋へ戻るとルームメイトが運動着に着替えてストレッチをしていた。いつもそのままのロングの金髪をポニーテールで縛ってる。

「自分で起きたのっ!？」

日頃の彼女からは考えられないような行動に目を丸くしていると、

「今日ね!ちよっと命を賭けた戦いして来るから!準備運動とっ授

業サボってトレーニングしてくる！教師には上手く言っというて！」

心から感動していた僕を心から冷ます絶対零度だった。

屈伸していた彼女は、戦場へ向かうと思えない笑顔を浮かべて部屋を出て行く。啞然としていた僕はちよっと待っての言葉の「ちよッ！」しか言えなかった。

伸ばした手は宙を浮き……止めようとした相手は既に居なく

僕は彼女のことを報告した教師に怒られた。理不尽過ぎて高校生活の中、初めて泣きかけた日でした。

07 『編入先は女子だらけ』（後書き）

転入編開始です

08 『猛る野獣と怒れる金色』【挿し絵】

授業の合間合間で女子たちの質問責め。

途中から疲れて「ああ、そうだね」の一点張り。それでも質問し続ける女子達は俺よりメンタルが強いんじゃないかと心の底から感心する。見習いたくはない。

そんな訳で放課後、俺は慣れない校舎内の地形で苦勞しつつ、女子陣を振り切った。

どうやら俺こと白レツチは遭遇頻度が限りなく低いモンスター扱いになっている模様。見付けられることに捕まえに来るトレーナー。ポケットなモンスター達の気持がわかる。

「よ、良かったよ……白がここを通りかかって……」

扉から部屋の外を覗いて、安堵の息を吐く灯火。潜入操作並みの慎重さで扉を音も無く閉めると、しっかりと内側から鍵を掛ける。

決して嚴重ではないが、それでも無いよりはマシ。

しかし、3階に灯火がいてくれて助かった。沢山の資料を抱えていた事から察するに、教員からの頼まれ事の最中だったと思うが後で助けてくれた御礼に手伝おう。

見付からない為に電気は消し、窓から太陽の光だけが照り付ける空き教室。

これで厄介事が無ければ、隣で座っている灯火と仲良く友達会話を楽しめるのに。廊下で騒いでいる女子陣が恨めしい。娯楽が無いからといってここまで男1人で騒ぐ神葬具使って何なんだ。緊張感無さ過ぎだろ。

「A班だ！そつちにはいない！？血眼になっても探し出せ！」

「班！現在仲間割れを引き起こしたB班と戦闘中！」

「神葬具出してきただと!? 学園での展開は校則違反だろう! ええい向こうも嚴重注意覚悟と言っならこちらもひよってられない! 神葬具を出せ貴様等! E班を皆殺しだ!」

女子って怖いんだな。アメリカでの天人全面防衛線を思い出せた。きつと暴れているのは殆ど1年生だな。緊張感の無さでわかる。意味の無い場面で神葬具を展開する所とか特に、神葬具を玩具と勘違いしている様にも感じる。

窓ガラスが吹き飛ぶ音とか悲鳴とか神葬具特有の威圧感とか攻撃した時の轟音とか……きつとこのドア一枚隔てた先に地獄があるに違いない。

「白は見ない方が良いと思うよ……女の子達の殺気が伝わるから」

先程、引き戸の隙間から廊下を覗いた灯火は、覗かなきゃ良かったと心底後悔しているようである。そこまでの抗争は凄いのか。女の欲は天人とタイムマンするより恐ろしいな。

顔色を悪くしながら「僕がここに匿ってるって知られたら、僕は吊し上げられたりするのかな……?」と怯える灯火の肩を叩く。

「安心しろ。俺は食われるから」

安心させる為に親指を立てると、灯火は体育座りのまま壁に寄り掛かった。慰め方がダメだったのか、灯火の表情が前よりも青白く見える。

人を慰める行為は俺の苦手な事の上位に入るからな。外国で男を慰めたら「バカにしているのか!」と怒鳴られたし。灯火の精神的回復を期待する方が無茶か。

「……どつちにしろ見付かったら2人とも終わりなんだね。あはは、

今日は楓が起きてた時からおかしいな…？とはちょっと感じてたんだあ。でも嫌な予感がするからで学校は休めないし、仕方ないよね…巻き込まれることには楓とルームメイトになって慣れたもん…」

なんか灯火がちよくちよく出してる楓って名前、どこかで聞いたことある気がするんだが、気のせいかな。この歳で忘れっぽくなつてるとか洒落にならん。

ブルー入った灯火が、窓から差し込む太陽光を見つめながらぶつぶつ独り言を語り出ている。

「男の子と名前で呼び合うこともダメだったのかな……。だ、だって僕、男の子と話したことないし……。初めて会って名前で呼べなんて……。こ、恋人みたいで懂れて……。え、えへへ」

灯火が独り言から恋人の惚気を語る彼女のような表情になった時、料理部の扉がガタガタと震えた。音から察するに、こじ開けようとしているのか。灯火が鍵を掛けていてくれたお陰で、準備出来る余裕がある。

俺は灯火と顔を見合わせる。

「こじ開けようとしてるな」

「きつと部屋を片っ端から開けてるんだよ。鍵を掛けているのはここだけだろうし……。不味いね」

素早く対話を済ませると頷き合って窓に近寄る。ここからだっただら闘技場っていう、あの円形の建物が一番近いだろう。

素直に正面から出れば終了。脱出口は3階からの窓しかないが、やっぱり高いな。俺はこれくらいの高さなら行けるが、灯火は億劫になってしまいうだろうし。仕方ないが、あれをするしかあるまい。

「僕が神葬具を呼ぼうか!？」

手を窓辺に掛けて外を覗いていたポニーテールの彼女の肩を掴んで引き寄せる。

有無を言わさぬように腰へ手を回すと、女子特有の柔らかさ。そして桃の様な優しく甘い香りが鼻をくすぐる。楓の葡萄みtainな香りも良いが、灯火のほんわかした匂いも好きだ。

手に少し当たったマシユマロは……気にしないでおこづ。灯火のスタイルの良さを再認識させてくれて大変役得だが、そんな事考えている余裕もないし。

「必要ない!」

お姫様抱っこで抱いた灯火の「……え?」という間の抜けた声。それから狼狽する彼女を黙らせるように三階の窓から一気に跳び出す。

> i 2 5 6 9 6 — 2 1 3 <

背後で爆発の効果音。B級映画も驚きの展開で、考え通り踏み込んで来たみたいだ。

追い付かれても嫌だし、このまま闘技場まで走り抜けよう。あの金髪みたいに神葬具から供給される脚強化能力系がない限り追い付かれることは無い。

純白の光で脚を守り、屈伸の要領で、地に着いた瞬間に屈み着地。筋肉への負担と衝撃を可能な限り無くす。

「お、お姫様……だっこお」

俺は灯火の惚けた声を聞かずに走り出す。

全ては俺の貞操の為と、編入初日で仲良くしてくれた可愛いクラスメイトの為。そっぴや闘技場に来いとか誰かに言われた気もするし、忘れかけてたから丁度良かったな。

……遅い。放課後の鐘が鳴ってから1時間。

そう、きつとデートとかだったら待たせる方になるだろう、あたしが待っているのだ。

私闘で無断の闘技場使用だけど、神葬具では相手を傷付けられないフィールドだし。何より暴れ回っても闘技場にはそのフィールドのお陰で傷がつかなくなっている。見付かると厄介だが便利だ。

ただ……その、神葬具が身を傷付けない代わりに色んな意味で心を傷付けることになるのだが……うん、そこは伏せておこう。言ったらあの変態はそれを狙いそうだ。

「うーん。下駄箱にもちゃんと小波 楓って名前書いた果たし状、入れて来たのに」

気付いてないのか、あの黒コート。これは肅清しなければなるまい。

神葬具を出して準備万端だったのに、待っていたら神葬具の現界だけで疲れてしまった。何もせずなら神葬具を1時間くらい現界させられるんだなと冷静に感想を述べるほどである。

もし奴が来ても中止にしよう。万全じゃないと意味がないのよ。そう、万全を期して倒すからこそ意味があるの！アイツも今のあたしに本気なんて出さないだろうし……。

「へ、変なところで紳士なんだから……」

「誰が紳士だつて？」

問いが帰って来たのであたしは反射的に口を開く。

「あ、あああああ、あの黒いロングコートのバカが　　にやあああ
ああああッ!？」

ダメだ、こいつ声は良いのに音量がでかいから高音が耳を塞ぎたくなるほど凄い。実際に耳を塞いでいた俺は目に不満を交えながら金髪を見る。

「お前、人を告白みたいに呼び出しといて悲鳴あげるなよ…」

文句を漏らすと「人の背後をあつさり取るからよ！」と逆ギレ。

どう考えても今のは俺が被害者だろ。夢見がちだった金髪へ普通に声掛けたただぞ。待ち合わせして『だあくれだ』とか言いつつ目隠したら裏拳でも繰り出しそうだなこいつ。後ろ蹴りでも可。ちなみに俺はDMでも何でもないので嬉しくないんだ。

「っていつか何が告白よ!せ、絶対に違うんだから!」

八重歯を鋭く光らせながら唸る金髪。動物的に噛まれたりするんじゃないかろうか。甘噛みでも絶対痛いぞ、その歯。どうやったら犬の牙並みの犬歯が誕生するのか、性格にでも影響されたか。頭を掻きながら顔を真っ赤にしている金髪をなだめる。

「わかってるつつつの。決闘だろ決闘」

「そうよそれ!」こっこ告白とかふざけたこと抜かすんじゃないわよ…」

噛み噛みだな。気が動転でもしてるのか、この女子は。

ちなみに腕に抱えている女子の方は間違いない。動転していても会話が成立しそうにない。だってずっとわ言で独り言呟いてるんだよ。しかも一喜一憂したり地獄の門番に出会ったように暗くなったり。面白いのは面白いんだけども。

「あれ？アンタ、なんで灯火を……そのまま持ち帰る気!？」

「待って待って金髪。状況を見ただけで男を送り狼にするのは偏見だぞ」

傍目から見たら灯火を誘拐して来たように見えるのだろうか。何か事件が起こったら真っ先に女性が被害者の見方だぞ、それ。

女性の勢力がどの国でも大きくなっている昨今、未だに女性の方が弱いと言われる現状に疑問を抱かざる終えない。神葬具使いも女性の割合が徐々に増えている訳だし、そろそろか弱い男子が許されても良いんじゃないだろうか。

「灯火を離しなさい！」

「え、ええ!？ い、いつの間に闘技場!？ それに楓まで!？」

「こ、これは違う」

この金髪は人を親の仇のように好き勝手言う。

疲れているみたいだから手を出す気は無かったが、本格的に人権問題になりそうな物言いは抗議しても構わんだろう。

「人を誘拐犯みたいに言うのはやめた方が良いぞ、おもらし娘」

これくらいの返しなら対等だろうと選らんだ言葉だが、次の瞬間、楓という金髪からブチリツと ゴム状の何かが綺麗に切れる音。

どうやら俺の選んだ言葉は金髪の勘に触れた様だ。

目の前で無言のまま楓が屈み込む。手を脚に当ててる姿勢を見る限り、きつと神葬具の召喚。

やはり男女の関係は理不尽だ。女子が犯罪者呼ばわり。方や少しの仕返し。理不尽としか表せない沸点の違い。

「殺す……あのことを漏らしたからには許さず置くべきか…ッ」

「お漏らしと秘密を漏らすを掛けてるのかねえ……」

やばい口が滑って本音が漏れた。考えた事をそのまま口に出すのは止めるとあれ程自分に言い聞かせたのに。

急いで闘技場の端に灯火を運んで行くと、優しく下ろして「え、ええっと…が、頑張つてね？」 元の位置にそそくさと戻ると何事も無かったように楓の前に仁王立ち。

「来なさい、神葬。分け隔てなく包み込む風をここに」

爆風が楓を包み込み、俺の前で吹き荒れる。

こいつ天人とやり合った時よりマジになってないか。俺人間ですよ、貴女の味方ですよ。ちょこちょこ口を滑らせたりしたけど、ご愛嬌って言葉が存在するのを思い出せ。

風が凪ぐと、目の前には一昨日見たばかりの脚鎧を身に着けた楓の姿。

逆鱗に触れたらしい。ふうふうと犬の威嚇顔負けな息遣いをしてる。鋭い八重歯を見せながらだと、本気で狂犬を彷彿とさせる。

「行くわ。手加減したら許さない……というか殺す」

08 『猛る野獣と怒れる金色』 【挿し絵】 (後書き)

書き直し修正が大き過ぎた為、上げ直しバージョン。

前よりは大人っぽい書き方になったかな？

09 『VS神葬具十脚鎧』

俺の手に持たれた拳銃が彼女の脚を塞ぎ止める。

突風が目前で吹き荒れる様に感心していると、金髪はノーモーシヨンでバク転し、俺から距離を取った。

今の金髪からは目の前の敵を突き崩す、その一心しか見えない。

「はは。あの天人の時もそうしてりや楽勝だったろうよ」

二丁の拳銃を交互に発砲して距離を取った楓を狙うが 速い。

流石に神葬具で強化された筋力は伊達じゃないようだ。拳を繰り出さないところから察するに、神葬具の強化能力は脚回り限定ってところか。

拳銃の片方を放り捨てると短機関銃を創り出し、即座に発砲する。

「くッ!？」

弾の射出速度が短機関銃と拳銃の混雑。楓もこれには少し戸惑いながらも宙へ跳んで回避する。棒高跳びの選手張りに体を反りながら、俺の上空へ。

「はあああああああああ!」

気合を込めた滑空蹴りに対してトリガーを弾く。

銃口から発された青い銃弾は真っ直ぐ楓の脚鎧へ向かい、跳ね返される。だが跳ね返した楓の体も体勢を崩して俺への狙いを空振る。正確には、紙一重の空間を楓のライオーキックが通り抜けた訳だが。

「な、何よその武器……。神葬具同士でかち合って打ち負かすわけ

……？」

闘技場の地面を削りながら勢いを殺し、止まった楓が目を見開く。見方によっては俺の拳銃の威力と楓の脚鎧が相殺し合ったようなのか。

首を横に振ると楓の脚鎧を指差して、

「いんや。威力はお前の方が高いが、見え易いんだ、お前の場合。どこにどんな技が来るか。どんな体勢で打って出るか……とかな。顔にも出る。そして、体勢を崩しやすい場所を撃つ。ほら、簡単だ」

言葉は要らないと言つかのように突進して来る楓を、銃で牽制しながら、不意に笑いがこみ上げて来た。久し振りだ、ここまで食い下がってくる奴は。

今まで俺に戦いを挑んできた奴のほとんどは『こいつだからしょうがない』と小言を言っていたが、目の前の金髪は違う。どんなに力量差を見せても噛み付いて来る。まるで家を必死に守ろうとする番犬のようだ。

「シッ！」

目にも留まらぬ速さで繰り出された回し蹴りを紙一重で避ける。

その動作を待っていたかのように左脚でのサマーソルト。顎に当たって昏倒を狙っているのだろうそれを仰け反ってかわ躲す。前髪が風で持ち上がった。

反撃を兼ねて無理な体勢からの射撃。威嚇射撃といった方が正しいか。

楓はそれに直ぐ気付いたのか運動のお兄さん真っ青のバク転5連続で難無く安全地帯へ移動する。

「まあー……そこも俺の圈内なんだがな」

拳銃を放り捨てて意識を集中し　もう片方の手にも存続の短機関銃と同じ物呼び出した。短機関銃の二丁。ずっしりとした仰々しい重さがグリップ越しに伝わって来る。

中距離間での一方的射撃というのは嫌いじゃない。勝てば生きれるんだから正義だ。

「さあ、もつと行くぜ。火薬庫は最大出力だ」

出たら目だ。目の前にいる男……神葬具使いであることを疑ってしまう。

先ず手に持たれた次々に種類の変わる銃。拳銃から短機関銃、アサルトライフルにショットガン。手品師にでもなるつもりかと問いたくなるほど武器を貯蔵している。例えるなら歩く火薬庫。

信じられないことにあれが全部神葬具……愕然としそうになる。神葬具は天人から刷り込みで得られる武器の筈で、西洋の武器にありがちな古めかしい大剣や今あたしが装備している脚鎧なんて物がほとんど。銃器……それだけでも不可思議なのに。

（神葬具を何十と持つてる？いや、そんな雰囲気じゃない。神葬具を出す時の独特の威圧感が全く無いし。だったら、あれは何？）

またアイツは持っている拳銃を捨てて、新しい銃器を出現させる。二丁の短機関銃を向けて来る敵に八重歯を噛み締めた。

「何よそれ……ッ。弾切れも無いってこと!？」

不満を漏らしながら走る。止まっていたら蜂の巣確定だ。神葬具はダメージを与えられないが、それでも恐怖が迫って来る。

どんな天人と契約したらあんな神葬具になるのだろう。

現代兵器を真似た神葬具。そんな物が有り得るのか。天人はプライドも高く人間の兵器なんて使う筈ない。今まで見て来た神葬具でも、あの男の物は別格だ。

神葬具の能力を全力で引き絞り、銃弾の雨を駆ける。銃弾が紙一重で移動するのを感じると冷や汗が伝う。

おまけに神葬具が遠慮なしに喰らい続ける体力や精神力。泣き言を言うと限界に近付きつつある。底を尽きた瞬間あの短機関銃があたしの色々な物を奪うんだろう。

「そ、そんなの許せないッ！」

緑で色付いた風を目の前に展開しつつ、バカの一つ覚えのように猛進。

風の守り。あたしの神葬具の特性である風の制御を応用した防衛結界。ぶつつけ本番で使うのは不安だったが、どうやら完璧に成功したみたいだ。

風の守りが銃弾を受け流し、銃弾の軌道を変更。

「いつけえええええッ！」

サマーソルトに展開している風を全て乗せて、”かまいたち”さながらの風の刃を飛ばす。

これなら一矢報いれる筈という賭け。迫るかまいたちを目前に、アイツはまたも銃を構えた。短機関銃の小さな銃口がブラックホールの巨大な口に見えて背筋が震える。

銃器の神葬具の意外性に埋もれそうになるが、アイツの状況判断やそれを惑い無く実行する度胸。攻撃を避け、反撃へ移る際の身体

能力。どれを取ってもあたしじゃ到底叶わないことに差を感じた。何よりアイツは本気なんて全然出してはいないのだろう。

あたしの全力のかまいたちを難無く相殺させた男は、今度こそあたしへ銃口を向ける。

天人の殺人人形に次いで今度は世界最強の神葬具使い。戦ってる相手が自信喪失させる相手ばかりだと言うのもむかつく。

「むかつく……そうよ、銃が何よ。一昨日はもっとやばい奴と戦ったじゃない。斧槍だったじゃない。だったら……」

世界最強がなんだ。だったらそいつに少しでも本気を出させてやる。

残された体力を振り絞り風の防御結界を展開して…屈む。脚鎧に手を当てて、

「アテンド解放！」

脚鎧が吹き飛び、霧散する。後に残っているのは脚に巻き付く黄金の帯。必殺技はド派手とよく言われるが教師陣にも絶賛されるほどの派手さ。あたしの最後の奥の手だ。

風の盾を突き抜けながら、黄金に輝く脚に力を集中させる。

「確かに良い考えだ。意表を突くには打って付けだろうしな」

アイツも両手の短機関銃を投げ飛ばし、天人と交戦時に見た解放の体勢。

あの白い手が……あの男の神葬具？

解放は神葬具を母体にして瞬間的に能力を爆発させるオーバーヒートのような物で。言うなれば必殺技。悪く言えば今まで使っていた体力、精神力を共に蒸発させる奥の手。

天人との対戦時。最低1対1という決まりは、ほとんどこの解放を使わなければ天人を仕留め切れない神葬具使い達の限界の為。もし天人を2体一気に相手したら解放で力尽きた時にザックリ行かれるだろう。

そうそう連発できる物でもなく、戦いの前に神葬具を1時間以上現界させていたあたしはHPをガリガリ削ヒットポイントって発動しているのに…。目の前の男の神葬具を母体にしない解放。手の淡い白が蹴り出された黄金と衝突する。

(こいつ……ただ解放した手を前に突き出してるだけッ!?)

黄金の帯に包まれた脚。全力全開で繰り出したその蹴りを、男は白い手の光のみで抑えている。

そう、ただ突っ立って手を前に突き出してるだけ。愕然とした瞬間にあたしの風へ吹き付ける一筋の暴風。蒼い光に包まれた手の平が、拳として握られ、

「Io lo lascio」

黄金の帯が吹き飛ばされて、その拳があたしの腹部を押すように当たる。

もしあたしの頭の上にHPゲージがあったら今ので全て吹き飛ばんでいただろう。何せ、

「……はあッ!?!」

目の前の”それ”をやった張本人が目を見張る。遠くの灯火に至っては口を半開き。

体に全ての外気が当たり…肌寒い。それ以上に羞恥が増し、あたしは真夏と真冬が同時に到来したらこんなだろうか、と冷静に

考えていた。

「い、いいいいい……」

口が回らない。噛み噛みの口から出た言葉は、

「いやあああああああああッ！！！！」悲鳴である。

何故なら……神葬具の攻撃がクリティカルヒットしたあたしの服は……HPゲージのように全て消し飛んだのだから。

09 『VS神葬具十脚鎧』（後書き）

はい、全然間が開きませんでしたね。

バトルは執筆がスルスル出来てですね。丸々一本を白VS楓にさせて頂きました。

バトル大好きです。書くのも読むのも。

次からはコメディ（？）パートになります。

10 『温かい家庭、レッチチ家の場合』

まさか三日連続で叩かれたり殴られたりするとは。

そういう訳で俺の横っ面には赤い手の平マーク。一昨日は楓の失禁叩き。昨日は舞佳の王子様ストレート。今日は真っ裸の引っ叩き。俺の言い分を述べさせてくれ。全部故意じゃない。

「世界は俺に恨みでもあんのか」

ここで神はと言わないのは当て付けだ。

神だつたら俺達人間を殺したいほど憎んでいるんだから当然だわな。俺に狙いを定めているなら話は別だが。神葬具使い最強なんて言われてるんだし、案外否定出来なそうなのが笑えない。

「世界最強なんだから仕方ない。少なくとも神様は白にハートマークか」と

「遠回りで神様が殺したいランキング上位に入れるのやめてくれな
いか」

ナイフとフォークを両手に持って食卓に着いている我が義母。黒羽は学園の敷地内にある場所に住宅を構えていて……こういう時は普通嫌味なくらい大豪邸だったりするんだろうけど。

小さいんだよな、この家。2年前に黒羽と2人で都内に住んでいた時はそこまでじゃなかったんだが。黒羽曰く、俺が外国に行ってしまった事で無理に都内に住む理由が無くなっただらしい。

前々から学園と都内の住宅を行き来するのは面倒と言っていたし、当然か。

なんだかんだ言っただけで俺が海外に行くまで、ここに引越す予定を伸ばし伸ばしにしてくれてたんだ。

「　　ありがとう」

「ん、なんか言った？」

呟いた言葉が少し聞こえたのか黒羽が訊いて来たので、

「なんでもないさ。ほら、飯出来たぞー」

誤魔化しながら作り立てのからあげをテーブルに持って行く。ご飯と味噌汁、それと鯖の味噌煮込み。サラダも付け合せて置いて置く。夕食は別段がつりしていないレッチチ家の献立。

「……ナイフとフォーク要らない」

最初から何故出していたのか気にはなっていたが、ハンバーグでも作れば良かったのだろうか。

残念そうにしている黒羽に箸を一膳手渡すと俺も席に着く。向かい合わせて黒羽と、まるで合図したかのように「いただきます」が揃った。

からあげを口に入れるとサクッと固めの衣が破れて肉汁が溢れる。うん、良い出来だ。

「うわぁ……美味しくなったね。また腕上げた？」

「向こうの奴等日本食好きでねえ。暇がありや作ってたからこういうのは得意になったよ。味噌汁とかも味噌を調整しといた。向こうに行く前と同じ味になってると思うぜ」

言いながら味噌汁を啜ると、2年前の味とほぼ一緒。誤差が少し
白味噌入れ過ぎたかな。

「これじゃ、母さんの手料理とか要らないかな…」

余り表情が変わらない義母なのでわかり難いだろうが、今の雰囲気的にしゅんとしているのは落ち込んでいる、または溜め息と等価からあげを猫舌ではふはふ言いながら食べている黒羽に、

「黒羽のは黒羽の。俺は好きだったしな、母さんの卵焼き」

「そ、そう…良かった」

照れながら答えた黒羽の様子に微笑みながら食事を進める。

変な感じだな。明星学園の制服に黒ストッキング履いた義母と食卓を囲む男子学園生。背丈とか童顔とか、小学校高学年のような容姿をしている黒羽。

不思議なところもあるし、問い質したい箇所もあるが…まあいっつかと思わせるその食事風景にまた笑みが漏れる。マザコンとか言われても言い返せないな、これじゃ。

「お、美味しいね、白」

「そうだな。ほら、米粒ついてるぞ」

笑みを作りたかったのだろう。その無理に作った笑顔に笑いながら、頬の横についているお弁当を取ってやると口に含む。米だけは良いのあったんだよな。黒羽の変な拘り。

その動作を見ていた黒羽の余裕気が、少し赤く染まる。

「……女殺し鈍感男」

ソップを向きながら何かを呟いた黒羽に「どうかしたのか？」と訊くと、

「なんでもない。息子に良い様にされてる義母の図がなんだか納得行かなかっただけ」

言葉だけ聞くとエロすな感じがするな。アメリカの方だと「死んだらテメエの亡骸を抱いてやる！」とか下ネタに大らかだったから。こつという日本の言い回しは好きだ。

「でも本当に美味しくなった。やっぱりいっぱい作っていると、成長するのかな」

「さあ、どうだろうねえ」

俺が料理を本格的に始めたのは仕事で疲れて帰って来た黒羽を少しでも楽にする為。だからせめて美味しい物を食わせてやりたい、と励んだ。アメリカに行つてからは、帰ったら驚かせてやろうの一心で調理を怠らなかつた。それを暴露するのはちと恥ずかしいから言えないが。

嬉しそうにご飯をちよこちよこ食べる黒羽を観察しながら、俺も箸を進めた。

「そついやさ、黒羽。俺を呼んだつてことは、こつち何か起こつたのか？」

アメリカで暴れ回つてる最中に届いた手紙。それが切つ掛けて俺は日本に戻つて来た。

白レツヂの強制返還。簡単に言つと、今直ぐ日本に帰つて来いつてことである。我ながら簡単にし過ぎた勘が否めないな。

向こつじゃ冗談抜きで戦いの毎日だったし。強制返還の件はアメリカの方も渋々だった。何せ、アメリカは防衛線を何度も突破され掛けているのだから。

自慢する訳じゃないが、神葬具で近代兵器を召還可能なのは俺の

み。高火力な武器は神葬具に少ないし、言っても大剣とか斧類。対
物リアルライフルと比べるまでもない。

黒羽からの手紙でなけりゃ、軍の仲間もいるし、俺だって素直に
帰らなかつただろう。

「ニュース…観てないの？」

「観てない。アメリカ渡ってから一回もテレビを観てないさ。それ
に、重要なことなら黒羽から話してくれるまで待とうか迷ったけど、
随分遅いんでな」

俺の世間疎さに呆れて溜め息を吐く黒羽。仕方ない、アメリカの
戦線にテレビなんて出回ってないし。

「沖縄、取られました。これでわかる？」

「沖縄か……でかいな。沖縄にあった学園と基地は？」

内心動揺しながら黒羽を諭す。確か沖縄にはアメリカ軍と共同し
ている学園が建っていた筈。相当軍事力は溜め込んでいるに違いな
い。下手したら東京首都の神葬具部隊にも引けを取らない実力。
しかし、その実力は黒羽の溜め息で掻き消される。

「壊滅。総理が白目向いたわよ」

あー……軍備には自信があるとか公表してたもんな、あの総理。
アメリカ軍の力も借りてたし、一部の勢力丸ごと潰れたんだから、
大目玉決定。

でも妙だ。ただの中位率いる部隊ならば堅実に対応出来ただろう
に。対応が遅れたか。

「白が言いたいこと分かるわよ。わたしだって沖縄そんなに簡単に

落ちる？って驚いたんだから」

「人の心を読むな。じゃあ、何で墮ちたんだよ。沖繩」

そこまで物知らずなのかと落胆しながら茶を啜る黒羽を、ジッと待つ。なんだ、そこまで溜める内容なのか。次回へ続く訳でもあるまい。言っても中位が大群で押し寄せた止まりだ。

「来たのよ。上位が……1人でね」

「もうお嫁に行けない……」

「げ、元気出して楓！ほら、カレーだよ？カレーだよ？」

全裸に剥かれて　　と言っても白には非はないと思うけど　　哀
愁漂わせてる楓を慰めようと作って来た得意料理のカレー。少しピ
リとした辛めの匂いが食欲を誘う　　筈のだが。

「ふふ、見られた。全部」

こっちが退いてしまうほど落ち込んでいる楓に、僕も成す術がな
かった。

確かに男の人に裸を見られたのはショックだと同感出来るし、励
ましたいのだが。

(どう励ましていいのかわからないや……)

彫刻の人は裸を何千年も見られるんだからいいじゃない！……殺
されそうな気がします。

白は興味無さそうだったし！……何度も蹴られた後に窓から放り

出されそうです。

楓は優しいからそんなことしないんだろっけど。でもどうやって励ませば良いのか検討もつかずに結局「カレー美味しいよー……？」に落ち着いてしまう。ポキャブラリーの少ない僕が嫌いです……。どんよりとした重々しい雰囲気ベッドの上で体育座りしながら発する楓に頭を抱える。

とつくに食堂での夕食は終わっているし、だからこそその自作カレーなのですが、今の楓には何も通用しないのでしょうか。体験してみないとわかんないよね、その辛さ。

(戦ってて服が吹き飛んで男の人に裸を見られる　うわあ、辛い)

想像だけでここまで辛くなれるのだから実体験者は廃人化する程なのだろう。

(で、でも白なら……そこまで嫌じゃない……かも?)

お姫様抱っこの感覚がまだほんのりと残っていて、その感覚を思い出そうとしている自分に少し赤面してしまう。変だなあと考えながら楓を慰める作業に戻って　今夜も更けて行く。

10 『温かい家庭、レッチチ家の場合』 (後書き)

新しく書き直しました

これからちよこちよこ上げていきます

11 『不自然な楓』

いきなりですが、僕こと野々宮 灯火。今日こそ胃が破裂しそうです。

左側では授業上の空でペン回しをしている明星学園初の男子生徒。転入から2日後でファンクラブ作るうなんて話題が出来るのだから驚き。

確かに優しいし、昨日の戦いを見る限り強いし。カッコいいとは思うけど…それ以上に底知れぬ人。銃器の神葬具を扱ったり、1年トップクラスの楓を圧倒したりと。

そのミステリアス具合も女子の間では評判みたい。

率直に言います。今現在、この胃を締め付けるような風景を作り出しているのはこの男子ではない。

さて、視点の方向を左側から右側へ。

顔を真っ赤に沸騰させたり、過去の過ちに頭を抱え込んだり、隣の男子に射殺するような視線を向けたりと。まるで悪魔に取り付かれた少女。友人として見なくなかった友達の一面ベスト3に入る。ちなみに1位が寝相。

「灯火！なんでアンタあの男に同席許したのよ！」

鬼気迫る表情を浮かべながら小声で捲くし立てて来た楓に、後退しながら苦笑いを浮かべる。

「えっと…まさか楓と白が知り合いだなんて。出会ってすぐ友達になったの…？」

「人のおし 恥ずかしい場面を暴露して拳句の果てに全裸にさせる男と友達になれるのアンタは？」

服が吹き飛んだのは闘技場のせいで白は知らなかったと思うんだけど。

説明すると、闘技場は神葬具を半無力化する結界らしき物で覆われている。

半無力化。言葉通りの意味で、神葬具のダメージを完璧に消し去ることなんて出来ないし何かダメージを向かわせる媒体が必要だった。それが服。

授業や許可を貰った戦闘訓練では下着が残るように教師で調節するのだが、

(昨日は楓が許可無しでやったみたいだしね…)

全面的に非があるのは我が友のような気がした。教師達に見付かっていたら僕も白も含めて教育的指導を受けていただろう。

実際はテロ並みの暴動を引き起こした生徒達の鎮圧で四苦八苦していたらしい。

校舎内を神葬具の解放で吹き飛ばしたり。全裸の 浜辺に打ち上げられた水死体のような 生徒があちらこちらに倒れていたり

と。
この学園の教師になった人達は後悔の連続だ。定年まで元気に頑張って欲しい。

「こらそこ。授業は真面目に聞くように」

2日連続で天人学の授業中に注意を受けるとは思いませんでした。

昼食時、考えが纏まらず、食堂できつねうどんを啜りながら放心

状態。

黒羽が言つてた上位の降臨。一般にはまだ公表されていないみたいだが、沖繩が占領されたことは伝わっているようだ。

上が上位のことを隠蔽したいのは凄く理解出来る。沖繩が取られただけでも狼狽する事態なのに、上位が現れましたとか暢気に公表すれば、更に混乱は増す。確実に増す。

俺は知識しか無いが、上位 神の側近、10神階という物の総称である。

その名の通り、10位まで選定された天人があり、その力は今のアメリカを1体で壊滅まで陥れられると言われている。ピラミッド順で1位が頂点に君臨しており、尤も神に近い天使。

10神階になると翼の色が違い、駆逐宣言時の灰色の天使が良い例である。

黒羽は俺に、天人の10神階は生命の樹の守護天使達と酷似していると言っていたが、その言葉通りとすれば灰色の翼の天人は2位。何故駆逐宣言時に自ら地上を滅ぼしに掛からなかったのが疑問だ。きっと、天人が出現した直後の大パニック状態の人間なら、あの2位だけで皆殺しに出来たに違いない。

「重大そうな顔してどうしたのよ、最強^{バカ}」

「おう金髪^{バカ}。もう許してくれたのは嬉しいが、考え事の最中なんだ。この備え付けの塩で遊んでると良い。ああ、食堂の物だから大量には使えないよ」

「昨日のことも4日前のことも許してないわよ！っというか塩で遊ぶって何よ！心配して損したわよ！」

一回の台詞で3個も事を済ますなんて凄いな。尊敬するわ。

上の空から戻ると、何時の間にか俺が腰掛けているテーブルの向かい側に、金髪が座っている。顔を真っ赤にして鋭い八重歯をぎら

つかせている姿を見るに、腹が空いているのか。
きつねうどんのメインの油揚げを箸で掴むと、楓の目の前に持っ
て行く。

「ほらほら、油揚げだぞ」

「何の儀式よ！？ サンドウィッチ買って来てるわよバカ！」

俺からのささやかな謝罪だというのに。この金髪は締めでバカと
言いやがる。失礼極まりないな。油揚げに失礼だろ、泣いているぞ
油揚げが。

行き場を失った油揚げが箸に掴まれてぶらぶら揺れる様は悲壮感
に満ちているな。

「そっぴや、灯火はどうしたんだ？」

いつも金髪の傍らで癒し系笑顔を浮かべている灯火が、珍しく同
行していない。遂に愛想尽かされたか。灯火は粘った方だと思う。
俺が灯火の立場だったらストレスで胃が破げかねん。

「職員室に呼ばれてみたいよ」

灯火ランクの優等生が職員室に呼び出される訳か。確実に、教職
員に面倒事押し付けられてるか、授業中の注意の件だろうけども。
いや、後者だったら最優先で目の前の金髪も呼び出されてるか。

油揚げを一口で口に入れると、楓が心底嫌そうな顔を浮かべた。
軍人流の食べ方の何所がお嫌いか。アメリカの方でも、いつ何時敵
が現れるか分からないから飯をかき込むのは常識だぞ。

「アンタって、食べ方に品が無いわよね……」

「食べ方なんて個人の勝手だ。そんなことに目くじら立てると、

また怒りっぽくなるぜ?」

「誰が怒らせてると思ってるのよ!もう、知らない!」

楓はソツポを向くと、そのままの体勢で包みを破き、サンドウィッチを取り出して口に啜える。今のお前の方がよっぽど品がないと思うぞ俺は。口に出すと怒り狂うから黙っておくが。

考え込んでいた内に冷めて伸び切ったうどんを豪快に啜る。元々女子用メニューで量が少ないから、これくらいの麺が丁度なのだが、汁が全然ないのは考え物だ。素うどんでもここまで酷くない。

「……なんか、悩んでるの?」

金髪には珍しく、しおらしい態度。

そこまで気に掛かるほど、俺は可笑しかっただろうか。普通通りに振舞ったつもりなんだが。

「別に、そこまで大した事じゃないさ」

俺の返答に納得していないのか、楓が不満気な目線をぶつけて来る。

会って4日で相手の全部掌握出来たら人間関係苦労しないわな。ま、そんな相手が勘付く程、深刻気な顔してた俺も俺か。

七味を手にとってうどんにまぶしていると、楓が俺を見続けていることに気付く。

一瞬、七味を物欲しそうに注視してるのかとも思ったが、どうやら違うみたいだ。

「ねえ、アンタ、神葬具について詳しい?」

随分唐突だなと感じながら、俺の中の神葬具の情報を整理する。

アメリカに渡っていたのもそうだが、結構一般人よりも詳しくはなっている筈だ。軍事機密の書類とか余裕で閲覧してたしな。その実、見せなきゃストライキするぞって脅した結果。やはり平和的な交渉には脅しが不可欠だよな。

「そこ等辺の研究員よりは詳しいと思うぜ」

アメリカの資料理解するには難儀したんだ。このくらい自負しても良いだろ。

黒羽からアメリカの情報を逐一報告してくれとは言われていたが、その為に小難しい英単語をずらずら並べた資料を解読するのは吐き気を催すほど苦痛だった。もう絶対にしたくない。

「じゃあさ、血縁間での神葬具の受け継ぎってあるの？」

「親からのプレゼントってことか？前例は無い……っていうか有り得ないだろ。親が刷り込みしたのにその神葬具が子に渡るとか。親の神葬具はどうするよ」

神葬具は、その持ち主の死亡と同時に消失すると結果が出ている。天人との契約は刷り込みを行った人物だけに有効な物だ。受け継ぐなんて事は存在しない。

「て、天人と刷り込みしないで神葬具が生まれるとか！」

焦った口調になる金髪を、不審に感じながら首を振る。

神葬具とは結局の所、天人から奪った物。元々人間に宿っていたなんて事は有り得ない。それこそ、天人と人間の間の子供、なんてレベルなら分からなくもないが。そんな事有り得ないし。

「楓だって天人と刷り込みしたから神葬具持ってるんだろ？そうい

うこつた。元からの未知の能力なんて人間にはねえよ。全部科学で
説明されてんだから」

どんな奇跡が起こっても、人が起こせる奇跡は確立で表せる。だ
が、神が起こす奇跡はどうだ。地上を作ったり、猿に知能を持たせ
て人類にも出来る。それが、俺達の敵。神からしてみれば、自分で
生み出した飼いやに手を噛まれたって感じか。

サンドウィッチの残りを俺に放り投げて、楓が席を立つ。おい、
食べ物を粗末に扱おうと食べ物に泣くぞ。

「あたし食欲ないから……あげるわ、それ」

不気味なくらい元気ないな。どうかしたんだろっか。

食堂から去る楓の背を眺めながら、遠慮なく貰ったサンドウィッ
チを食す。ツナマヨか、中々良い趣味してるな。今度はたまごを頼
むぞ金髪。

11 『不自然な楓』（後書き）

次回は少し遅くなるかも知れませんが
誤字脱字があれば、報告して頂けると助かります

12 『舞佳の大剣、付きし双剣』

「あゝ、やばい……でじゃびゅ……」

放課後、女子達に追い掛けられるのがトラウマになり掛けている俺は、一目散に教室から離脱。真っ直ぐ寮を目指していると、目的地の通りの木にぶら下がっている女子生徒を発見。

既視感デジャブを感じたが、どうやら現実らしい。懲りないのか、こいつ。もしかしたらこいつは罠で、近付いた途端に周囲から女子が一斉に出現したり はないか。

「よう舞佳。またか」

初対面と同じ格好で吊るし上げられてるスパッツ娘に声を掛けると、「よぉ……」と手にした大剣を振りながら返事を返して来た。死人の息だが、まだ言葉を発せられる程度には元気があるみたいだ。

しかし、どういう原理なんだ、この宙吊りは。神葬具は契約した時点で持ち主の武器となる。つまりは反抗なんてしない筈。重複神葬はこんなところも普通と異なるのか。契約したは良いが、神葬具が主を認め切れてないのか。まるで反抗期だな。

腕組みをして観察する。背丈に合わない大剣もそうだが、この無理に嵌め込まれた造りの双剣。揃って1体の天人から刷り込んだにしては不恰好。素人のプラモデル製作員が無理矢理やってみましたが否めない造形。

双子同然に生まれた大剣と双剣ならば造りも一緒だと思っただが。

「そろそろ降ろしてくれ……マジしぬ」

すまん、持ち主の危機を完璧に忘れてた。

「まだ気持ち悪い……」

あんだけ綺麗な宙吊りを長時間保ち続けてたら、平衡感覚も逝かれるに違いない。

重要書類を忘れたサラリーマンのように顔色を真っ青にした舞佳を隣に、寮への道を進む。これも案内された時と同じだな。

「お前ってマゾなのか？」

「違う！……おえ、大声出したら吐き気があ」

思ったままの感想を述べると、舞佳が反抗しながら青白い顔をした。

本気で戻しそうなら、そこ等辺にある店に駆け込んでくれ。ここで戻されると俺まで蔑みの目で見られる。

「戦う以外に出すと…神葬具が制御出来ないんだよ…。言っとくけど、趣味じゃねえからなッ」

宙吊りが趣味の女子学生って特殊だよな。暴露されたら珍しがる前に引くと思うが。

神葬具が制御不可なんて初耳だ。しかも戦闘時は普通に振り回せて通常時に出すと木にぶら下がることになる。神葬具がイレギュラーか、はたまたこのカチューシャロリがダメか。相性の問題でもあるのか。

「認められてないとかか？神葬具に自我があるなんて初めて聞いた

が

訊くと、舞佳が首を振って寂しげな表情を浮かべる。いつも笑顔のこいつを見ていたから、その不意打ちに少しばかり驚いた。

「いんや……まあ、持ち主変わって納得してないんじゃないかな。小娘が儂を使いこなそう何ぞ100万年早いわ！とか言っていたりして」

「持ち主が変わる？」

舞佳の発言の気になった箇所を上げると、言った本人はしまったと顔に出して頭を掻いた。失言だったみたいだな。

「あ〜……しゃあないよな。2回も失敗してるとこ見られてるし……」

言葉の意味を上手く取れないでいると、舞佳が素早く目の前に神葬具を展開し、地面に突き刺す。大振りの神葬具特有の濃い威圧感が肌に突き刺さった。

手馴れた手付きで舞佳が大剣に触れた瞬間、大剣の軸が一瞬だけぶれる。

「はは、これだけでも一苦労……だよつと！」

ガシャンツ。そんな鈍い金属音が響き、大剣に固定されていた双剣が、放り出されて宙に浮く。鞘代わりになっていた大剣は、双剣を出したら用済みだと言うかの如く掻き消えた。

「こいつ等は、わたしの弟の形見なんだ。能力で、エンチャント合体つてやつを

持つてる。他の神葬具に合体出来るって訳だ」

白く、片刃の剣と黒く、両刃の剣。両方とも形は違うが、舞佳が手にした双剣を見ていると確かに似ている気がする。双子剣……なのだろうか。

体力の消耗を気にしたのか、双剣を直ぐに引っ込めた舞佳に、疑問が沸いた。

「ちょっと待て。形見つてことは、弟は死んだ……のか？ だったら何で弟の神葬具がこの世に残ってる？」

俺だって間近で目撃した死は多い。神葬具使いの神葬具は、その所有者の死と共に消失するのが基本。受け継げる物でも無ければ、担い手が存在しなければ現界は不可能。

流石に訊き方が不味かったかとも考えたが、舞佳は少しばかり辛そうな顔をして、

「わからねえけど、わたしの大剣にくっついて、一時的にわたしをマスターにしてんじゃないか？」

「……ってことは舞佳は重複神葬持ちでもなければ普通の神葬具使い……か。」

見る限り神葬具の大剣としては並み以上のようだが、それでも下位の物。予想は違ったが、大きな収穫があつたな。まさか他の神葬具に寄生して延命する神葬具があるとは。

「双剣が認めてくれねえから、大剣も空回るのが多くなってるんだけどさ。でも、あいつの置き土産だし……消したいなんて思わない。だから、悩んでるんだけどな」

先程まで双剣を握っていた手を開閉して、思い出に浸るようを目を閉じる舞佳。弟のことでも思い出してるんだろつか。俺には家族の記憶も無いし、浸れるような過去もないが。こいつみたく幸せそうな顔が出来るんなら、思い出も良い物なのかもな。

「今日分の仕事が片付いた　　って一息ついた途端にこれって、完全に嫌がらせよね」

事務の仕事とかは他人に任せられても、こういう重要書類を人任せにはさせられない。実際、他人に見られたら不味いことになる書類ばかりである。

脚を組み直して紅茶のティーカップを手に取ると、口元へ傾けた。溶かして置いたイチゴジャムが程好く合い、自分を賞賛する。今日の紅茶は中々だ。白にもご馳走してあげられたら良かったのに。でもまあ、こんな問題を持ち込んで帰省した息子に、ご馳走する必要はないか。

左手を伸ばし、頭を悩ませる大元の封筒を掴む。小さい体はこれだから不自由だ。

「編入届け…ねえ。男子を無理矢理ねじ込むよりは簡単かも知れないけど」

封筒をくるりと裏返すと、開封口に貼られた蠟印。貴族が愛用する赤い封蝋に、刻まれた剣の家紋。

白の時もそうだけど、ここまで胃が痛む出来事が重なると冗談抜きに胃炎が発症しそうだ。職業柄仕方ないで済ませて良いものか。

総理はこの件でアメリカ大統領に激怒されたらしく、泣き付かれたわたしも、これはどう処理するのが最善か悩む。きつと目的は義

理の息子。男一人を追う為にここまで仕出かす女ならば、直ぐには帰国しないだろう。

確かに両方から恨まれるのを覚悟しなくてはいけないが、それでも戦力が欲しいのもある。

「板挟みつてホント面倒……」

こんな事言いつつも結果は決まっている訳だが。うん、言い訳って必要よね。

「総理と白には泣きを見て貰いましょう」

込み上げる笑いを堪えつつ、蠟を剥がして封筒を開封。中から一枚の用紙を取り出し、その記入欄に英字で名前を記す。オーダーメイドの万年筆の黒字は、滲む事無く、色濃く刻まれた。

『kureha-reddi』

「これだから飛行機は嫌いなのですわ」

座ったままで長時間と比べたら、2時間耐久走の方が好みに合う。普段体を動かしている身からすると、拷問のように長い時間だった。スーツケース片手に、空港を見渡すと、日本人の多いこと多いこと。先程まで実感が湧かなかったが、この光景を目にして自分が日本に渡ったのだと実感する。愛しいあの人から日本の事は教えられたが、やはり体験するのと訊くのでは丸で違う。

『ふああああ……姫しゃま、付いたのでしゅか？』

脳内に響く声と、頭の上でもぞもぞと動くぬいぐるみを彷彿とさせる感触。

「ケルビン、寝過ぎると体に悪いですよ。それと、貴方はわたくしの使い魔なのですから、何時でも動けるように警戒状態でいて頂かないと困りますわ」

頭の上に乗っかっていてそれに注意すると、

『大丈夫でしゅよ、姫しゃま。やる時はやりましゅ』

緊張感のない欠伸を交えながら、ぼんぼんと頭を叩いて来る使い魔に軽い頭痛を覚えた。甘やかし過ぎたのか。そりゃ確かに猫可愛がりしておやつとかもあげているけど。

これでも戦闘時には頼りになるのだから、外見では侮れない。

『こらケルビン。お嬢様を困らせるのは止めるでござる』

スニーカーを持つ手とは反対側の腕で抱き抱えられている子犬のシベリアンハスキーもどきが、頭の上のそれに随分と特徴的な説教言葉を吐く。

青い毛の色がトレードマークの、使い魔？。これでも、氷狼を想像して創り出した。まさかこの子犬が氷狼だとは誰も想像出来まい。毛が特殊な色をしている以外は至って普通、

「では有りませんわね……。喋ってますものね」

いつの間にか空港の人々に視線を向けられていて、慌てて移動を開始する。ぬいぐるみと勘違いされる二匹を頭に寄せ、腕に抱えて喋る姿は奇妙だったに違いない。

『お嬢様、失礼とは存じますが、まだ学園からの返事が帰っていない今、突然訪問するのは如何な物かと思うでござる』
「五月蠅いですわよダイゴロウ。文句を言うならアメリカを発つ前になさい」

ダイゴロウと呼ばれた小さい氷狼は、腕の中で『拙者は忠告したでござるよ…』と小言を漏らしているが、気にしない。

全てはあの方の為。日本の言葉で言うならば例え火の中藻屑の中。
……水だったかしら。

「待っていて下さい、白様！」

12 『舞佳の大剣、付きし双剣』（後書き）

少し遅くなりましたね、すみません

今度からちよこちよこ新キヤラ出てきます

台詞多くなります…作者大変になります

なんでこんな面倒な設定にしたのか……頑張ります

13 『月灯りの中の散歩』【挿し絵】

嫌な予感がする。こう、第六感が囁く様な。

黒羽の部屋から失敬した英国新聞のガーディアンタイムズを広げて、『中国の万里の長城が天人により崩壊』の記事を熟読最中に感じた悪寒。慌てて辺りを見渡すが、それらしい人影は居ない。

月明かりに照らされている寮の1階。何時もは生徒が往々する大広間のロビーだが、夜遅くの静まり返っている空気と、消灯済みの薄暗さが相まって幻想的な場を醸し出す。

まあ、月明かりを頼りに読む新聞が乙なんだ。

(アメリカにいた時以来だな、この寒気)

こんな悪寒を感じる程の鋭い視線を放てるのは、俺は一人しか知らない。

だが、あいつのいるアメリカは現在、テキサスを筆頭にした重要地域に天人の襲撃を受け続けている。こんな手を取り合わなきゃいけない時期にも土地の争いが起こったり、国間で神葬具使つての戦争が起こり掛けたりと。

危険が蔓延つてるこの時に俺なんかを追って日本に来たら拍手を送ろう。

ってか中国は前も同じようなこと言っただけか？重要拠点が凍ったとか。確か中国は神葬具使いの人数が世界2位だった筈だし、訓練が行き届いてないとしたら、

「あれ……？白……？」

突然呼び掛けられ、新聞から顔を上げる。

見ると、薄暗い中に、百合の花柄をあしらったパジャマに身を包

み、ポニーテールで結んでいた髪を解いた灯火の姿。もう深夜だし、寝る前の格好なのは当然か。

> i 2 8 9 5 1 — 2 1 3 <

「えっと、何してるの？」

お互い様と言いたくなつたが、月明かりに照らされた普段とは違う灯火の姿に若干見惚れて、それを隠すように新聞を掲げて見せた。

「眠れなくてな。新聞読んでたんだ」

これで灯火と俺に面識が無かつたら俺は変質者と勘違いされそう。何せ女子寮のロビーで深夜に堂々と新聞広げてるんだから。就寝時間はとうに過ぎてるし。

灯火は突き出された新聞を受け取り、感嘆の声を挙げる。

「英語の新聞……」

俺が英語を読めるのがそんなに意外か。これでも2年留学してたんだぞ畜生。

おっかなびつくりの表情を浮かべる灯火に不満を抱えるが、いつも親切にしてくれているのと、その可愛いパジャマ姿で許そう。日頃の行いはこういう所で作用するんだな。

「ところで、灯火はどうしたんだ？もう2時だぞ」

これは俺の想像だが、灯火は規則正しく日常生活を送る人柄だろう。こんな真夜中に起きているとは到底思えないのだが。

かく言う俺は夜更かしが基本。新聞とか小説に没頭していると時

間を忘れてしまっただ。

「白……聞いてくれる？」

深刻な表情の灯火に頷く。なんだか核爆弾発射して中位の集団がピンピンしていた時の大統領みたいな顔してるな。そこまで気負う内容か。

「楓がベッドから落ちて……僕のベッドを寝たまま蹴ってね。僕も背中から床に落ちたの」

意識しているなら未だしも、無防備で背中に衝撃はきつい。背骨もあるし延髄とかやばい部分でんこもり。寝てる状態でそんな目に逢ったら瞬間起床物だ。

あの金髪、性格と同じで寝相も荒いんだな。灯火に同情の念が浮かばざる終えない。

「お陰で目が覚めちゃってね。散歩しようかと思ってたんだ」
「へえ、夜の散歩か。良いな、それ」

眠気が全然湧かない今、夜の散歩にかなりの魅力を感じる。今度俺もやってみるか。

思考を巡らせている最中、灯火がいきなり俯いて「……しょに……く？」
何かを呟く。上手く聞き取れなかったので、わんもあぷりーず。

再発言を願い出ようとすると、意を決したのか、灯火が俯いていた顔を勢いよく上げる。赤面癖でもあるのか、顔が真っ赤に染め上がり、物凄い緊張感を物語っていた。

「い、一緒に、さんぽ、しませんか……ッ？」

(わぁ、わぁ……きよ、距離とか遠過ぎてないよね？自然だよな？)

却下されると確信していたのに、まさか承諾して貰えるなんて。

男の子が隣を歩いてる。この状況だけで頬が再沸騰するのが分かる。今まで何度もした夜の散歩の時間が、別物の様に長い。

でも、嫌な心地じゃない。遅い歩調の僕に、白が揃えてくれる足並みが、恥ずかしいけど、それ以上に嬉しい。今直ぐ頬を隠して身悶えたい衝動に駆られた。

黒い空の下、月を眺めている白を横目で盗み見ると、同じ年齢とは到底考えられないくらい大人びた表情が視界に映る。

(背……大きいなあ。僕も高い方だけど、やっぱり男の子なんだよね)

世界最強の神葬具使い。全然驕らないで、普段は余裕綽々の雰囲気身を纏っている男の人。かと思いきや楓と言いつたり先輩を弄くったりと。

正直、会う前の白を噂だけで判断すると、悪意に満ちた魔人の外見しか候補に上がらなかつたり。

(女の子と一緒にいること、慣れてるのかな。全然、緊張してないみたいだし……)

こちらはと言えば、余裕なんて雑巾絞りしても出ない訳で。楓だったら、喧嘩しながらでも、もう少し明るい雰囲気を作れるんじゃないだろうか。

いや、悲観的になるのは良くない。自分から話題を提供する努力

も必要だと、一大決心。白から見えない様に拳を握り締める。

深呼吸で喉の調子を整えて、声が裏返らないように気を配り、さて話し掛けようとした時に、

「そっぴや気になってただけど、灯火と楓はどうやって知り合っただんだ？」

凄じ勇氣を絞り出したのに一瞬でへし折られると涙が出そうになるね。

きつと白は、僕と楓の性格の違いを考慮した上で言ってるんだろ。今だつたら未だしも、出会つた当初は、僕も楓と友達関係が生まれるなんて想像出来なかつたし。

「え、えつと、楓と知り合つたのは、この学園に入学してからなんだ」

よくよく考えると、まだ楓と知り合つて3ヶ月程度しか経つてないんだよね。寮で同室な事もあつてか、ずっと前から友人だつた気さえしている。

「最初は名前とかも知らなかつただけどね。初めてのダンジョン授業で」

楓は初授業にも関わらず神葬具を使いこなしてて、驚かされたのが記憶に新しい。何より、あれだけ目立つ外見。第一印象は強烈だつた。

楓と同室に割り当てられた頃、僕はまだ、”あの出来事”から全く立ち直れてなくて。自分で言うのも何だけど随分暗い印象だつた

と思う。

ルームメイトだったけど、僕はいつも俯きがちで。楓と顔をまともにも合わすことなんてなかった。

そんな時期と初訓練が重なり、初のダンジョン授業の最中、チームメイト無しの僕は迷宮内部で迷い、困り果てていた。一人で進めるような場所じゃないし、何より未だに戦闘への恐怖が拭えない。

其処彼処に設置された松明の灯りの中で、最低得点かなと諦め掛けていた時、耳障りの金属音が聞こえた。鳴り続く音を頼りに、迷宮の奥へ恐る恐る進んで行くと、

「つち！解放！」
アテンド

苦戦しながらも、3体の訓練用天人相手に単独で交戦している女子生徒の姿。

所々破け散った制服に、体の動きと共に縦横無尽に動く長い金髪。脚に装着した西洋鎧の脚鎧。

無謀、勝てる訳ないと普段なら考えてたかも知れないが、その時の僕は1人で奮闘する楓の姿に、希望を抱いていた。あんな風に戦えれば、あんな風に前を向けたら、僕は変わるんだろうか。

剣、槍、盾をそれぞれ装備した天人に勇猛果敢に突っ込む楓を見て、無意識にあれだけ嫌っていた神葬具を呼び出していた。

「結局その戦いが長引いてね。僕と楓は1層止まりだったけど……それから、ちよこつとずつ楓と話すようになったんだ」

宙に視線を浮かべながら思い出を語る灯火を見ると、さつきまでの緊張していた顔とは違い、自然な微笑を浮かべている。

それで凸凹コンビの出来上がりか。割りと意外なのは、楓と灯火

の関係がまだ短期間だったって事くらいか。結構早くからの関係だと予想していたが外れた。ボシユート。

「う、ごめんね。僕ばかり話してて」

謝っている割りに嬉しそうな顔をしてる灯火は、やはり癒し系だな。幾分上気して赤く染まった頬が更に高ポイント。

いやしかし、友達の事を話す灯火を見ると、俺もアメリカの仲間を思い出してしまふな。戦時真っ只中だし、無事だったなら何よりってとこか。苦手だが近い内に手紙でも出すかな。

袖を捲って腕時計を確認すると、もう午前3時。話し込んでしまった分、明日の朝が辛そうだ。

「いや、楽しかったし良さ。んじゃ、良い時間だし、そろそろ帰って」

『警告、警告。学内に出現陣を確認。警告、これは訓練ではない』

13 『月灯りの中の散歩』【挿し絵】（後書き）

けっこう遅れてしまい申し訳ないです。

今回甘ったるい感じにしようかなと考え、この有様である。

灯火可愛いよ灯火。お気に入りのカヤラナンバー2です。

1位は……まあ、今後文にも現れると思うので、探してもらえたら

…

14 『参戦、蒼の炎』

学園内に突如響き渡る警告音。アメリカの馬鹿でかいサイレン式じゃなくて少し安堵している。向こうのはここまで懇切丁寧な説明なしで、鼓膜破りの音声が鳴るだけだし。

「白、これって…」

今までの顔が一転して青褪めた表情を浮かべている灯火。

もしかしたら、灯火はこれが初の天人との戦闘なのかも知れない。本物、つまり死が混じる戦い。

灯火の言葉に頷くと、どうするか思案を繰り返す。今の警告から察するに、もう学内に出現陣が発生していて、既に天人が現れている可能性も否定出来ない。

しかし、ここに灯火を1人で置いて行く訳にもいかないし。少し身が重くなるが、仕方ないか。

「灯火、付いて来てくれ」

とにかく寮までの道を最短で突っ切ろう。送り届けたら直ぐに前線へ飛び込めば良い。流石に、3年生や教職員はこういう事態にも対応可能だろう。

素早く、AK-47のアサルトライフルを創り出し、灯火を前に先行させる。

「えっと……なんで僕が前なの？」

囿か生贄にされるとでも勘違いしたのか、灯火が不安げな声を出す。確かに説明無しで前に先行させたら勘違いされるわな。

「アメリカでの警護体勢だ。戦闘技術が上の奴の方が、前も後ろも警戒出来る。灯火は前だけ見てくれてりゃ良い」

言った通りの陣形で、アメリカでは『pursuit』と正式名称付き。戦闘慣れし、後方の気配を察知可能な上の奴が後衛。下の奴は前だけを気にすれば良いので、戦闘にのみ専念出来るという訳だ。

陣形の説明に納得行ったのか、灯火が「が、頑張るよッ」と言いつつ神葬具を展開する。

地味に初披露だったな、灯火の神葬具。こう、初見だから少し心躍る。どんな武器が出て来るか期待してしまうのは男の性だ、許せ。注視されているのが恥ずかしかったのか、「あ、あんまり見ないで……」と灯火が頬を赤くする。着替えている訳でも無いのに胸元を隠す辺りが、日本の大和撫子情緒溢れる。パジャマ姿でその体勢だと逆に胸が強調されてダメだと思っぞ。

淡い光が灯火の手に絡み付き、それが徐々に輪を描き、鮮明さを強くする。

眩い閃光が晴れた時にはもう、灯火の手に2本の黄金色の円月輪チャクラムが握られていた。2本それぞれに、白と黒のリボンが巻き付けられていて、可愛い印象を受ける。うん、灯火に似合っているな。舞佳と同じように大剣とかの重装備だったらどうしようかと。

神葬具を手に、先程よりも決意が籠った顔をする灯火。

これなら前を任せても大丈夫そうか。危険になったら俺が援護に割り込めば良い。灯火にとって良い訓練になりそうだ。実地訓練なんてそうそう出来る物じゃないぜ。

「それじゃ、行くか！前任せたぞ、灯火！」

全力で駆け抜ける進路の先に、風景と不釣り合いな西洋鎧。紅い翼を生やしたそれは、大名行列の如く、数十体と群れを成している。狂気の沙汰とはこの事。

突っ込む気にはなれず、天人の群れの前で脚が竦んでしまう。剣や槍、人の命を奪える武器が、何本も目に映り、トラウマを呼び起こされそうになる。

鎧独特の耳障りな足運びの音が、僕達を前に停止した。

(やっぱり怖い……)

円月輪を握った手が震える。唇を痛いほど噛み締めて、目の前の敵を目視。

実は、これが本物の天人との初戦闘。僕等が入学してから、天人が学内に出陣を開く事が無かっただけで、学園の門の外ではかなりの数の出現陣が展開されていたのだが。僕等1年生は出番なんてある筈もなく。

こんなに死を間近に感じたのは、あの出来事以来で、頭が真っ白になり掛ける。

「灯火、焦るなよ。大丈夫だ、俺が守つてやる」

頭を撫でられながら、普段よりも低く、鋭い声を発する白。その変化に戸惑って、視線を横に向けると、僕の頭を撫でつつ微笑む白の姿。

そうだ。怖がる事じゃない。神葬具もある。まだ戦う意思も折れてない。

そして 隣にいる世界最強の神葬具使い。こんな状況でも余裕

を崩さない普段通りの彼を見ていて、勇気が湧いて来た。

「うん……ありがとう。戦うよ、僕も」

離れて行く手に名残惜しさが残るが、これ以上甘える訳にもいかない。円月輪を構えて息を整える。

最前列にいる天人が、翼を羽ばたかせ特攻を開始。それに釣られるかのように雪崩の如く、大量の天人がこちらに向かって押し寄せる。

「灯火、その輪で敵の注意を逸らせるか？」

頷くよりも行動で示した方が早い。

黒リボンを付けた円月輪を勢いよく投擲し、それは天人の群れの上空擦れ擦れを滑空。天人の群れが意識を円月輪に向けた隙を突いて、銃声が何度も鳴り響く。

精密に作られた訓練用天人も円月輪に反応していた。本物も同様みたいだ。きつと、神葬具の近付き＝敵の接近と勘違いしているんだろう。僕の中の推測でだけ。

フリスビーのように戻って来た円月輪を迎え入れる為、手の平を突き出す。

「お帰り」

刃がない握りの部分が手の平に納まる。神葬具が所有者を傷付けない様に配慮している為の動作なのだが、それのお陰で無機物なのに可愛く見えてしまう不思議。

「うち、数が多いな。対物アンチマテリアルライフルは創るのに時間掛かるし……どうするか」

アサルトライフルで天人を牽制し、粘る白。銃は銃でも、威力が高い銃とかは呼び出すのに時間が掛かる、ということなのだろうか。今の銃の威力では、確かに決定打に欠ける。

なら、仲間の僕が何とか時間を稼げたら、

「はあああああッ！！」

突然天人の群れの後方で、轟音と共に1体の天人が宙を高く舞う。掛け声からも、攻撃の仕方からも、僕の中では1人しか思い当たらない。

「やったな灯火。前衛が増えたぜ」

派手な戦い方に苦笑いを浮かべる。陽動なら、あそこまで適した奴はそういない。

どうやら他の生徒も戦闘を開始したようで、其処彼処で爆発や斬撃音が響き始める。夜中の3時と云えど、学園生は皆元気みたいだ。戦っているのはほぼ3年生だろうが。

そう言ってる間に、金髪の少女が持ち前の身軽さで天人の群れから駆け抜けて来る。やっぱりと言うか、想像通りというか、脚鎧の神葬具を装着した楓の姿。

陸上選手張りの綺麗な型で突っ走って来た楓は、俺達の前で土埃を巻き上げながら急停止。

「レッチ！灯火を知らない！？ 起きたら隣にいない　　っているじゃない……」

後方に天人の群れがいるとは思えない会話だな。あからさまにがつくりした態度をするんじゃない。

所々破けた制服を着込み、欠伸をする金髪。こいつ何時も何所かに傷作つてないか。嫁入り前なんだからそういう事には気を配った方が良い。

「楓……」

「し、しょうがないでしょ！今3時よ3時！アンタ等も時間を考えて来なさい！」

引き攣った顔の灯火に、焦って反論する楓。お前も規則正しく生活するタイプなのか。結構意外だ。きつと灯火に矯正させられたに違いない。それと天人に文句を言っても無駄だぜ、きつと。

楓の背後で大剣を振り被った天人の頭を、アサルトライフルの弾丸で撃ち抜く。

「油断大敵ってな」

「わ、わかってるわよ……ありがとう」

金髪が素直に御礼を言うなんて明日は雨が。言ったら神葬具で追っ回されそうなので発言は控えよう。

そっぴや舞佳はどこにいるんだろう。こっぴや戦闘なら喜んで参加してそうな感じだが。また木にでもぶら下がってたりするか。もう助けないぞ。

「とにかく、こいつ等を倒して先に進むか」

丁度睡眠欲が高ぶり始めたので、さっさと終わらせて安眠したい。その為にはこの事態を手早く收拾しなくては。

前衛に俺と楓が張れるから、安心して灯火に後衛を任せられるの

は大きい。後は楓が無茶をしないことを願うばかり。まあ、助けに入れるよう見張るようにはしておこう。

アサルトライフルの銃口を天人の群れに向ける。学園の校舎が見える辺り、少しずつ押されているようだし、本気を出さずには要られないな。

「団体さん、ご案内だ」

「舞佳！そっち行つたよ！」

クラスメイトの忠告に、大剣を薙いで返答。背後から盾を構え突進して来た天人を、その武器ごと粉碎する。

体力をガシガシ削って行く神葬具に躍起になりつつも、天人の死体を積み重ねて行く。

何しろ今回は天人の数が多い。1年生の頃に遭った学内強襲の約2倍は下らない。元々長期戦は苦手な部類の大剣で、この戦闘はきつい物がある。

闘技場に天人の戦力を追い込めたまでは良かったが、その後の乱戦は見るに耐えない泥沼戦。

後どれくらい自分が持つのか。目で見えないタイムリミットに怯える。

「中位！中位がいるわ！気をつけて！」

弓の神葬具を構えた上級生の発言に、前線が混乱を増す。

中位か、不味いな。学年が入り混じっている混戦の中で中位に乱入されるのは非常事態だ。1年が恐怖で退き始めたら他の学年にも影響し兼ねない。

天人の群れの奥、宙に浮かぶ光を放つ円陣。そこからまたも紅い翼を持った騎士が出現。

「壊したいのは山々だけど、あそこまで行くのも一苦労か……」

授業通りなら、出現陣を最優先で破壊するのだが、相手もそれを簡単には許してくれない。実行する為には先ず、危険な中位の入り混じった天人の防衛線を突破しなくては。

(アテンド
解放したいけど……やったら間違はなく力尽きるし)

こんな時に双剣が言うことを聞いたらと思わずにはいられない。近付いて来た大剣持ちの天人と鏢迫り合いに持ち込まれ、冷や汗が流れ出す。限界が直ぐそこに迫っている。

押し返そうと力を込めた時　いきなり相手の天人の力押しが停止。驚いて瞳を開くと、目の前の天人は鎧ごと”蒼い炎”に纏わりつかれ燃え盛っていた。

紅い翼が包み込まれるように蒼で染まり、徐々に消失していく。

「下位なんてこんなものですわね」

大剣で体を支えながら振り返ると、そこには手に炎で形作られたような形状の刀を持ち、瞳と髪から蒼い炎を発している女の姿。その炎は、身近で燃えていても熱くはなく、むしろ凍えるほど冷たい。他の生徒と交戦していた天人の多くが、その少女の方へ視線を向ける。

「まさか来て直ぐに天人と戦うことになるなんて……折角、あわ良くば白様と早く会おうとホテルをキャンセルして来ましたのに」

聞き覚えのある名前が少女の口から飛び出したが、目の前の異様な光景のせいで頭が働かない。

少女の手に握られた炎の刀が、迫った天人の体を両断。もはや、切れ味なんて次元じゃない。死体が残る筈の天人は、蒼の炎に絡み付かれ、焼失。もしかして、あれも神葬具なんだろうか。

少女が手を宙へ向け高く挙げると、炎が竜巻を引き起こす。その見た目と反して、周囲の気温は南極を思わせる寒さへと変貌。

天人を攻撃してるから味方だとは思うんだが、寒さでわたし達を殺す気か。

「結果オーライと取りましょう。白様に見付けて頂けるよう、盛大に暴れますわ」

14 『参戦、蒼の炎』（後書き）

手直し版です。

最後の部分だけ盛大に書き直しました。

でもまだちょっと修正するかも…楽しめていただけたら幸いです。

15 『蒼炎の狼と猫と美少女』

俺が両手に構えたSteyr TMPマシンピストルで敵を牽制しつつ、楓が闇討ちを仕掛ける。

徐々に数は減っているが、それでも出現陣を壊さない事には天人の増援を抑えられない。時間を掛けなければ高火力の銃器が出せない点が痛い。直ぐに創り出せるのは、拳銃に創り慣れた短機関銃程度。対物ライフルなんかの高火力銃器を創ろうとしたら確実に5分は掛かる。

アメリカの戦線だと味方が熟練された神葬具使い達だったから安心して任せられたが、今はそうも言ってられない。戦闘慣れしていない灯火を守りつつ、無茶な戦い方をする楓の援護を担当。

「はは……銃を創り出せる暇がないな」

マシンピストルなんて脅しも同然。神葬具の銃器とはいえ、そう易々と天人の西洋鎧は打ち破れない。

おまけに中位の天人も混じっていると来た。確実に死人が出るレベルだな、これは。天人との戦争規模の戦いよりは全然マシだが、中位がいるといたないとは差が大きい。

10体の中位を盾にして核一発を防ぎ切れる。これだけ言えば大抵の人間は青褪めるだろ。

鎧の硬さも、武器の威力も、下位とは次元が違う。これの上上位なんてものが存在するんだから呆れ返らざる終えない。

突き出された槍を危なげ無く躲すと、お返しとばかりに純白のオラを纏った拳を天人の兜へ叩き込む。素手でやったら確実に拳の骨が全部逝くな。

「これで一体……先は長い」

「白、また新しい天人が出て来てるよ！」

もはや息を吐く暇さえないのか。円月輪を投擲しながらの灯火の言葉通りに、数体の天人の新手が出現陣から現れ、真紅の翼を羽ばたかせて優雅に地面へ着地。もう本日何度見たかわからない西洋甲冑へ銃口を合わせる。

「アテンド
解放！」

引き金を引こうとした瞬間に、射線上へ自前の長い金髪を靡かせながら楓が登場。危うく誤射する所だった。止める、その突撃的な戦い型。敵と間違えて頭を撃ち抜きかねん。

俺の斜線上に立つ楓の脚に巻き付く黄金の帯。あれって、俺との戦闘時に見せた楓の解放だよな。

まだまだ天人の増援が予想出来るのに、何で解放するんだ、あのバカ。他の奴が釣られて解放し出したらどうしてくれる。

楓は天人の斧の大振りを屈んで避けると、屈伸の要領で相手の体を蹴り上げる。かなりの飛距離が出てた。脚回りの強化具合は賞賛を挙げても良い。突撃癖を直せば及第点。

他の連中も学生としてはしっかり動けてるし、紛れてる中位に遭遇しない限りは大事無い筈。

今度は中位発見作業か。またもや仕事が増えた。

「レッヂ！あれ中位じゃない!？」

攻撃を受けて吹き飛ばされたのか、地面を削りつつ勢いを殺し、俺の隣へ戻った楓が1体の天人を指し示す。視界に捉えようと、大柄の盾を構え、もう一方に鋭い穂先の突撃槍ランスを装備した天人。どう考えても装備からして普通の天人とは違うな。翼も一回り大きく感じる。

意外とあっさり見付かるものだ。アメリカでは乱戦に次ぐ乱戦で、相手の外見なんて注視する暇ないし。攻撃して異様に硬い相手がいたら、そいつが中位という大雑把な決定方法だった。そりゃ味方の首が何個も飛ぶわな。中位探知機とかあれば別だが、そんな便利な物があれば困りはしない。

中位は下位を指揮している為か、先程から棒立ち体勢のまま。攻撃されてからでも応戦可能という余裕の表れだろうか。

「楓、あれに近付くなよ！下位を頼む！」

流石に中位に突っ込む気にはなれない様で、楓は素直に頷くと、某特撮ライダー張りの勢いで身近の下位天人に蹴りかかる。猛獣か己は。

マシンピストルを放り投げると、AK-47のアサルトライフルを創造。グリップ越しに確かな重量を感じると、余裕かましている中位へ引き金を

「あの天人、旦那しゃまだと直ぐに倒せるレベルでしゅね」

「こらケルビン。旦那様の邪魔は止めるでござる。ささ、旦那様、あの天人めにどうぞ一発」

驚きで思わず両手が緩み、アサルトライフルが手から離れて、地面にぶつかり霧散。ああ、勿体無い。結構精神力使うのに、これ。

現実逃避していても仕方がないので、うんざりしつつ懐かしい声を頭に響かせる連中に視線を向ける。

こんな戦場に不釣り合いな2体のミニマム小動物。

先ず餅みたいな体つきの暢気そうな猫、ケルビン。尻尾の先で蒼い炎が小さく灯っていて、これだけでも普通の猫と違々と分かる。

次に、理知的な雰囲気、一見ハスキー犬に見える子狼、ダイゴロウ。毛皮が青い部分以外特筆すべき点が無いのが泣ける。名付け

の親の俺が言うのもなんだが、その顔でダイゴロウはくない？ 飼
い主とお前が気に入ってるならいいんだけども。

「お前等……アメリカにいたんじゃねえの？」

『お嬢様に言つて欲しいでござる。拙者は止めたでござるよ』

止めたつてことはあれか。やっぱりこいつ等の飼い主もここに
いるのか。有り得ねえ……来る訳ないつて笑つてたの今日だぞ。絶賛天
人からの強襲中で時間経過の感覚が少々狂つてるな。

急いでアサルトライフルを再構成しつつ、スコープを覗き込む。
中位を視界に捉えながら、

「とにかく、お前等は後ろに下がつてろ！ あの中位をやつてから話
聞いてや」

突然、スコープ越しに中位の天人の体が燃える。ケルビンの尾の
先に灯っている火、ダイゴロウの毛皮と同色の蒼。それが、天人の
翼に燃え移り、余裕の雰囲気を出していた天人がもがき苦しむ。武
器を振り乱し、狼狽の中で、徐々に体が焼失していく。

普通の神葬具使いならば、その光景に度肝を抜かれていたのだろ
うが、俺はアメリカで何度も見た光景。慣れの恐ろしさが身に染み
て分かる。

「ケルビン、ダイゴロウ。白様は見付かりました？」

止めの一撃と言わんばかりの斬撃が中位の背後から見舞われ、天
人の体が真っ二つに分断。ぐるい絵面になる筈のそれも、蒼の炎で
掻き消えた。

強固な天人の鎧を容易く両断した人物は、仇討ちのように襲い掛
かって来た下位をも、視界に収める事もなく叩き切る。

瞳と髪から噴き出す大量の蒼色の炎。ツーサイドアップで纏められ、楓の金髪よりも大分白み掛かったそれ……プラチナブロンドと呼ばれる髪も、蒼で大半が染め上がっている。手に持った実体を持たない炎の刀も、威圧感を持ち出すには十分。あれが中位の天人だと言ったら信じる奴もいるだろう。

『姫しゃま〜。こちらでしゅよ〜』

出来れば今出せる全速力でこの場から退却したかったが、戦闘中でそれを投げ出す訳にもいかない。諦めて受け入れよう。アイツが日本に、俺を追って来たという事実を。そして恨もう。深夜にこの事実を有り得ないと笑っていた自分を。

主人を小さい手を振りながら呼ぶケルビン。

それに気付き、こちらに視線を向けた長身の美少女は、冷徹な行いに反して煌びやかな微笑を浮かべる。

「白様……やっとお会い出来ましたわ」

いや、今生の別れからの再会みたいな顔しているが、別れて一週間経ってないから俺達。

そして感動の再会を演出したいなら片手間で敵を片付けるのを止める。ああ、天人なのに、殺すべき相手なのに。あんな殺され方だと同情の念が浮かぶ。

” エリーゼⅡディⅡアルフォート”。世界神葬具使いランカー2位の美少女。

『絶対零度の蒼炎』という神葬具の担い手で、神葬具の特徴は名の通り、凍てつく蒼い炎。

イタリア指折りの貴族だったアルフォート家の令嬢。実家は既に没落しているが、本人は気にしていないし、どちらかと言えば肩書きが失せて清々したと胸張って主張している辺りは好感が持てる。しかし、完璧な人間なんていない物だ。人間誰しも、どこかに欠陥を抱えている。

身長170はあるであろうモデル体型のエリーゼに呆れながら、

「お前、アメリカどうしたよ……」

新聞読んでる時も言ってたが、アメリカは他の国からも睨まれていて大変だ。そんな時に世界2位の脅し看板がいなくなったら痛手じゃ済まない。既に1位もいなくなってるけど。だからこそ今のアメリカが2位を手元から離したりするだろうか。

「今まで守った恩は有給で返して頂きませんと。それに、一番は白様に会えない日々が堪え切れず……まるで放置プレイのようで気持ちい えほん」

アメリカにいた頃もそうだが、こいつのストーカー癖とDM癖、段々酷くなってないか。しかも自覚なしの最悪のパターン。背中合わせで戦っていると悪寒が走る。頼りになるのに頼りたくないってどうなんだ、このジレンマ。

『旦那しゃま、後ろでしゅよ』

「何で日本に来た!？」

エリーゼの頭の上に乗ったケルビンの言葉通りに、突っ込んで来た天人に上段蹴りを当て、アサルトライフルで追撃。よろけた敵をエリーゼが紙を切るように捌く。確実に対応の速度は上がってるな。中衛担当の銃器だと頼もしい前衛がいてくれれば心強い。

「白様との再会の為ですわ。それ以外に理由なんてありませんもの」
アメリカはその理由だけで捨てられたか。哀れ過ぎる。まだ神葬
具ランカー10位内が残っていることが救いか。

「泊まる所とか」

「クレハという方に全て話は通っていますわ。白様との学園生活が
楽しめると思うだけで胸が躍ります…」

義母黒羽よ、俺は一言も聞いてないぞ。せめてこいつが来るなら
一言言ってくれ。防衛網引くから。

でもエリーゼが学園に通っても学ぶことなんて無いよな。俺が言
うのも何だが、神葬具の基礎を学ぶ所だろ、ここは。何度も戦争並
みの戦い経験してる奴には不必要に違い無い。

「白様、あの剣は使いませんか？」

俺の銃器一筋の戦闘方針に疑問を持ったのか、エリーゼが敵を切
り伏せながら暢気に訊いて来る。

「あー……奥の手なんだ、一応」

俺は天人に銃弾をお見舞いして、少し言葉に詰まった。

出来ればあれは普通の場所で披露したくないんだよな。危機的状
況ならまだしも、銃とか使えなくなるし。エリーゼと戦った時は本
当にしようがなかったんだよ。

「ならば、わたくしが白様の剣になりますわ。しっかりと扱ってく
ださいましね？」

俺の目の前の敵を一刀両断し、蒼い炎が灯った瞳で上目遣いを使用するエリーゼ。こいつの中身を知らなかったら少しぐら付いていたかも知れん。だが、俺はこいつの本性的お陰で豪い目に会って来たのだ。

何事も経験を通じた今なら胸を張って言える。
全力でお断りします。

15 『蒼炎の狼と猫と美少女』（後書き）

編集するかな…するな、きつと。

楽しんで頂けたら幸いです…ってか新キャラ動かすの難しい…。

16 『義母への禁句』【挿し絵】

「1年から5人の 死者」

学園長室、私室と化した部屋で無意識に万年筆を強く握り締めた。他にも2年、3年、それぞれに3人以上の死者が発見されている。まだ出現陣完全破壊まで2時間経っていないし、瓦礫に埋もれている者も合わせれば倍に増えると安易に予想出来る。

天人の攻撃で建物、特に寮近辺は手酷くやられて、睡眠時を襲われた生徒も少なくない。

だが、去年に同じ出来事が引き起こった際はこの5倍近い被害が出たのだから、最小限に食い止められたと安堵したくなる。でも死んだ生徒は、どう抗っても帰って来ない。

「死んだ生徒の大半が孤児……」

親御さんから「人殺し」と言われる回数を少なくしてくれる天人の配慮だろうか。自分で言っておいて真に笑えない。

神葬具使いは『対天人育成用教育学科』に入学を同意した時点で、生死と奪権を国に渡すことになる。学科を卒業するまでは無いが、必修学科を収めた後、国へ配属され任務へ駆り出される。国からの命令は絶対。その代わり、生きている限り人並み以上の生活の保障。刷り込み用の天人の死骸は有り余っているのに、神葬具使いは一向に増えない。国に命を差し出すくらいなら普通に働くという人間が大半を占めているからだ。

現在の神葬具使いの殆どが、天人の襲撃で家庭を壊された人間だと言っても過言ではない。きっと死んだ生徒は、憎悪に突き動かされて不十分の訓練の中、天人に飛び込んで行ったんだろう。

「カレン、どうするのが正しかったのかな…」

思わず、記憶の中の親友へ問い掛けてしまった。

過度な訓練では生徒が伸びてしまう。だからと言って2年から本格的に始めますでは遅い。今の事態がそれを物語っている。

天人の出現陣の発生場所に目安はつかない。警戒態勢は何時までも続く物じゃない。平穩が続けばそれだけ警戒心も薄れ、突然舞い込む天人の襲撃に対応が間に合わない。

欠伸を噛み殺しつつポケットから取り出した懐中時計の短針が、既に5時を過ぎてている。これは丸々徹夜覚悟で取り掛かる必要がある。

低い身長を強調する様で嫌だから滅多にやらないのだが、今日だけは疲れたので伸びを取り入れる。

「んー、さてつと。シャワーでも浴びてから、また作業し」

休憩へのスイッチ入れ替えを行う言葉が、扉の開く音で遮られる。ここで補足。普通の学生、教師はこの部屋に立ち入りを禁止している。ノック無しなんて問題外。それを遣って退ける無礼者は1人しか心当たりがない。

とりあえず、その人物が話題を切り出す前に、常套句になりつつある注意を掛ける。

「白、ノックはマナー」

> i 2 5 8 5 6 — 2 1 3 <

「白様、どこへ行かれますの？」

頭に眠りこけている白餅のような猫のケルビンを乗せ、シベリアンハスキーの子犬もどきのダイゴロウを引き連れたエリーゼが、俺の三步後ろで疑問を口にする。あの後天人を駆逐し続けて出現陣を2個破壊し、まだこの余裕具合。銃器を使つては捨て作り変えてを繰り返していた俺は、直ぐにでもベッドに突つ伏したい気分。

だが、まだ仕事が残っているんだ。ある種、最優先事項かも知れん。その目的の為に疲れた体を引き摺つて学内の階段を登っている訳だが。いつもより長く感じるのは疲労のせいか。

真面目に返答するのも面倒なんで「着いてくりゃわかる」と一言返しておく。

「わたくし、白様と一緒になら何所にでも床にでも参りますわ」

マジで朝起きたらベッドに潜んでそうで怖いな。軽くホラーを超越してる。そんなことされたら本気で自室の窓突き破つて逃げるぞ。そういうのが許されるのは漫画とかの仮想の中だけだ。

『お嬢様、余りそういう事を嫁入り前の淑女が仰るのは如何かと思つてござい』

「うるさいですわよ、ダイゴロウ」
『しくしくしくしく……』

ただ注意しようとしただけで跳ね除けられるとは不憫な。階段で泣き崩れているダイゴロウを放置し、そのまま用事の相手がいる校舎の5階へ。

目的の階に来ても廊下の最深部に部屋があるってどんだけ不便なんだ。1階の玄関正面とかに移動させようぜ、この部屋。

ノック無しでドアノブを回すと、重々しい扉を開ける。普通ならこんな時間に学園長室なんて開いていないだろうが、今は天人襲撃

から2時間も経っていない。学園長の黒羽だったらこの部屋に缶詰になっている、という予想が大当たり。

事務作業を片付けていて疲れが溜まっていたのか、伸びをしていた黒羽に遭遇。

やっぱり小さいな。我ながら義母とは思えない。アメリカで仲間写真を見せたら、妹かと質問されて思わず肯定してしまったほど幼児体系な義母である。

「白、ノックはマナー」

そういえば日本発つ前から言われてたな、この注意。直す努力をしないと何時か大目玉喰らいそうだ。

「黒羽……お前なんでこいつのこと黙ってた」

黒羽の注意を無視してエリーゼを指し示す。

挨拶から始まらない交渉術。アメリカで会得した交渉技術である。拳から始まる英会話なんて物もあるが、女性にはNGだな。主に喧嘩っ早い男への対処用。

「あら、もう蒼炎の転入生と仲良くなるなんて、プレイボーイな息子」

黒タイツに包まれた細く艶かしい脚を組み直して、含み笑いをする黒羽に文句を言う気が失せる。絶対に俺とエリーゼの関係知ってた上での行為だろ、含み笑いも転入工作も。悪魔如きの所業。いや、この場合天人の如き所業。

振り向くと、ケルビンがずり落ちそうなのを整え、黒羽を訝しげに観るエリーゼ。なんか嫌な予感がする。今直ぐこの部屋から出て行けと警告音が鳴っている。

「白様、このおちびさんは何方ですか？」

明らかに学園長室内の温度が5度は冷めた。無論、クーラーもエリーゼの神葬具も無しで。

エリーゼ、今お前凄く空気読めてない。(ん？何か不味い事言っただけか？) みたいな表情してる時点で凄く空気読めてない。誰かさんの逆鱗に蹴りかましてる事くらい気付けバカ。一見小学生みたいな外見してるけど、これでも学園長なんだよ。身長も地味に気にしてるんだよ。

「ふ、ふふふ……面白い子ね」

お義母様。その握り締めた自慢の万年筆は何に使用するんだ。

慌てて2人の間に割り込むと雰囲気転換。話題を持ち直す。これ以上やらせると学園長室で惨劇が起こりかねん。

「ってかこいつが学園に編入って本気か？確実にアメリカが文句言うだろ」

今のアメリカは危機的状況だし、蒼炎の使い手のエリーゼはかなりの脅し看板。手放す筈ないだろうし、本人が希望したからと言って簡単に異国へ渡れない。

しかし黒羽が机の上にある1枚の書類を掴み、俺の前へ提示。

『エリーゼ、ディールフォートの対天人育成用教育学科女子学園、明星学園への編入を許可する』

「痛い染みるうう……ッ！」

舞佳先輩の体中に出来た切り傷や打ち身。校舎内の医務室で、慣れた手付きで処置を施していると、上半身裸でうつ伏せに寝ている先輩が悲鳴とも取れる声を出した。

「だ、大丈夫ですか!？」

当てていた消毒液が染み込んでいるガーゼを離す。

それでも最小限の痛みで傷が残らないよう心掛けているのだが、ここまで傷が多いと流石に根気がある。これくらいでしか役に立たないから、確かに充実するんだけど。

「大丈夫…痛くない痛くない…」

ベッドにある枕へ顔を埋めながら、痛くないを繰り返す先輩。その呟きは僕への返答というより暗示みたいに聞こえます。

「むしろ手早くやった方が痛みが少なくて良いんじゃない?」

医務室の壁に寄り掛かり、楓が言う。楓の言うことは尤もだけど、丁寧にやらないと切り傷とかは痕が残っちゃうんだよね。先輩の自身の為にも、ここは我慢して頂きたい。女の子が肌に傷を作っちゃいけないし、こういう学園だからこそ、次の戦闘で傷が開きましたじゃ洒落にならない。

ちなみに楓も頬に絆創膏を付けていたり、腕に包帯を巻いていたりと、結構怪我を負っている。

「痕残らないといいんだけど……」

楓が最近、女の子らしく肌を気遣ってくれるようになって嬉しい。白が来てくれたお陰かな。今までは怪我しても舐めれば治るって言ってる聞かなかったし。楓を真面目に治療出来たのは、今回が初めてだった。

最後に舞佳先輩の切り傷へ軟膏を塗り、「ひぐう!？」治療完了。

「あ、ありがとよ灯火……中々に痛かったぜ」

良薬口に苦しという言葉は身に染みて分かるよね。

僕も楓も、先輩もそうだけど、怪我とは違って内部にも疲れが及んでいる。神葬具をここまで行使したこと自体、1年生は初めてだよ。白のような例外もいるけど、素人が神葬具を扱った次の日は、漏れなく疲労が押し寄せる。

楓は痩せ我慢をして冷や汗を流しているが、僕はそこまでじゃない。きつと、楓のように接近戦の戦い方じゃないからだと思うけど。

「それにしても、変な奴もいたもんだ。蒼い炎で敵をぼーって燃やして」

「あー、それあたしも見たわよ。なんかレツチの近くで凄火の手が上がってたし。後、めちゃくちゃ寒かったわ……」

僕は遠目でしか確認出来なかったけど、舞佳先輩から聞いた話だと、蒼い炎の使い手は現れて出現陣を壊し、直ぐに別の場所に向かったらしい。それで、次に楓の証言。中位を意図も簡単に燃やした蒼炎。

どう考えても世界最強の白の知り合いだね。そうとしか考えられないよ……ごめんね、白。

心の中で謝罪していると、午後の授業開始の鐘の音。午前の授業は天人の襲撃で無くなったけど、午後はちゃんとあるんだよね。その間に寮の修理等を進めるみたいで、破損が酷い部屋の生徒は他の

寮生の部屋へ一時的な移転。対策が早い点がこの学園らしい。

「授業終わったら寮に帰って直ぐ寝てやる……」

舞佳先輩は、何の宣言かわからない言葉を呟きながら力無く医務室を去って行く。

「灯火、あたし達も行くわよ。確か5時限目って数学だったし」

数学は厳しい教師が担当なので、楓が急ぎ立てる。楓って確か数学苦手だったし、授業に遅れると絶対に指されるから回避したいんだろっなあ。

「うん、今行くよ」

何故だか嫌な予感がするんだけど、天人の出現陣は全部破壊された筈だし、気のせいだよな。

16 『義母への禁句』【挿し絵】（後書き）

色んな意味で死ぬかと思うほど書いた…

4000字がデフォになるよう頑張ってます…死ぬかもしれん

今回は最初から絵師、あおクマさんの挿絵入りです

エリーゼ…可愛くなって…嬉しい限り

ケルビンの容姿とかハッキリしてない人もいるだろうし、すっごく助かった…

ありがとうございますあおクマさん、これからもよろしくお願いします

17 『彼女宣言&嫁宣言』

「これ、白には知らせておく。出来れば、神葬具使いとしての考えを聞かせて欲しい」

そう言われ黒羽から渡された一枚の用紙。

対天人育成用教育学科明星学園死亡届。受け取った瞬間に、ああこれかと冷静に感じた俺は、人として何所か麻痺し始めてるんだろ

う。

用紙の名の通り、国へ提出する学園生の死亡届。アメリカの軍隊で、同じように名前が連なった紙を何度も拝見していたこともあり、動揺も湧かない。ただ、面識の無い人物の名前が無機質に並んでいる。

全員で20人以上は逝ってるか。無理も無い。夜間に突然の襲撃、しかも中位のおまけつき。死者が出てなかったら奇跡としか言いようが無い。実際、エリーゼがいなかったら被害は倍増しただろうし。

「死亡届ですの？」

隣を並んで歩いていたエリーゼが、興味無さ気に言う。

俺もこいつも、人の死を知り過ぎた。普通なら悔やんで復讐なんて物を誓ったりするんだろうが、仲間が目の前で何度も死ぬと、そんな感覚も薄れる。アメリカみたいの高頻度で出現陣が現れる地域なんて特にだ。神葬具使いの死体が山になる勢い。

「この生徒は警戒心に欠けているようですし、20だったら軽い方ですわね」

「人の命を軽いとか言うな」

ケルビンがいない箇所の頭を軽く小突くと、エリーゼが口を閉じる。流石に言い過ぎだと自覚したんだろう。良い傾向だ。俺と出会った当時のエリーゼは、極道も尻尾巻いて逃げ出すような問題児で、味方まで凍らせかねない性格だったし。これでも随分と丸くなった。

『ですが、お嬢様の言う事も一理あるでござるよ。陣形も直ぐ作れず、個人個人で戦う生徒が目立っていたでござる。』

灯火とやってみせた『pursuit』という陣形。その他にもあるが、天人との戦闘時は通常、陣形を作り堅実に戦うのが基本。味方同士で守り合い、可能な限り陣形を崩さず戦闘を続けるのが最優先なのだが、その基礎を教わってない点からして、この生徒は危機感が薄い。

楓を筆頭に、仇を目前にして頭に血が上り突進する奴。きっと死亡届の大半がこの性質だろう。

まだ実習やダンジョン授業を受けていないから学園の訓練方針はわからないが、アメリカとは随分違いを感じる。向こうは血反吐を吐くまでって言葉が適合するからな。他の国に比べて天人の襲撃頻度が低いのも相まって、日本自体の危機感が引き下がっているんだろう。

死亡届の紙を仕舞い込むと、違和感無く後ろを付いて来ているエリーゼの肩を掴む。

「ああ白様……こんな廊下でなんて」

端正な顔立ちの頬を紅く染めるエリーゼ。それに微笑みで返すと、人差し指で天井を示す。

「お前2年だろ。教室は一個上の階だ」

俺は記憶喪失だから実年齢は不明だが、エリーゼは列記とした1

7歳。舞佳と同じ学年だ。俺自身、こいつよりも年下というのが信じられないが、書類上の事実なんだから仕方ない。これで記憶戻って20歳辺りだったら真剣に人生を考える所だ。

予想通りに俺の言うことを聞かず、エリーゼは首を横に振る。

「白様、わたくしと白様の絆は一生。故に学年なんて物では引き離せないのですわ」

年齢超えるレベルの絆って悪魔の楔並みだな。

その絆のお陰で、アメリカの死の防衛線と呼ばれる場所にまでこいつが付いて来た時は本気で頭を抱えたぞ。結局、2人で大暴れして無事に帰還したが、アメリカの重要戦力のエリーゼが戦死とか洒落にならなくて肝を冷やした。傷だけでも大統領から苦情が殺到するレベルだろう。

『お嬢様、白様の仰る通り、ここは引き下がることも大切でござる』
「うるさいですわよ、わんこ」

飼い主に注意しようとした子狼が、犬呼ばわりされて主の腕の中で、『しくしくしく...』静かに涙を流す。涙脆くなつたと言うより打たれ弱くなつたの方が適切か。頑張れ、ハスキーもどき。

まあ、この2体...蒼い炎が灯っている点から推測可能だとは思うが、ケルビン、ダイゴロウ共にエリーゼの神葬具から創り出された生き物で、主の命令には絶対服従。だが正直、両方育て方が極端だ。ケルビンは寝てばかりの舌足らず能天気。ダイゴロウは主人の間違いにも注意出来る生真面目な侍口調。

こう言うっては何だが、普通の従者はいないのか。

従者といえば忠実なゴーレムとかが真っ先に候補に挙がる俺は、そう思う訳だ。

爆睡中のケルビンを落としかけながら、エリーゼは”蒼炎の神葬具”の影響で青く染まった両目で俺を射抜かんばかりに見詰めている。外見にコロツと騙されたら一瞬で人生終了だ。

「何がいきませんか？わたくし、白様の為なら何でも直しますわ」
「強いて言うなら年齢だな、神に言え」

こいつは俺と離れるだけなのに表現が過剰。アメリカにいた頃も結構面倒な性格だった。が輪に掛けて悪化の一步を辿っている。何時か他の女子と歩いているだけで包丁持ち出しそうで怖い。いや、こいつの場合神葬具で斬り掛かるか。余計恐ろしい。

「とにかく、お前はさつさと上の階に」

「おーい、白お……」

もういつその事引つ張つてでも連行の言葉が浮かびかけた時、助け舟の呼び声。上の階から階段で下りて来た舞佳が普段と違い、大分疲れた表情で手を振っている。声にも潤いと張りがない。

きつと戦闘時に神葬具を酷使した反動を受けたんだろう。精神的にも肉体的にも、神葬具を使用した後は急激な疲労が襲う。エリーゼも俺も慣れた疲れだし、これくらいなら何度も経験済み。舞佳の疲れ具合が酷く懐かしい。

「あら、あの方は……大剣の方ですわね」

お前まだ人を神葬具で判断する癖治ってないのな。覚えるのが面倒とか言っていたが、それは人としてどうかと思うぞ。軍に挨拶に訪れた大統領を見て、俺に「あの偉そうな方は誰ですか？」と言った辺り筋金入りだ。せめて大統領の名前くらい覚える。

『……しくしく』ってか、まだ泣いてたのかダイゴロウ。そんな滝級の涙をずっと流していると体中の水分全部飛ぶぞ。そこまで犬呼ばわりが嫌なら常時あつちの形態になってりゃ良いのに。エリーゼが疲れるからダメなんだっけ。

舞佳は壁伝いにやっとこさ近づいて来ると、息を切らせつつ俺達へ視線を向ける。

「白、エリーゼって奴、知らないか……？」

俺の隣にいる目立つ容姿のがそのご本人。しかし、舞佳が何故エリーゼを探しているか疑問。エリーゼが舞佳の神葬具を知っている事からして、面識はあるのだろうか。

「担任の奴がわたしに、そいつの探索を押し付けやがったんだ…ッ」

小さな体躯で木に吊り上げられたりと不便な人生。今度喫茶店とかで飲み物を奢ってやろう、500円まで。

ってかやっぱりエリーゼは2年部の転入生なんだな。凄く安心した。こいつが1年部で、増して同じクラスなんて事になったら常時楓と争いかねん。同じ金髪同士、仲良くして欲しい。いや、エリーゼの白みがかつた金髪はプラチナブロンドだったか。本人力説していたし。

「教室にも来ねえし、職員室にもいねえし、何所にいやがるって、昨日の炎女!？」

やはり面識はあるんだな。お互いに神葬具は記憶に残っているらしい。2人共特徴的な神葬具持ちだから当然といえば当然か。蒼炎と、他人の双剣がくっ付いた大剣なんて全世界探してもこいつ等くらいだ。俺の神葬具も大概ではあるが。

「白の知り合いなのか？」

エリーゼと俺を見比べながらの言葉に、違うと否定しようとするが、直ぐにエリーゼがダイゴロウを抱いている方とは反対の腕を俺の腕へ絡める。こいつ行動まで突発的になりつつあるのか。

「エリーゼ＝ディ＝アルフォート。白様のガールフレンド兼妻候補ですわ」

やっぱりこいつ、すごぶる空気読めない。敢えて読んでないのか、ワザとやってるなら、その度胸は賞賛に値する。絶対に褒めたくないけどな。自己紹介が事故紹介になってるし。自分の事全く説明出来てないし。

それと気付けエリーゼ。胸張って得意気にしているお前を哀れみの目で見ている舞佳の視線に。何言ってるのこいつ視線を。直に受けたら俺でも怯みそうなドン引きを、華麗に流すエリーゼの肝っ玉は直径幾つ何だろうか。

(やっぱり、痩せ我慢だったんだね)

授業中、隣の席で机に顔をべったりくっ付け熟睡している楓。確かに、天人の襲撃の後なものもあって学園全体が意気消沈の雰囲気。授業所ではない。

僕達が教室に入って来た時には、泣いている生徒もいた。何でも、部活の先輩が1人亡くなったみたいだ。僕と楓は友達自体の付き合いが薄いし、まだ学園内での知り合いの死者はいない。でも、身近な人物が消える恐怖は、この学園の殆どの生徒が体験済みだと思う。

じゃなければ、危険な戦地へ自分から志願する気持ちは生まれない。

(僕も……あの出来事がなければ、普通に暮らせたのかな)

天文学の教材。その中のページにある天人の弱点や武装、引き起こされた事件の数々。

その事件の項目にある『流れ星孤児院襲撃事件』。これが、この事件が無ければ、僕は普通の一般人として、天人なんて恐怖から目を背けて、日常を送っていた筈だ。

記事にはこう書かれている。

『天人6体が孤児院へ侵攻し、孤児院内の職員、孤児の子供を合わせ約47人を殺害。四肢が散乱している死体もあり、正確な犠牲者数は無判明。生存者1名。天人が意思を持ったかのような行動で孤児院を襲い、理由は不明。尚、その後の天人6体の姿は見付かっていない』

覚えてる……絶対に忘れない。

腕を切り落とされ、泣き喚きながら死んだ男の子。逃げようとして首を刎ねられた女の子。僕を庇って刺された先生。その時に浴びた血の生暖かさと、鼻を突く鉄の臭い。紅い翼を生やした天使の、見せしめと言わんばかりの残虐な振る舞い。

鮮明に記憶が蘇り、頭が痛む。吐き気を抑えて、何とか教科書を閉じる。

(なんで……僕は生きてたんだろう)

天人が僕に向けて剣を振り下ろすまでの記憶は、過去へ戻ったかのように思い出せる。だけど、肝心のその後が見えない。その状況だけ見れば、子供の僕は剣で斬られて死んでいる筈なのに。

(なんで、僕だけ生き残ったんだろう)

優しくかった先生や、仲の良かった友達。日が経つ毎に徐々に薄れ

ていく彼等の面影。

今の非力な僕を思うと、情けなさとし訳なさで、また頭が疼いた。

17 『彼女宣言&嫁宣言』（後書き）

改善版です。

いやー……改善しました、結構むちゃくちゃ頑張りました。

毎回思うけど、文章考えるのって難しいですよ。かなり頭を悩ませてくれますが、完成した時の感動が一塩です。

最近灯火メインの話多いなあ……とか思っていたり。

まあ、可愛いからいいじゃないですか……ねえ？謎を出したいということもあって、思い切って二話とも灯火メインに

他のヒロイン空気じゃないか、とか言わないで下さい……

18 『パフェスプーンは凶器』

神葬具の解放は使用者に膨大な体力、精神力を要求する。その代わり、通常の神葬具とは桁違いの力量を引き出す事が可能。諸刃の剣とは正にこの事。

授業中に教師から呆れられるほど爆睡して、やっと頭が働くようになった。

元々攻撃力が無いあたしの脚鎧の神葬具は、戦闘時に確実にと言って良い程、解放の使用を迫られる。戦闘＝解放なんて図が出来上がったら、流石に身が持たない。

解放した事に加え、近接格闘へ持ち込む運動があるから尚更。疲労除去の為には睡眠と食事が一番効果的のだが、こんな事を繰り返していたら確実に生活リズムが狂うこと請け合い。

「楓、大丈夫？」

午後のみ授業が無事終了し、軽食を買いに学内食堂へ向かう途中、隣を付き添う友人から心配そうな声を掛けられた。

先程から何度も同じ質問をされていて、どうしたらこの友人は納得するのか、と方法に悩む。灯火は心配性過ぎなのよね。解放して疲れ果てるなんて毎度の事なのに。

「大丈夫よ。ちゃんと授業中に寝れたし、体の調子だって戻って来たし」

「その治り始めが一番大事なんだから。あんまり、無茶な運動はダメだよ？それと、寝るなどは言わないからせめて先生に見えないように隠れて寝てね……？」

教科書で顔を隠そうにも、寝ている間に教科書が倒れて結局丸見

え。だったら下手に隠すよりも潔く睡眠摂取していた方が先生も諦めがつくんじゃなからうか。

それと、灯火は神葬具使いよりも看護婦とかの介護系の職業が向いていると思う。気遣い上手だし、手当てが上手いし。きっと男子とかは、灯火みたいな子が好みって人が多いんだろう。あのバカレッチも絶対にその部類でしょ。別にアイツの好みなんてどうでも良いんだけど……。

「でも、こんな時間に食べて、夕ご飯食べれる？」

確かに灯火の言う通り、微妙な時間。我慢しようと思えば出来るけど、解放のせいかな普段より空腹感が強い。出来れば、小さい物でも口に入れて置きたい気分。じゃないと、正直夜まで持たない。主にあたしの堪忍袋が。

それにしても、灯火もあたし達と一緒に戦っていたのに、こんなにも疲労度に差が出ている。わかってはいたけど、後衛と前衛でここまで消耗率が違うと、不満を漏らしたくもなる。こちらは体を激しく動かす分、体力の減りが著しい。後衛はと言えば、限界まで集中力を引き絞るから精神力を主として使う。結局、どちらも使用者次第って事か。

「サンドウィッチ摘まむくらいだし、全然平気よ」

「前のダンジョン授業の後はそう言っておにぎり3個食べてたよね…… 晩御飯半分は残してたし」

「こ、今回は平気よ！大丈夫、ちゃんと食べても2切れにしておくから！サンドウィッチはお腹に貯まらないから！」

おにぎりよりサンドウィッチの方が消化が早い。きっと夕食までには消化が完了している筈。いや、量を考慮したら、いつその事うどん一杯の方が効率良いかも。

食べる物を記憶の中にある学内食堂レパートリーから検索していると、聞き覚えのある声が食堂内から聞こえて来た。何でアイツは授業に出てなかった癖にあたしの行く先にはいるのか。

「あれ、白かな？」

レッヂがいる事に驚いている灯火を置いて、学内食堂に突き進む。文句を言おうにも、レッヂ本人が学内で見付からなかったし、丁度良い機会。深夜の戦闘の時に突然いなくなった事に対しての文句を、ここで晴らしてやる。

「お前等知り合いだったのな」

どうやら舞佳の話を書く限り、エリーゼとは深夜の戦闘中に偶然会ってみたいだ。

舞佳達が天人の集団を闘技場に誘い込み、苦戦している最中に、中位の天人を蒼炎で跡形もなく焼失させ、放火魔の犯行後のように去って行ったらしい。

エリーゼの神葬具は印象に残るしな。俺みたいな銃器ならまだしも、普通の神葬具でここまで特徴があるのも珍しい。能力で狼と猫をこしらえたり、刀の形状にして敵に斬り掛かったり。中位の天人と刷り込みしたからこそその能力。

それと舞佳は、やっぱりこいつの知り合いか、みたいな視線を止めろ。わりと傷付くから。

「白様白様、はい、あ〜ん」

お前は空気を読め。パフェを掬い上げたスプーンをこっちに寄越

すな。

折角授業をサボってまで学内の食堂で静かに飯を食そうと画策したのに台無し。眠気は抑えられても苛立ちは限界があると知れ。

コーヒを嚙りながらの俺の拒否にむくれながら、頭の上に陣取っているケルビンにパフエを与えるエリーゼ。動物に甘い物はダメだろ常識的に。糖尿病にもなるし　ってこいつ等にそんな心配は野暮か。きつと腐った肉とか与えてもピンピンしてる。

『姫しゃま、甘いでしゅ〜』

「良かったわねケルビン。……わたくしも白様にして頂けたらどんなに良いか……ぶつぶつ」

『お嬢様ツ。腕をし、絞めるのは苦しいでござる…ッ』

秘儀、聞こえない振り。

夜に集まる食堂より、一回り小さな学食堂は、放課後になったばかりなことあって、俺達以外空席のみ。思いの外、ここが小さな造りなのは、弁当を学内に持ち込む生徒が多いせいだろう。朝食、昼食は、夕食時と違い自己出費だし、食堂よりも弁当を持参した方が安値で済む。

国の援助も変だよな。何で学費免除で飯を補助する癖して朝、昼飯は省くのか。

「ってか舞佳、お前ぼろぼろだな。解放したのか？」

腕や脚に包帯を巻いて、頭にも何時ものカチューシャ代わりに包帯を巻き付けている。少しばかり赤く染まった血の痕が痛々しい。神葬具に回復系の能力があれば良いのだが、天人に対抗出来ているだけでも驚沢な物言いか。

俺達と別の場所で戦っていたのもあって、被害の大きさは窺えない。舞佳だけが神葬具の制御を誤って傷を負ったのかも知れないし。

ただまあ、緊急時に闘技場という囲み込める場所にまで誘い出した作戦は見事。案を閃いたのはこの手の事態に慣れている3年生だろう。突然出現陣が町のと真ん中に出現しても可笑しくないのが現状だしな。臨機応変な態度は必要不可欠。

「いや……してねえけど、双剣の方が言う事聞かなくてな。振り回されてる時に、ちと攻撃貰ったりした。掠り傷ばっかだから、そんなに痛くねえけど」

本人が言うならこれ以上の追求は止めておこう。舞佳も双剣を使いこなせない事に不安を抱いているようだし、余り深追いすると追いつみに成りかねない。距離感が大切だ。楓とかエリーゼなんかは気にせず土足で押し入るだろうが。

教室に戻るのも面倒になったようで、舞佳は担任の願いそつちのけで購入したメロンパンを貪っている。哀れな教師は、生徒の残っている微妙な空気の教室で、舞佳とエリーゼの到着を待っているに違いない。舞佳の性格知っていて本気で頼み事をしたなら狂気の沙汰だな。

未だに不満を呟き続けているエリーゼを無視してコーヒーを飲み干そうとすると、

「レッチ、アンタ今までどこ行つてたのよ!」

金髪が文句と共にやって来た。ああ、更に俺の休息現場が崩壊していく。もう確実に休めない。放課後に突入したんだからこういう可能性も想定出来たのに、何故場所を移さなかったのか。起こった物は仕方ないが悔いは残る。

きつと楓が言った「今まで」というのは戦いの後の消息か。確かにエリーゼの事で手一杯だったしな。

場に金髪が二人いるという緊急事態。にも関わらず落ち着いてい

られるのはマスコット舞佳と癒し系灯火がいるお陰だ。さつさとこの場を捨てて逃げ出したい気分は変化無しだが。

「ちょっと貴女、白様を馴れ馴れしく呼ぶのはお止めなさい」

席から立ち上がり、憤りを隠せない様子の楓と対面するエリーゼ。同じ金髪でも並んでみると全然違うな。楓が正統派の金髪で、エリーゼがプラチナブロンド。ややこしい金髪事情は止めてくれ。混乱する奴が出て来る。主に俺とか。

コーヒーだけに視線を向けていたいが、それだとエリーゼ対楓が本格的に勃発した際に割って入るのが遅れてしまうので、嫌々ながら振り返る。

パフェスプーンを細剣レイピアのように楓へ向けるエリーゼ。傍目からだと可笑しな金髪達って題名を付けなくなる光景だ。直ぐに寮へ帰りたい。

「何よアンタ、あたしはレッヂに用があるの」

「白様を馴れ馴れしく呼ぶ事を止めなさい、と言ったのですわ」

ああ、徹夜明けの身としては学内食堂に差し込む日差しがきついぜ。現実逃避で乗り切りたい。しかし目の前の金髪2人がそれを許してくれない。

この学園に来てから面倒事としか遭遇してない俺が、平和展開の要求をするのは間違っているだろうか。癒しが欲しい。お色気も可としておこう。

18 『パフェスプーンは凶器』 (後書き)

少し遅れてしまいましたね

少しの間、バトル回はお休みです。

エリーゼが馴染むまで、このままの進行状態でいこうと思います

「あたしはその男に用があんの！アンタは引っ込んで！」
「あらあら、怒鳴り散らすしか能が無いお犬さんは怖いですわね。
もつと上品に振舞えませんか？」

案の定喧嘩になった。楓が食って掛かって、エリーゼがそれを往
なしながらも的確に毒を吐く。最悪のサイクルが完成している。さ
つさと片方を諫めないと学内食堂が崩壊しそうだ。ここ一帯だけ世
紀末の背景になるのも有り得る。

こんな騒がしい状況でも、エリーゼの頭上で幸せそうに寝ている
ケルビンの肝っ玉はどんな形をしてるんだ。溜め息を吐きつつ、怒
り狂う金髪の後ろにいる灯火に視線を向ける。

俺も灯火も、特定の奴の往なし方なら熟知済み。灯火に金髪を任
せ、俺はエリーゼを担当。出来れば担当する相手を代えて頂きたい
が、金髪でも苦労しそうなので、どっちにしる同じか。

灯火と目配せで合図を取ると、同時に頷く。向こうも俺の考えを
察知してくれたようだ。感が良くて助かる。

「誰が犬ですって!?!」

「分からない程おバカですのね。白様に無礼な振る舞いをする貴女
で」

エリーゼが言い終わる前に、エリーゼの背後へ回り込む。モデル
顔負けの長身の腰付近へ腕を回すと、抱き締めて楓からエリーゼを
遠ざけた。抱き締めたエリーゼの髪や体から香る、上品な薔薇の匂
い。本当に、変な事をしなけりや絶世の美女なのに、お粗末。

見ると、灯火は強盗犯を取り押さえるかのように必死で楓の腰に
抱きついていて。その取り押さえている金髪は猛獣か何かか。

猛獣に振り回されている所を見る限り、灯火は長くは持たないだろう。灯火が押さえ切れなくなる前に応援を要請だ。

「舞佳、楓を押さえてくれ！」

「体が痛くて力が出ない……」

どこそのアンパンヒーローか己は。そして戦闘の後遺症がそこまで長引くのか。

流石、じゃじゃ馬双剣と大飯喰らい大剣の神葬具使い。他の神葬具とは威力が桁違いだが、その燃費の悪さも桁違い。普通に戦闘しただけで楓の解放と同じくらいの体力、精神力を持って行かれていくのだろう。双剣の方が言う事利かないから尚更だ。

テーブルに伏せて生霊を出さんばかりに意気消沈している舞佳を見限り、それならばとエリーゼの説得に移る。エリーゼを素早く説き伏せて、そこから楓を黙らせればこの場は納められる。

「し、白様からわたくしを抱き締めて下るなんて……ああ、白様の匂いと暖かさ、それと程好い力強さで痛気持ち良くて、わたくし、感激の余り……ふう」

やべえ凄く離れたい。猛烈に腕の中のこいつを放り捨てたい。

『旦那様……心中察するでござる』

何時の間にかエリーゼの腕の中から抜け、俺の脚をぼんぼんと叩くダイゴロウ。

犬にまで同情される俺って一体。いや、どつちかというに従者に哀れまれてる主人って一体。主従関係以前の問題だろ。

恍惚とした表情でぐったりしたエリーゼを椅子に座らせると、灯火の加勢に回る。既に楓、灯火、共に息切れを引き起こしている状

態だが、金髪の猛獣が相手。油断は許されない。

「まあ落ち着け楓。そんなに怒っていると金髪が逆立つぞ」
「誰のせいよ誰の！あの戦いの時も突然いなくなるし、人の裸は見るし、は、恥ずかしいところも見るし！アンタが来てからのあたしって損ばかりじゃない！」

小便の所は流石に羞恥が勝つか。無理もない、周りには続々と授業を終えて学内食堂にやって来た女子生徒達。この好奇の視線視線。女性の野次馬根性は恐ろしいな。

ただ如何せん数が少ない。戦闘が堪えている生徒も大勢いるだろうし、死者も出たんだ。元気が出せるのも目の前の金髪くらいか。その金髪も現在進行形で青白い顔をし出している。

「大体アンタは……うぷ」

金髪が現在進行形で黒歴史を増やそうとしている。体調悪いのに騒ぐから大変な物が込み上げて来たようだ。幾ら外見が良くてもそれは不味い。

腰に抱き付いていた灯火もその緊急事態に気付いたようで、

「うわツ楓ごめんね！お腹の所押さえてた！平気！？」

「かなり平気じゃない……主に、お昼に食べた物が……おえ」

「き、筋肉痛で死線が……わたしの、匂坂 舞佳の一生はこんなところで終わるのか……！？」

「ああ白様……そんな、今度は前から抱き締めて頂けるなんて……一生付いて行きますう……ふふふ」

阿鼻叫喚。

今日も散々だった。疲れたところの騒ぎじゃない。戦って徹夜後にエリーゼの騒ぎだから尚一層疲れた。晩飯を食べる気力さえ失われている。

制服の上着をベットへ乱暴に投げ捨てる、ワイシャツを脱ぎながらシャワー室に向かう。トイレと別々で、シャワー室が各部屋に設置されている辺り、流石女子学園と言った所か。バストイレ共同じゃない部分は黒羽の要望だと思う。あいつ、バストイレ共同が死ぬ程嫌いつて漏らしてたし。

まあ、女子が入ってるとか気を使わなくていいのは男として気楽で有難いな。

「ああ白様……女性の目の前で躊躇無く肌を晒すなんて、殿様らしくて素敵ですわ……殿方だったかしら？」

『お嬢様、殿様は昔の大名等に使われた言葉でござるよ。旦那様に使うのなら殿方でござる』

まさか女の方が気を使わないなんて予想外だ。気配も足音も消してまで俺の後を付いて来ていたというのか。

幽霊が怖いと言う人、よく考えてみてくれ。幽霊は姿を見せるだけで実害を及ぼさない。結論、何処かのネジが緩んだ人間の方が怖い。

正直このまま振り返らずにシャワー室に立て籠もりたいが、そうすると背後のお嬢様が部屋の中で何をするか分かったもんじゃない。パンツの2、3枚余裕で紛失してそうだ。

「どうして来た？」

「白様のおられる所にわたくし在り、ですわ。何せ、将来を契り合った仲ですもの……誓いの方が良かったかしら」

何時の間にか永久就職宣言してるぞ、このストーカー娘。ちなみに事実無根だ。

振り向くと、しなを作りつつ恥ずかしげに頬に手を当てるエリーゼ。気付く、そんな動作をする雰囲気じゃない事を。今現在、自分が人として道外れた行為をしている事を。

身長の高さとは打って変わって、女性らしい華奢な肩。眠気と疲れからの同時攻撃で、ストレスがかさんでいる俺は、彼女を喜ばす事を知りつつも、力を込めてその肩を掴む。

「んうツ!? ああ白様、そんな、大胆です」

エリーゼが何かを言い終わる前に、有無を言わず開きつ放しになつていた扉から外へ追い出す。間髪入れず扉を閉めて、きちんと鍵を掛けると額の汗を拭った。

一仕事終えた後は清々しい。辛い現実忘れて早々にシャワー浴びて寝よう。部屋の扉が叩き破られんばかりに激しくノックされているが幻聴だ。俺は何も聞こえない、聞こえません。

部屋の前の表札に書かれた『匂坂 舞佳』の字。そして、その下に追加された『エリーゼ』『デイ』『アルフォート』の名前。つい昨日までの寂しい1人部屋が、予期せぬ相部屋のお陰で2人部屋に。まさか知り合っただばかりの奴とルームメイトになるとは。しかも

「白様あ……わたくしの何がいきませんのお……」

こいつの神葬具と同じで、絶対零度を体現したような落ち込み具

合。帰って来たと思いきや、体育座りで部屋の隅に居座るし。息苦しい事この上ない。体育座りの背中から冷気が漂って来ている気さえする。冷房要らずで節電になるからこのままにして置こうか。

『お嬢様、気を落とさず！次はきつと旦那様も分かってくれるでござるよ！』

『姫しゃまゝ飴を舐めて元気出すでしゅ〜』

頭の中に直接響く声を発しながら主人を慰める犬と猫のペット。

白から教えて貰ったのだが、あの2匹共エリーゼの神葬具から創り出された生き物らしい。どっちかと言うと無機物か。ああ見えて呼吸すらしてないのだから驚き。事前情報無しに、2匹のペットが喋り出したのを聞いたら、心臓が口から飛び出していたに違いない。子犬の方は前足で慰める様に主人を優しく叩き、饅頭のような猫は頭に飴玉を乗せて主人に擦り寄っている。凄く不思議な光景の出来上がりだ。写真を撮って其の筋の番組に送れば話題になる事請け合い。

「お、おい、どうしたんだ？」

若干迷いながらも、状況を進展させる為に決意を固めて声を掛ける。何事も始めは気遣いから。

わたしの呼び掛けにぴくりとも反応しない背中。会話不成立。夕飯も食った事だし、面倒事に巻き込まれる前に風呂入ってサッサと寝るか。

「その大剣使い、ちょっと話を聞きますんこと？」

遠慮させてくれ、と喉から出かかった声を飲み込む。このまま部屋に放置したら、風呂から帰って来た時にはもう室内氷河期になっ

てる可能性も捨て切れない。大剣使いと呼ばれて一瞬で勘付いた所も、押し留まった所も、我ながら賢い判断だと思う。

それから犬と猫は、話を聞いてあげて下さい、みたいな視線を止める。聞くから、そんな目しなくても。

腹を決める匂坂 舞佳。大剣の素振り50回に比べれば同室生の奴の話の聞くくらいいけないじゃないか。苦しくても精神的な修行と割り切るんだ。

「あれは、白様と始めて御会いした去年の冬のことですわ

」

それからわたしは夜が明けるまでの間、9時間以上の白話を聞かされ続けた。

学んだ事と言えば、人の要望を安請け合いないって事と、男に心酔するなって事だ。この同室生の様に病んだりするのは絶対に避けたい。

白の奴に会ったらこの恨みを絶対に晴らそう。睡眠と、話聞かされ料込みで。

「白様はわたくしの危機に素早く駆け付けてくれて……ふふ、白馬の王子すら霞む素敵さですわね……」

まだ続くのか……いい加減にしろ。

19 『金髪VS金髪』(後書き)

少し間が開いてしまいましたね。

あべぼんちゃんねるは、また挙げられる時が着たら挙げようと思います。

全キャラ出揃ったらかな…?と作者的に考えています。

20 『付き添いだから、デートじゃない!』

「えッ!? 灯火は行けないの!?!」

「う、うん。昨日先生に用事を頼まれちゃって、午後まで行けそうにないんだよ……」

折角の休日。ある種恒例行事になりつつある灯火とお出掛けが、一瞬で白紙に戻された。

既に制服に着替え終えて、済まなそうにしている灯火の言い分だと、午後過ぎからなら出掛けられる様だが、それではあたしの本願が果たされなくなってしまう。

手に握っている二枚の映画のチケット。今日はこれが目的で外出する予定だったので、灯火が行かなければ千二百円分の損失。それ以前に、灯火がいなければ、あたしは都内に出掛ける事も出来ない。

「一人で行く」

「だ、ダメだよ楓!道に迷っちゃうし、また男の人殴っちゃうかも知れないし!」

あたしの言葉を遮る、灯火の失礼な物言い。だが、それが全て本当なのだから言い返せない。

不本意だが、あたし、小波 楓は方向音痴だ。何回も行っている都内の映画館にすら灯火の案内が無ければ辿り着けない。以前、灯火の作ってくれた地図を頼りに単独で赴こうとしたが、何故か裏道まで進んでしまい、如何わしい店の並ぶ界限に飛び出してしまった。無論、顔を隠しながらの全力逃走である。

次の男の人を殴るといふ言葉。あたしの髪は、突然変異なのか血筋にはない金髪で染まっており、見つけて下さいと言わんばかりに目立つ。軽い男がその目印を頼りに近付いて来て、目に余るしつこ

さに、こちらは嫌悪感最大出力の蹴りで応戦。危うく警察沙汰になりかけた事もある。

「でもどうしよう。これ午前の部で終わっちゃっし」

戦闘で疲れ果てた体を睡眠で癒し、娯楽にいざ行かんと思いきや中止の危機。何より前売り券なのが痛手。予約だったら電話を入れて取り下げるのだが、もう出費をしまっている。出来ればこの券を無駄にたくない。

その実、前売り券だと三百円お得に釣られた結果がこれだったりする。

「だったら、白に頼んでみたらどうか……？」

何かを思案していた灯火が、とち狂ったのか唐突に口にする。

灯火だって、あたしとレッヂの関係を知らない訳じゃない。言われた内容が内容なだけに、意味が分からず呆然としてしまった。宙を漂っていた意識を無理矢理引き戻すと、頭を振りつつ、手のチケツトを握り締める。

「レッヂに！？ 無理、絶対無理！あのレッヂよ！？」

「どの白かは知らないけど……楓を一人で行かせるより、僕は白を頼った方が良いと思うなあ」

この子は言葉の節々に脅迫観念を織り交ぜでもしてるのだろうか。普通に諭されているだけなのに、強制されている気がする。そりゃ、確かに男が近くにいた方が安全だし、レッヂだったら道には迷わないだろうけど……なんか複雑。

というより、アイツがこんな頼みに乗って来るとは到底思えない。どうせ適当に理由をでっち上げて逃げる筈だ。そうなたら有無を

言わずに単独で都内に外出しよう。流石にそれなら灯火も引き下がるだろうし。

「とにかく、一度白に言ってみようよ」

「この信号を右か。しかし分かり易いな、灯火の地図」

高を括っていたあたしがバカでした。まさかこの男が誘いに乗って来るなんて、予想外過ぎて涙が出る。

その後、丁度良く寮のリビングでくつろいでいたレッヂに灯火が声を掛け、要望の内容を説明。どうせ断るに決まってる、遠くで様子を窺いながら決め付けていたあたしは、灯火が出した大きな丸印の身振りに口を開けて呆然としてしまった。

（灯火に提案された時は気付かなかったけど……デート、よね。これって）

気付かれない様に隣を盗み見すると、灯火に書いて貰った地図片手に辺りを見回している、都内の町並みには不釣り合いな黒コートの男。その証拠に、通り過ぎる人々が必ずと言って良い程、振り返る。

きっと、その振り返る要因にはあたしの金髪も含まれてるんだろうけど。

学園内とは違う、大多数の人が行き交う都内の雰囲気。人によりけりだけど、あたしはこの空気はあまり好きじゃない。元々人混みという物が苦手だし、生まれ持った金色の髪の毛のせいで、変に注目を浴びてしまう。用事が無ければ、赴く事すら考えない。

「ここ辺りみたいだな。もうちょっとだぞ、金髪」
「な、何度も来てるからわかってるわよ……それと、金髪って言うな」

普段ならもつと文句を言ってるんだらうけど、今日は止めにしておく。映画が楽しみなのもあるけど、実はこの男、ここに辿り着くまでに色々気を使ってくれたのだ。混み合う電車内で空間を作ってくれたり、度々休憩を挟もうとしたり。

いつその事、いつも通りに軽口叩く態度でいてくれれば、こんな気持ちにならないのに。変に気を回されたら、意識しちゃうじゃない、ばか。

(いや待てあたし！こいつは、あたしを引ん剥いて、あまつさえ見ではならぬ現場を見た張本人なのよ！これは違うの！むず痒いこの感じは恥ずかしいんじゃないやなくてッ！そう、敵対心よ敵対心！)

赤くなっているであろう顔を他人に見られるのが嫌で、俯いて歩いていると、軽く柔らかい壁にぶつかる。驚きつつ顔を上げると、ぶつかった対象であろう、立ち止まった黒コートの後姿。歩みが遅くなり過ぎたのか、何時の間にかレッヂの後ろに回っていた様だ。

「ちょっと、何で立ち止まってるのよ」

女とは全然作りが違う広い背中に向かって文句を言つと、黒コートが文句に引き寄せられるように、こちらへ振り向く。何だか、鬼気迫った雰囲気を感じているような気がするんだけど、気のせいかなんだろうか。

「おい金髪。ちょっと今日観る映画のチケットを見せてくれ」

「な、何よ、いきなり……。はい、これだけ」

唐突な申し出に戸惑いながら、財布に入れてある前売り券二枚を取り出す。鞆とか面倒な物は持ち歩かない主義なので、財布なんかもポケット行きになるのだ。自分で言うのも何だけど、女としてどうかと思う。

差し出された券を受け取ると、それを凝視するレッヂ。気になる事でもあったのか。

「ああ……俺の見間違いじゃなかったんだな」

頭を抱えかねない表情でそう言うレッヂの背後には、見慣れた目的地の映画館。そこ大きく張り出された、目的の映画の広告には、全身スーツに身を包んだ印象的な人物が、爆発を背景に飛び蹴りの体勢を取っている。

確かレッヂには観る映画の内容を教えてなかったっけ。でも、正義の味方は万国共通。しかもレッヂは男なんだから、この映画に心惹かれない筈が無い。

無意識に感情が高ぶって来る。ここ最近、災難やら戦闘やらでストレスが蓄積していたし、一気に発散出来るのは良い事だ。先に映画館の入り口へ入って行くチビツ子達を見て、負けじと後に続く。

「まさか特撮ヒーロー物とはねえ……。悪くても恋愛物とか考えてた俺の負けか」

「何ぶつぶつ言ってるのよ！ほら、さっさと行くわよ！」

先程とは打って変わって、あたしの後で何かを呟いていたレッヂの腕を引っ張る。もう上映まで時間が無いみたいだし、席は指定だけど早めに座って置きたい。

「引っ張るなって。行くから、自分で行けるから。伸びる、袖が伸

びる」

灯火に頼まれ事をされて、映画を観に行きたいなんて言う物だから、てつきり依頼主と行くのかと思いきや、

「楓を連れて行ってあげて欲しいの!」

だもんな。友達思いというか、何というか。

まあそれでも金髪のエスコートを引き受けた理由としては、生の映画館という物を見たかったからだ。記憶喪失になる前はどうか知らないが、今の俺が生まれてから、映画館なんて所には一度も行っただ事がない。本の方が性に合っているし、趣味に合う映画は大抵テレビで放映されるくらい昔の物。映画館に出向く必要性もなかった。それに、今の俺が知らない物を見れば、もう5年以上も思い出せないままにいる昔の記憶が蘇るかも知れない、なんて淡い期待も混じっていたりする。

(しつこいエリーゼを何とか撒いて、名作の映画でも観るのかと思っただら特撮って……)

と思つて上映まで気を落としていたんだが、観始めたら中々面白いな、これ。

内容としては、悪の秘密結社と戦う改造されたサラリーマン主人公って感じなのだが、結構奥が深い。敵役も良い味出してるし、食わず嫌いはダメだなと実感する。戦いと家庭と仕事で三つ巴になつてる場面なんて見物だ。楓が熱狂するのも分かるな。

おお、キックか。今の必殺技の蹴りって、楓が多用する飛び蹴りに酷似してるんだが、まさかこれ観て練習したのか、お隣の金髪。

「ちよ、ちよっと……あんまり寄らないですよ」
「カップルシートなんかにするからだろ。300円返金に釣られたお前が悪い、諦めろ」

二つの席が連結して、真ん中のサイドバーが取り外されたカップルシート。普通に座っていると、体が密着して映画どころの騒ぎじゃない。無理に距離を取っている今でも、楓の葡萄っぽい香りが漂って来る近さ。

受付で応対中に、受付嬢からの「カップルシートが空いていて、そちらならお二人様で三百円引きになりますけど、如何ですか？」の言葉に楓が釣られて、普通の席から2人にしては狭苦しい相席へ。確かに特撮映画を恋人同士で観に来るはないだろうな。他の席も結構空いているし。

そして金髪は文句言うなら三百円高くても普通席にすれば良かったじゃないか。抹茶オレの代金の時も思ったが、変に節約家なんだよな、こいつ。

「い、いいいい今アンタ、あたしの脚触ったでしょ……！」

細くて綺麗な脚だが、恋人でもない奴にそんな事したら犯罪だろ。誰がするか。

ニーソックスに包まれた脚を俺から離しつつ、警戒状態を保ったまま画面に集中し始める楓。器用だな、お前。だが警戒に視線を割いていると大事な場面を見逃すぞ。

『喰らえ、必殺！ライダー　　イイイイイクツ！』

必殺技となると派手だな。怪人が木っ端微塵。しかし館内の子供達は喜んでいる。隣の金髪も警戒を解いて吊り目の瞳を輝かせてい

る。世も末だ。怪人とはいえ生き物が内部から爆発して喜ぶとは。自分の夢の無さに苦笑していると、ふと小さな光が楓の方向から漏れているのに気付く。

不思議に思い視線を向けると、映画に見入っている楓の露出した両腕に、奇妙な文字が浮かんでいた。何所の国かも検討が付かないほど、歪な複数の文字。それが、鈍く発光している。

「な、なに見てるのよ……」

俺の視線に気付いたのか、楓が胸元を隠しながらこちらを睨んで来る。

着痩せするかどうかはさて置き、灯火より少し小振りだな。

ではなく。

楓に、お前の腕が光っていると伝えようとした時、楓の両腕に浮かんでいた不思議な文字列が、まるで幻の如く掻き消える。光どころか、焼き入れられた烙印のようだった文字までも、跡形も無く綺麗サツパリと。

「ばか、えつち……見られてると、映画に集中出来ないじゃない……」

なんか親切で教えてやろうとしたのに更に評価が下がってるんだが。証拠が消えた今となつては弁解しようとしても無駄なので、諦めて放っておこう。映画に集中して、全てを忘れて貰うのが一番都合が良い。

しかし、何だったんだ、さっきの文字は。気になって映画の内容が頭に入らないぞ、どうしてくれる。

20『付き添いだから、デートじゃない!』(後書き)

大幅修正入れました……疲れた

けっこう変わっているので、楓の出し方も変わっています。
前より良くなってると思うんですけど……

21 『意識なんてしてない……』

「ほら、面白かったでしょ？」

「何でお前が誇るかは分からんが、確かに面白かったな」

正直、楓の両腕が光るのを目撃してからはそつちに意識が持つていかれて、映画どころじゃなかった。あの奇妙な文字列が、また現れるんじゃないかと見張っていたが、結局最後まで現れずに見張り損。映画の見せ場も見逃すし、疑問は深まるばかり。

カップルシートのお陰で浮いた金で、パンフレットを購入した楓を引き連れて、納得のいかないまま映画館を後にする。

時間も良い頃合なので、昼食を食べる為に立ち寄った喫茶店。オーダーテラスを案内されたままでは良いが、そこから楓の熱弁が始まった。人は好きな事を話すとなると饒舌になると言うが、正にこの事。

「朝にやってるやつだと迫力に欠けるけど、やっぱり映画だと違うわね！」

瞳を輝かせ、特撮を熱く語る金髪。お前が注文したメロンソーダの氷が、コースターの上で大半溶け切ってるんだが、助言するか否か。今の調子だと、楓が語り終えた頃には氷が全て溶けて、飲む気が失せる程薄まっている事は間違いない。

いや、楽しく話している楓を邪魔するのも野暮か。後悔しながら飲んで貰おう。

料理が来るまでの繋ぎで頼んでおいたコーヒーに口を付けると、こちらは冷めつつある。冷めるだけだから、と安心出来ないのがコーヒーって物だ。冷めると大体の安物は不味くなるんだよな。

「灯火も来れたら良かったのに……」

語り続けていた途中で、楓が言葉を区切り、残念そうに口にする。確か朝聞いた話だと、灯火は学園で用事があったんだよな。委員長でもあるまいに、休日までご苦労な事だ。

分からない程度に諭して、楓にお土産を持たせるのも良いだろう。もし、あの購入した映画のパンフレットが灯火へのお土産だとするならば、灯火が不憫過ぎる。俺が灯火の立場でパンフレットをお土産に貰ったら、間違いなく枯れるまで涙を流す。

「まあ、帰ったら感想を伝えたら良さ。それに、また別のも観に来るんだろ？」

「決まってるじゃない。実は来月に違うやつが上映するのよね。これは宇宙から来た巨人が怪獣相手に戦うやつなんだけど」

俺に楓の事を頼んでいる最中、灯火は行けない事を本当に残念がっていた。だったら、少しでも灯火の代わりに、こいつを楽しませてやろう。たまの休日だ。全てを忘れてノンビリ過ごすのも悪くない。

そして金髪、お前あの映画の主人公の蹴りを模倣してたよな。今度は腕から光の光線とか出したりしないか本気で心配だ。両腕から光を発してたお前なら冗談抜きでやりかねない。

「それでこの5人で協力して相手を　ちょっとレッヂ、聞いているの!？」

何時の間にか話題が特撮戦隊物へ移っている。このまま語り続けさせたら夜まで続きそうだ。

頭を抱えそうになりながら、灯火はいつもこんなのを相手にしているのか、と同情の念を覚えた。灯火には胃炎から離れた健やかな老

後を送って欲しい。

「半分払うって言ったのに……何で払うのよ」

昼食を済ませた後、少しの間化粧室に行っていたら、会計を済ませたレッチが喫茶店の出口で手を振っていた。割り勘だと決めて、払う金額まで計算しておいたのに。

半分は払うと意固地になりつつ食い付いても、「こういう時には男に見栄を張らせるもんだ」の一点張り。石で固められたかのような頑固さに、遂には白旗。どうあっても譲る気はないらしい。

でも、やっぱり納得いかない。強引にでもお金を受け取って貰って、と考えていた時に、前を先導するレッチの背中を眺めて、ある出来事が思い起こされる。

（も、もももしかして、レッチは……デートって思ってるの……？）

随分前に、灯火が他の生徒から押し付けられた女性雑誌を、2人で読み耽った事がある。デートの事やその時の服装、相手の行動。女子なら絶対に、一度は興味を持つ内容が所狭しと綴られていた。その中に書かれていた一行の文。

男性は異性へのアプローチの際に、奢りを提示する事が多い。女性から見たら何気ない外出でも、男性の方はデートと決め付けている場合が多い。

（ち、ちち違うの！あたしは灯火と映画に行くつもりで！でも灯火が行けないから、レッチに付いて来て貰って……付き添いなよ！デートじゃないデートじゃない……ッ）

熱くなり掛けた頬を両手で押さえて、首を何度も横に振る。こうでもしないと、予想外な事態過ぎて、発火しそうな程恥ずかしい。自慢出来る事じゃ無いけど、あたし、小波 楓は生まれてこの方、デートなんて物をした事がない。体を鍛えて、神葬具に慣れる訓練をする毎日。娯楽も殆ど無いに等しい日々で、自分がこんな状況にいる事さえ信じられない。

きつと今まで普段通りでいられたのは、映画に気が逸れていたのと、異常事態過ぎて事態の重さに気付いてなかったから。

「ん？どうかしたか金髪」

「な、ななななんでもないない！気にしないで先に行つて！」

絶対に赤くなっているだろう顔を見られるのが嫌で、振り返ろうとしたレッチの背中を強く押す。

不自然かどうか関係ない。今こいつに顔を見たら、比喻抜きに逃げ出してしまえそうさ。それこそ、神葬具を装着して周囲の人を薙ぎ倒しながら。

もう映画を観て昼食を終え、帰路に就くだけだが、駅前まで正気を保つてられるかも定かではない。

「見られてると……変になりそう……」

「楓……楽しんでると良いな」

休日の教室。教師から頼まれた資料を片付けている最中、ふと、送り出した友達の顔が思い浮かんだ。

僕自身、男の人と2人つきりなんて状況は、天人に襲撃される前

の、あの夜が初めてだった。楓の寝相で目が覚めてしまい、深夜に寮のロビーに行くと言がいて。変な勢いで散歩に誘っちゃって……今思い出しても自分の大胆さに頬が熱くなるのを感じる。

あんなに短い時間でも、恥ずかしさで胸が苦しくなったのに、今の楓の状況だと尚更だ。

出掛ける時は緊張感なんて微塵も感じさせなかったけど、楓って妙な所で鈍感だし。

「後々緊張し出すんだよね、楓って」

やり始めは顧みずに何にでも特攻するが、改めて根本が分かると慌て出す。友人の短所の1つである。

きつと楓は、少し時間が経った後、初めて自分が男の人とデートをしていると気付くんだろう。映画館だと映画に夢中で、そんな事気にも留めないと思うけど。1つの事に集中し出した時の楓の集中力は、目を見張る物があるし。

映画を観た後は、真っ直ぐ帰って来るのかな。楓は、映画の感想を、目を輝かせながら教えてくれるに違いない。

「……なんでだろう、胸が苦しい……」

楓と白が並んで歩いている場面を思い描いて、不意に心臓の辺りが小さく疼く。

白との散歩を呼び起している時のような甘い痛みじゃなくて、胸が締め付けられる感じの、息苦しい窮屈さ。喉が渴いて、手元に置いておいたペットボトルのお茶を手に取る。

応援しなきゃ、友達が頑張ってるんだから。この胸の苦しさは、作業が長引いているからだ。

お茶を無理に喉へ流し込むと、自分に言い聞かせながらペンを握む。早く終わらせて、楓が帰って来たら笑顔で出迎えよう。大丈夫、

きつと、楓が帰ってくる頃には笑顔でいられる筈だから。

何故か俯きつつ俺の後ろを歩き続ける楓。

どうせもう駅まで行って帰るだけだし、隣にいてくれた方が色々都合が良いんだが。楓と話そうと振り向こうとすると、背中を叩いて制止して来る始末。これじゃ灯火への土産の相談すら切り出せない。本気で土産がパンフレットになるぞ。

それでは余りに灯火が哀れなので、怒鳴られる覚悟で振り向くと、肝心の金髪が失踪。

「おい待て、迷子の達人か」

予想以上の失踪具合に、自分でも訳の分からない言葉が誕生した。このまま見失ったら洒落にならん、と辺りを見渡すと、道一本隔てた向こう側に、目立つ金髪が揺れていた。人混みに紛れても、バカみたいに自己主張する髪は看板のよう。今回は本気でアイツの金髪に感謝しなくては。

子供でも親から離れる時は一言残すぞ、と呆れてると、横断歩道の前で運悪く信号が赤に変わる。立ち往生。

目を凝らして人混みの隙間から楓を見ると、屈んで姿勢を低くした金髪の前に、涙目の幼女の姿。

「そっか、ママとはぐれちゃったんだ」

普段とは違い、優しい顔を浮かべながら子供の頭を撫でる楓に、怒る気力が失せてしまう。でも、せめて一言は残して行け。お前もその子と同じ状況になり掛けるぞ。

信号が青に変わり、迷子と思われる子供をあやす楓に、歩み寄り

ながら遠くから声を掛けようとする。

「おーい、かえ……で」

子供を慰める楓。その後ろの空間が、
波打つ水面のように
激しく歪む。

目を見開いた。何度も見た光景だ。そう、何度も何度も。あれを見る度に人が死に、鮮血で場が赤く彩られる。

歪んだ景色を食すかのように取り込み、突如出現する紫に発光する文字の陣。楓の後ろだけではなく、其処彼処に、同じ円陣が、目視できる限りで4つ出現。魔法陣と言っても過言ではない禍々しさに、周囲の人々が悲鳴を上げる。そこからはもう、見るに耐えない大騒ぎだ。

「楓ッ！そこから離れる！」

予想してなかった訳じゃない。でもまさか、こんな高頻度で近辺に出現陣が現れるとは。しかも、狙っていたかのように分断されている最中で。

出現陣から必死で遠ざかろうと押し寄せる人波を、強引に掻き分けながら楓に向かって叫ぶ。

しかし、目に映ったのは逃げようとする姿ではなく、呆然と立ち尽くす楓の姿。何故か共にいた迷子の姿が見当たらない。背後の円陣から現れているのは、楓の背中を狙っているであろう槍の穂先。

「かえでええええええええええッ！！！！！」

21 『意識なんてしてない……』 (後書き)

前投稿した21話の改訂版です。

変に長かったので取り置いておいたこちらを採用。

エリーゼと舞佳が消えたのは残念ですが、また次回にでも出せると
思うので、

その辺は大丈夫かな・・・と。

他にも改訂している話があるので、暇があれば読み返して頂けると
幸いです。

22 『戦う意味、光の剣』【挿し絵】

駅までの帰り道の途中、まだあたしは、レッヂと口を利けないでいた。

俯き加減で後ろを付いて行っていた時に、それがふと目に留まる。横断歩道を隔てた向かい側の歩道で、身を縮め、顔を両手で覆っている少女。見える限り、少女の周りには、見て見ぬ振りをして横切る通行人のみ。迷子、なのだろうか。

一緒にいたレッヂに一言声を掛け様としたが、どうやら余所見をしている内に逸れてしまったらしい。薄情な奴とも思ったが、あたしが無言で後ろを歩いていたのもあって、気付かなかったに違いない。

気付くと、脚がその女の子の方へ向いていた。信号が青になったのを見て、時折通行人にぶつかりつつも、女の子へ近寄る。

「どうしたの？」

あたしが屈んで話し掛けると、女の子が俯いていた顔を上げる。やっぱり泣いていたようで、四葉のクローバーの髪飾りが映える、可愛く整った顔が若干朱色に染まっていた。

財布を収納している方とは反対側のポケットに手をつ込み、灯火に持たせて貰った花柄のハンカチを取り出す。灯火が出掛け際にハンカチを手渡してくれなかったら、何で拭いてあげようか本気で困っていた所だ。

「人を探してて……どこにも見当たらないの」

涙を頬に伝わせながら、しゃくり上げる少女。

涙が溜まった目元を優しく拭き取り、女の子に笑みを見せる。こ

ういう時は、子供の心細さを無くす為に、身近で接する人物が笑顔でなくてはいけない。心許せる相手だと分かると、子供も安心出来る。

「そっか、迷子になっちゃったんだ」

この子が探している人と言うのは、やっぱり両親なんだろうと、自分の中で結論付ける。

女の子の小さな頭に手を乗せると、緩やかに手を動かす。他人の頭を撫でるなんて何時以来だろう。

迷子の子はくすぐったそうに目を細めて、少しずつしゃくりを緩めていく。心を許してくれてる証拠だと受け取って良いだろうか。以前同じ様な状況になって、灯火がやっていたのを手本に、見よう見真似で実行したのだが。

「ね、お姉ちゃんが一緒に探してあげようか？」

逸れたレッチの事もあるし、合流してから探そうとも考えたが、それだと女の子の不安感を更に煽ってしまう。もしかしたら迷子の母親を捜索中にレッチと偶然再会出来るかも知れなし、この子と一緒に探し回るのが一番良い行動だと思う。

あたしの提案に、落ち込んでいた女の子が期待を込めた視線を送って来る。

「いいの……？」

「任せときなさい、絶対に探し出してあげるから！」

我ながら無責任だけど、これくらい大見得切つとした方が、この子も安心出来るだろう。

さて、何時までも迷子の子じゃ変だし、自己紹介を兼ねて名前を

訊きいておこうか。そう思い、女の子に問い掛けようとした時、突然周囲の人々がざわめき出す。中には、甲高い悲鳴も混じっていた。事故でも起きたかと思っただが、交通事故にしては騒がしい衝突音等が無い。

「でもね、お姉ちゃん。いいの、もう見付かったから」

あたしの背後を指差して、少女が　　その年齢の物とは思えない残酷な笑みを浮かべ口にする。その頃には、もう周囲のざわつきは悲鳴や叫び声に変貌を遂げていた。その言葉の波の中で何度も響く、天人という言葉。

意を決して振り向くと、直ぐ傍にある禍々しい気配を発する一人分の文字円。今の地球上に、この存在に対して怯えを抱かない人間はいない。そう称されるのも納得する程の威圧感。それが、徐々に数を増していく。規模にして、学園襲撃時の二倍ほど、だろうか。「結局、”あいつ”は見付からなかったけど……お姉ちゃんは同じ匂いがする。折角ここまで来たんだから、自分への手土産も一つくらい欲しいし……」

迷子の少女が合図をするかのように、その華奢な腕を挙げると、現れたばかりの出現陣から続々と赤い翼を持った西洋甲冑が出現。各々に物々しい凶器を携え、一見、誰もが見惚れん美しい姿。今の世界中で、その姿を見て悲鳴を上げない者はいない。

「あなた……誰なの……?」

目の前の出現陣から目が離せず、背後にいる少女へ視線を向けず問う。

目の錯覚なら嬉しいが、この少女が指差した場所に出現陣が現れ

衝撃で体が浮き、後方へ吹き飛ばされる。

背中に衝撃が走り、意識が遠ざかる感覚。微かに聞き取れた音から察するに、何処かの店のガラスを突き破ったのだらう。勢いは消えず、そのまま地面をボロ雑巾かのように転がる。

体のそこ等中の傷から溢れ出た血が、体の転がった痕跡を残していた。

朦朧とする意識の中、自分の状態を確認しようと目を開く。純白の光を纏った右腕を動かそうとするが、激痛が走るだけで動かす事も敵わない。流石にここまでの怪我だと、腕一本で済んだのが奇跡だな。

（指が動く……神経は生きてるか）

武器を出す余裕が無く、この力で受け止めるしかなかったが、骨折程度で済んでる点から考えるに、出現陣から槍を突き出したのは下位の天人。もし中位からの攻撃だったのなら最悪、体丸ごと持つて行かれていた結果も有り得る。

力を振り絞り立ち上がるうたとすると、体が堪え切れず嘔吐物が胃から逆流した。我慢せずに吐き出すと、コーヒーと少量の血が混雑している。胃液も混じっていたのか、喉が焼けるように熱い。

「はは……こんなにきついのは久々だ」

ガラス片で裂けたのであろう頬の傷。そこから伝う血を舐め取り、コートの袖で口元を拭う。外見だけなら酷い有様だが、中身はそこまで傷付いてない様だ。受身を取ったのが効いたな。

突っ込んだ場所の内部、小綺麗な内装から見るに、レストランか。進入経路は盛大に割れた窓ガラスが物語っている。損壊の請求は国に提出してくれ。

しかし、ここまで酷い有様だと奥の手なんて言ってられないな。正直、右腕が使えない今の状態で、天人相手に銃器で戦うのは厳しい。使えたとしても威力の低い拳銃、短機関銃が精々。それならば尻尾巻いて逃げ出した方が懸命だ。

「あれを、使うしかないか」

使うのは久方振りである。舞佳の双剣のように拗ねてたりしなければ良いが。

痛む体を酷使し、歯を食い縛る。想像するは一本の剣。純白の光で包まれた、守る為の剣。

「来なさい、神葬！分け隔てなく包み込む風をここに！」

あたしを庇って吹き飛ばされたレッヂ。不幸中の幸いか、攻撃を繰り出したのは中位ではなく下位の天人。あの光で防いでいた様だし、中位からの攻撃じゃない分、まだ傷は浅いだろう。

直ぐに駆け付けたいが、それを邪魔する様に動く四体の天人。外見から判断出来る限り、この内二体は中位。軍隊に配属された優秀な神葬具使いでも、二人組みで中位一体と互角に戦うのが精々。その中位二体に合わせて下位が二体。

武器を出せたにも関わらず、時間稼ぎすら怪しく、もはや五分持たずに蒸発させられる状況。

（何なのよ！天人って知能が無い筈じゃないの！？）

天人学から学んだ知識では、天人は上官に指示されて動く木偶人形当然の筈。なのに、今は知恵を得たかのように、あたしを取り囲

む四体の天人。

その他にも十数体に及ぶ天人が出現陣から現れ、逃げ惑う人々に猛威を振るっている。今こうして攻めあぐねてる間にも、何人もの命が散らされる。

其処彼処が血で染まり、数分前まで賑わっていた都内の町並みが地獄絵図と化していた。

下位が得物で子供供問わず人間を八つ裂きにし、中位が圧倒的な火力で建物を破壊。何人もの通行人がその下敷きに。今この瞬間だけで、何十人の命が奪われているのだろうか。

(アテンド解放しても……この状況だと……)

あたしを囲んでいる四体が、様子見をしているのか動かない。こちらから攻めたいが、解放して暴れ回っている最中に力尽きた、なんて目も当てられない。それも、中位が二体いる状況で。解放を行って戦ったとしても、形振り構わず真正面からぶつかれば、こちらが粉々になる。

囲んでいる全部が全部、前衛型なものも絶望的だ。中位二体に至っては、両方が盾持ち。

「どうすれば……」

躊躇していた最中、遠目で見えた光景。天人が逃げ惑う一人の子供を捕まえ、得物の剣で首を斬り落とした、それを見て自制の緒が外れる。

(構わない。力尽きる……上等。何があっても、こいつ等は、こいつ等だけは許さない。あたしの大切な人達を殺して、また他の命を目の前で奪う……こいつ等だけは……ッ！)

屈んで脚鎧に触れて、迷わず制限を外そうとした時、あたしを囲んでいた一体の下位天人が音を立てて崩れ落ちる。中位の天人だけに注意を払っていたのもあって、その突然の大音に驚き脚鎧から手を離すと、そちらへ視線を移す。

「はは……こうしてお前を守るのは、二度目だな」

右腕を力無く垂らし、倒れ込んだ天人を踏み付ける男。着ている黒コートは、下の服も同様に右腕部分が無くなり、他の箇所も酷く裂け千切れている。

額から血を垂れ流しながら動いている姿は、狂気の沙汰。

そして健在な左手が握っている武器。石で造られたかに見える刀身に、魅せる為に施された装飾。最も目を引くのが、その剣に纏わり付く純白の淡い光。レッヂが解放の時や、素手で敵を攻撃する際に使用していた光が、その武器を包み込んでいる。

レッヂは傷だらけの姿で、得物を構える天人達から守るように、素早くあたしの前へ立つ。

倒れそうで、体の至る所から血を流しながら、それでも頼もしく映る背中、光の剣のせいだろうか。それとも、あたしの瞳が、レッヂをそう見せてるんだろうか。

> i 2 8 5 8 9 — 2 1 3 <

「守ってやるよ、何度でもな」

22 『戦う意味、光の剣』【挿し絵】（後書き）

最新話の改訂版です。

随分修正入れた……え、ちよつとだけだろ？

見て頂いたらわかりますよ、ええ。なんか主人公カッコよくなってますよ、ええ。

23 『ただ1人の為に』

「白様が何所にも見当たりませんの……」

『お嬢様、気を落とさず！旦那様は絶対に見付かるでござるよ！』

わたし、匂坂 舞佳は大変後悔している。

学年が二年に上がり、相部屋の生徒が天人の襲撃で命を散らした一人になってから相部屋生がいる心地の良さが分かり、転入生が同じ部屋になると聞いた時は少しばかり心が踊った物だが。その時の自分に今の状況を提示してやりたい。

隈が浮かび、半ば強制的に寢床から引き摺り出されたのが昼過ぎ。夜が明けるまで続けられた惚気話と、休日の気だるさが相まって、今直ぐに布団へ逆戻りしたい気分。

それに加えて、わたしの前では、自分の神葬具の蒼炎を意識しているのだろう青いドレスを着込んだ女子生徒が、場違いに女子寮を闊歩している。頭には饅頭と見紛う猫を乗せ、腕には毛色が青い犬を抱いて。

「落ち着きなさい、エリーゼ。優雅な白様の事です。もしやカフェで珈琲を嗜まれているなんて事も」

仕舞いには自分に助言をし始める英国のお嬢様。何かを間違っても、こうは成りたくないな。注目的になっていて事に気付く。

周りから同一視されるのを避ける為、悪足掻きの視線逸らし。ダメだ、どんな行為で誤魔化そうとも、このお嬢様に引き連れられている構図は間違いなく同じ人種と勘違いされる。違うぞ、わたしは一般人だ。少しばかり背が小さいだけで只の一般生徒なんだ。

「大剣使い、この学園にカフェは御座います？」

「舞佳って言うてんだろが！いい加減名前覚えろよ、白もお前も！何だ、名前呼ばないのが流行ってるのか！？」

「白様以外の方の名前を覚えるのは苦手ですの」

「自信持つて言う事じゃねえよ！？」

神葬具使いの強い奴等つて、もしや性格捻じ曲がった奴ばかりなのだろうか。そして、この考えが的中していたら変人が世界を守る要。絶望的過ぎて涙すら出ない。出るとしたら乾き切った笑いのみ。自分の運命に苦笑しようとした時、寮の出口から、こちらに走り寄つて来る人影。エリーゼはそれに気付かず、まだ独り言を続けている。こっちはなるまい。

「あれは……灯火か」

白経由で知り合つた控えめな後輩。何でだか知らないが、休日に学園服を身に着けている。

正直、灯火のような大人しい子が全速力で疾走するとは思えないんだが。ほら、下着とか少しだけ見えたし。わたしには無い物が豪快に揺れてるし。エリーゼといい、お前といい、わたしに対する当て付けか。

「せん、ばい……た、助けて下さい！白と、白と楓が……！」

「白様がどうかありませんか？」

お前は白の名前に反応して突然雰囲気を引き締めるの止める。普通に驚くから。

灯火が息切れと焦りで上手く説明出来ていない時に、校内に流れる放送の鐘。休日に、しかもこの音色の鐘は、何所かに天人が出現したって事に違いない。随分頻度が短いな。学園襲撃から3日経つてないぞ。

『現在、都内の駅最寄で天人の襲撃が起きています。3年部、及び出撃可能な教員は速やかに戦闘地へ急行して下さい』

神葬具を出せたは良いが、結構厄介だな、これは。

背後には、中位天人の相手は到底任せられない金髪を庇い、相手は中位2体と下位1体の天人。

俺は右腕が使い物にならず、それに加えて体中が現在進行形で悲鳴を上げ続けている。本音を漏らすと、友軍到着まで何所かに引き籠っていたい程の逆境。痛みで直ぐにでも気が遠退きそうだが、それを上回る激痛がそれを許してくれない。

ここまで追い詰められたのは久々だな。アメリカで大統領が訪れていた基地を背に、最終防衛線引いた時以来かも知れん。今は大統領でも基地でもなく、好き好んで1人の小生意気な女子を守っているのだから、自分の酔狂さに呆れ果てる。

(まあ、思った通りに何体か釣れてるし……犠牲者は減るか)

紅い翼を持つ西洋鎧達が、獲物の臭いを嗅ぎ付けたように、続々と目標を変更。一般人に向けられていた無数の殺意が、肌に突き刺さる。

視界に映る限り、中位は目の前のを合わせて5体。早急に出現陣を破壊しなければ、数が増える事は火を見るよりも明らか。中位の倍はいるであろう下位も野放しとはいかない。中位の方がビルを倒壊させたりと派手に動くが、殺しを行っている大半は下位。血塗られた武器がそれを証明している。

結論を下すと、求められるのは自衛隊が到着するまでの最低限の防衛。被害を最小限に食い止める事。

「れ、レッヂ！アンタの腕！」

「動けるなら自分の心配しておけ」

俺の腕を破損させた張本人であろう槍持ちの下位が、大振りで薙ぎを繰り出す。中位の1体もそれに合わせ、獲物の大斧を片手で軽々と振り抜く。一応とは言え、鎧に包まれた体は女性の体格の天人だが、華奢な体付きから放たれる攻撃は鉄の豪腕に等しい。

連携攻撃、予想の範疇ではあるが、そう易々と受け切れる物ではない。現存する神葬具の中で最強の盾と称される世界3位でさえ、中位2体の攻撃を何とか防ぎ切れる程度。

人間を救う武器と呼ばれても、結局は他者から奪った物。況してや、それは元々天上の代物。扱い切れないのも無理は無い。

「レッヂ、避けて！避けなさいよ！あたしなんかを庇うなあ！」

手に握った剣を構えると、背後に庇っている楓が悲鳴にも似た声を上げる。

今から俺が避けた所で、中位と下位の攻撃が、楓と後方の人間に当たってしまう。もし万一、楓が避けられたとしても、中位の攻撃の衝撃波は、ここで防ぎ切らなければならぬ。

「目え開けてしっかり見てろよ、楓」

石色の刀身に淡い光が絡み付く。剣に施された装飾が、咆哮するかのように鈍く輝く。

確かに俺の神葬具の外見は盾系じゃない。それ処か、石で造形された色の刀身は、一見心許ない。光で覆われて、やっと一人前の武器って感じた。

だが、この剣は俺に光を与えてくれる。世界最強なんて称されて

るのも、大半がこいつの御陰だ。

「これが、世界最強って言われた奴の力だ」

襲い来る攻撃に真正面から剣を振るう。

見せなければいけない。楓に、一般人に。飾りの無い世界最強の力を。天人に対抗する希望を消させない為に。

啞然とした。

逃げて行く大勢の人々と、あたしを庇う為に前に立ったレッヂが、中位と下位の天人の攻撃を一边に受け止めている。

「う、うそ……」

驚きで腰が抜け掛ける。神葬具の強化が無ければ、完璧に座り込んでいた事だろう。

何所からどう見ても、レッヂの武器は攻撃特化の剣。天人の、それも中位の攻撃なんて普通に考えれば受け切れる訳が無い。その上、レッヂは片腕を負傷していて、持っている剣の外見は、どんなに言い繕っても頼りがいのある物とは言えない。

しかし、現実はどうだ。あたしの服を吹き飛ばしたり、天人の鎧を素手で殴っていた際に手を覆っていた純白の光が、中位と下位の攻撃を塞ぎ止めている。剣の外見と反した力は、まるで岩で出来た要塞を思わせた。

「楓、人を避難させる！」

呆然としていた時、あたしに活を入れるレッヂの声が響く。

驚きで体を少しばかり竦ませたが、直ぐに踏ん張って立ち上がり、後方の一般人の群集と、天人の武器を1人で防ぐレッヂに視線が行き来する。まるで、流れ込む大洪水を前に決壊し掛けのダムを思わせる、その姿に迷いが止まらない。

「あ、アンタは……」

「守るって約束したろ。後ろは考えるな」

「無茶よ！いつぱいいいるじゃない！その2体だけじゃないのよ!？」

レッヂが防いでるのは何十の内の二体に過ぎない。確かに中位の攻撃も混ざっているが、それを除いても中位は何体いるのか想像が付かない。もし中位が二体一辺に攻撃して来たら、幾ら世界最強って言われてるレッヂだって、

「アテンド
解放」

あたしの考えを読み取ったように、レッヂの口から放たれる言葉。あたしが使おうとして、彼の横入りで遮られた、それをレッヂが唱える。

天人の暴風を彷彿とさせる攻撃を受け止めている剣の刀身が、突然霧の如く掻き消える。握りと鏢のみを残した剣。片腕を力無く垂らし、強大な力に向かって行くレッヂの姿は、これ以上ない程、その表現が合致した。

起きた事実のみを語ると自害覚悟にも思えるが、次の瞬間、また周囲を啞然とさせる光景。

「I o l o l a s c i o !」

消えた刀身を光が再構成。それを上段から一気に振り下ろし、折角創り上げた光の壁を、創った本人が自ら手に掛けた。それも、中

位や下位の天人を巻き込みつつ。今の攻撃だけでも二体は沈んだに違いない。

壁を構成していた光の粒子が飛び散り、幻想的な空間をかもし出す。

一見、レッチは何体もの天人に囲まれて絶望的な状況なのに、それを全く感じさせない。むしろ、取り巻いている天人の方が危険な気さえする。

圧倒的だ。普段の雰囲気からは想像出来ないほどの気迫が、レッチを覆い尽くしている。

世界最強……実力の次元が違う。あたし達だと中位1体相手にするのが精一杯。なのに、あの男は何十の数の天人に臆する事無く、正面を見据えている。神葬具の力だけじゃない。アイツは、恐怖に真っ向から対抗し続けている。

「絶対に、絶対に戻って来るから！し、死んだら許さないわよ！」

悔しいけど、今のあたしじゃ手助けにすら成れない。だったら、今あたしに出来る事をする。

唇を噛み締めると、神葬具に力を込めて、全速力で後方へ走り出す。そこには、目の前の出来事に呆然として、バカみたいに突っ立っている一般市民達。焦る気持ちを抑え、大勢の人に向かって声を上げる。

「今直ぐ遠くに逃げなさい！駅沿いに向かえば軍が来てるから！早く！」

「……………行ったか」

既に周りは天人で囲まれ、逃亡は許されない。洒落にならない状況だが、何故か安堵の息が漏れる。渋っていた楓が諦めて戦線離脱してくれた事に、これ程の安心があるとは。何時の間にか、アイツを仲間と認識していたんだらうか。

手にある確かな重みを握り締め、周囲を見渡す。

（敵だらけ……か。まあ、上手くいったといえ、そうに違いないが）

このままの状況じゃ、軽くあの世行き確定だな。軍の到着は当てにしない方がマシだろう。

一人で約二十体を相手にしながら、生き残れ、か。随分と無茶を言ってくれる。激痛を忘れ、思わず苦笑が漏れた。直ぐ後に打撲したであろう脇腹の骨が痛む。笑う事も許されないのか。

剣を構える。解放している以上、長引かせたらこちらが不利だ。全力で暴れて、全力で敵に損害を与えてやろう。

取り囲んでいた敵が一斉に獲物を構えて、翼を羽ばたかせる。

「良いぜ、来いよ。全部纏めて相手してや」

俺の言葉を待たず、突如として数体の天人の体が蒼く炎上。遂に俺も焼きが回ったか。有り得ない幻覚がこつも鮮明に映るとは。よもや走馬灯が見えるとは、記憶喪失でも長生きする物だ。

「白様、わたくしを置いて死地に旅立つなんて、あんまりですわ。行く時は是非わたくしも御連れになって下さい」

23 『ただ1人の為に』（後書き）

遅くなって申し訳ない！忙しい事が多く、こんな事になってしまいました。

次回はもっと早めに挙げられると思います。

24 『蒼炎の援軍』

燃え盛る絶対零度の中から現れる人影。豊満な体の線を強調する蒼炎と同色のライダースーツに、髪や瞳で激しく燃え上がる猛火。その炎の勢いと反対に、彼女の周囲は徐々に凍り付いていく。

両手に灯された蒼い炎が揺れ、蛇を思わせる動きで彼女の腕に絡みつく。

「わたくしの愛しの方に手を出すなんて、哀れな天使ですわね」

攻撃目標を俺に絞っていた天人達が、一斉にエリーゼへ向き直る。敵意を感じ取っているのか、本能がそうさせているのか、天人じゃない俺には検討も付かないが。

「自身の行いに悔みながら、もがき苦しんで御逝きなさい
アテンド
解放」

掲げられた右腕。伝うように蒼炎が登って行き、右手に到達すると火花が上がる。現れるのは、普段使用している刀の形状ではなく通常の物よりも大分大柄な作りの弓と、左手には指の間に挟んだ3本の矢。そのどちらもが炎で形成されていて、主の手の中で業火を滾らせる。獲物を求めるように揺れる炎の様は、獰猛な狩人その物。

間違えて敵と一緒に町を焼き尽くしてしまいそうだ。見た目だけなら、どちらが悪者か判断付かないな。

「灯火！あんま先に行くなって！」

修羅の如き面持ちで真っ向から大量の天人と睨み合うエリーゼと、

その背後から俺の方へ走って来る二人組。まさかエリーゼと一緒に
応援が駆けつけるとは、嬉しい誤算だ。

武器無しで、こちらに駆け寄って来る灯火と、その後ろを護衛の
ように追う舞佳。

神葬具を出していないのは正しい判断。エリーゼが天人を派手に
引き付けている今なら、下手に神葬具を出さないで突っ切った方が
天人に察知され難い。その代わりに、無防備という欠点もあるが。

「ちっ、気付きやがったか！」

群れの中の数体が無防備な舞佳と灯火を視界に捉え、得物を構え
るが、その大半がエリーゼの射る炎の矢で接近する事すら叶わない。
天人も気を取られていたせいかわが直撃し、鉄壁と言われる鎧に身
を包んだ中位でさえも、躲す事に専念する始末。

しかし、その中に味方を盾にして2人に向かい滑空する1体の下
位天人。

舞佳が焦りつつも神葬具を展開して応戦しようとした時、武器を
手に突撃する天人の体が、あらぬ方向へ吹き飛ぶ。衝撃を受けて建
物に減り込んでいる状態を見る限り、大砲玉をぶつけた、と言わん
ばかりの弾かれ方である。

『舞佳殿、大丈夫でござるか』

『この姿になるのも久し振りだしゆね。まだ眠いでしゆけど』

その大砲玉の2匹が舞佳の前へ現れ、普段とは違う姿を見せる。
蒼炎を全身に纏う猛々しい狼と、しなやかな小さい体に炎の灯さ
れた尻尾を持つ子猫。普段の餅形状の姿からは想像も付かないが、
その実、戦闘用に変身したダイゴロウとケルビンである。2匹とも
体が神葬具で構成されている生き物だし、概念に囚われてはいけな
い。

前にエリーゼが言った事だが、この2匹の変身は精神力、体力共に莫大に消費するらしい。その上、エリーゼ自身も解放しているのを加えると、普通の神葬具使いの消耗の比では表せない。

だからこそ、緊急時以外は休眠形態な訳だが。この形態の2匹を見るのは、飼い主にアメリカで常時同行されていたと言っても良い俺でさえ久方振りだ。

「白、大丈夫!？」

周りを気にせず大慌てで近寄って来た灯火。傍目から見たら戦場を水鉄砲片手に闊歩する程危なっかしいな。

無事に灯火が辿り着けたのを見届けて、舞佳が進路を反転。天人の群れに視線を向け、右手を真横に突き出す。何も無い宙を力強く掴む動作をすると、その手に現れる身の丈以上の大剣。遠くまで響く烈震が、呼び出された神葬具の重量を物語っている。灯火や楓の神葬具を前提に考えると、確実に女子が扱う系統の武器ではないな。

「よし、久し振りに暴れ回るか!こっちは寝不足で鬱憤溜まってるんだ!」

神葬具を携え、天人の群に特攻する舞佳を見て思うのだが、解放したエリーゼ1人で全部片付けてしまいたいような気がする。天人を蚊トンプと錯覚しそうなくらいに呆気なく射落としてるし。

『行くぞケルビン!助太刀するでござる!』

『ふあああ……いい加減その熱血性格どうにかした方がいいと思いましゅよ』

飼い主を助けずに舞佳の後を追う凸凹の2匹。

どちらかと言うと無双しているエリーゼよりも、危なっかしい舞

佳を子守してくれていた方がこっちとしても助かるがな。

「まあまあってとこだな……結構助かったぜ」

「これ、骨折れてる……こっちの傷も酷いよ」

正直死ぬほど痛い、感覚が麻痺してて堪えられている。気を失いたいの痛みに意識が戻されるとは、拷問にも似た循環だな。

血だらけで折れた方の腕を診察していた灯火が、心配げにこちらを覗き込んで来る。

俺は溜め息を吐くと、展開していた剣の神葬具を手の中から消す。舞佳や灯火だけならば、まだ戦闘を続行しなければならぬが、エリーゼがいる以上、それも必要ないだろう。腕を骨折して、尚且つ体を負傷している今の状態では、足手纏いになり兼ねない。

「白……ち、ちよつとごめんね」

少しの間迷う様な拳動をしていた灯火が、座り込んでいる俺に謝りながら、いきなり抱き付いて来る。不可抗力で当たる柔らかな感触に理由を考えずに反射で、役得だな、と思ってしまう男の性。

前にも嗅いだ桃に近い優しい香りが、ポニーテールで露わになっている綺麗なうなじから漂う。

「お、おい灯火！お前、血が着くぞ！」

頭や体中の傷から流れた血が、服にも染み付いているというのに、抱き付いたら正に赤インクの版画だ。

「関係ないよ！服なんかより、白の体の方が大事に決まってる……むう、ううッ！……し、白、ちよつと立てる？僕だけだと流石に……」

……

少し体を密着させていただけで、灯火の制服が血色に彩られ掛けている。

なるほど、体に腕を回して力んでいるのは立たせようとした為か。確かに、エリーゼと舞佳が奮闘しているからといって、この場が安全だとは限らない。何時天人に捕捉されるか分からないのは危険だ。休息を取り、痛みが徐々に湧き上がって来た体に鞭打ち、灯火の腰に片腕を回す。

「ひゃん！？ ……ち、違うよ！？ 今はそのお ……お、お尻触られて驚いちゃっただけで、い、嫌って事じゃないからね ……？」

頬を紅くした灯火の様子はとても可愛らしい。

背景で小さな戦争が勃発していなければ、事故で触ってしまった感触と合わせて幸せになれそうだ。

『お嬢様、旦那様は腕の骨一本持って行かれていますごさる』

脳内に伝わる従者からの報告で、更に炎を滾らせる。火の矢は無限に補充され、敵の接近を許さない。

真紅の翼で浮遊する敵を焦点に捉え、引き絞った矢先。手の中のこれが本物の弓矢ならば、わたくしの怒りで燃え尽きている事でしょう。蒼炎で形作られた弓は青々と燃え盛り、矢は仇の対象を求め疼く。

「白様の腕の分 ……貴方達全て屠っても対価には足りませんわ」

武器を手に突進を仕掛けて来た天人達に対し、一斉に放たれた3

本の矢。敵の数からしてみれば心細い事この上ない。襲い来る天人の内3体を落とせたとしても、残りの者が我先にと押し寄せる。

「仲間がやられた事から、少しは学んだ方が宜しくてよ」

無数の狂気が降り注ぐ中、腕を空高く突き上げて指を鳴らす。高らかに指の音が響いた次の瞬間、天人の群れの前で3本の蒼炎の矢が無数に分裂。散弾の如くばら撒かれた炎は、決して避けられない雨のように天人達へ降り注ぐ。

流石に中位の天人は身を翻して装備中の盾を用い全てを防ぎ切ることが、攻撃態勢のままだった下位達は瞬く間に蒼い火花の餌食となる。強固な鎧と真紅の翼に蒼炎が絡み付き、絵の具のように色を侵食していく。

兎に角、白様を無事に安全な場所まで運んで頂かなくては。その為なら、この全ての敵すら退けよう。

「見ていて下さい白様。これが貴方の為に咲かせる、蒼の火花ですわ」

蒼炎が纏わり付いた傲慢のプラチナブロードを掬い、蒼く染まった視界で撃ち漏らしを見据える。

正直、ダイゴロウとケルビンの2匹を覚醒させて、自分も解放しては、かなりの負担。白様の為ならば四肢を失おうと構わないが、白様が傷付いては意味が無い。

（これは、本当に口付けくらい要求しなくては割りに合いませんわね）

対価の見返りは白様が同意したらが基本ですけど。この戦闘を押し切ったら、或いは白様に許可して頂けるかも知れないですわ。ふ

ふ、戦闘欲も満たせて、正に一石二魚……鳥だったかしら。

攻撃は最大の防御、よく考えられた言葉だ。同室生の戦い方を見ていて、改めてそう思う。

攻め込まれない程、激しい猛攻を掛ければ相手も退いて行くだろう。防戦一方になるより勢力戦と割り切る方が妥協も憂いもない。

2 個目の発光する不気味な円陣を叩き割り、出現陣は残り2つ。大剣を一振りする負担から、疲れの息を吐こうとした時、ビルのガラスに映り込む天人の姿。

「あぶなッ！影打ちなんて使っな！」

背後からの斧の振り下ろしを間一髪で躲すと、振り向き際に大剣を大振りで薙ぐ。下位の天人が受け止めた斧ごと吹き飛ぶ。

学園を襲撃された時のように数で押されているなら別だが、下位と一対一ならば負ける気がしない。他の天人をエリーゼが引き付けてくれているのもあって、負傷も最小限に留められている。

「でも被害はでかいな……何人死んだよ、これ」

付近にある建物には、亀裂が入っている物もあれば、豆腐のように斜めに斬られた物もある。

倒壊した破片の下敷きになり、ほぼ即死の死体達。腕を切り落とされ、泣き叫びながら死んだ男。形が残らぬほど滅多刺しにされ死んだ赤子の手を握る、首無しおびただの死体。池が生成されそうなくらい、夥しい量の血。

もう少し早く到着していれば、助かる命もあったのに。

『舞佳殿、それでも助かった命はあるでござるよ。今は、悪の元凶を全て屠るのが先決でござる』

子犬形態時の容姿とは別物に変貌したダイゴロウが、わたしの脚を前足で叩く。まさかこの肉球で励ましと激を飛ばしているのだからか。

『姫しゃま〜、戦車がきましゅたよ〜。軍の部隊みたいでしゅ〜』
「まるで亀ですわね。役立たずですこと。もう半分は片付けましたわよ」

細身になったケルビンを頭に乗せたエリーゼが、何時の間にか隣に来ていた。気配を消すな、口から心臓が飛び出そうになるくらい驚いたぞ。

敵の出現陣の大半は壊したし、戦闘は終了間際。
只、軍に呆れながら溜め息を吐いているエリーゼに心から言いたい事があるんだ。きつとこの状況を見たら軍の奴等も同じ事を言うに違いない。

「お前が強過ぎるんだよ……」

24 『蒼炎の援軍』（後書き）

執筆速度目に見えて落ちたなあ………確実に浸る事じゃないですね、これ。

戦闘話の描写がなんとも不器用で、自分でも気をつけているんですが、何度も使ってしまう言葉が多いです。

プロの人って凄いですよね、なんであんな文が出来るのか…マジリスペクトつす。

後書きは前作までアホみたいに長い書いてたんで神葬具では自重している面があります。

嘘です、最新話書き終わって疲れ果てているだけです。

最近メールで更新の遅さで心配と応援を頂き、

嬉しい半分申し訳なさ半分………戦闘話はこれで終わりなので、更新速度は上がると思います。

コメディの執筆の速さは伊達じゃない。

というわけで、今日はここまでで。次回でお会い出来る事を願っています。

25 『白の花畑、金色の髪の少女』

辺り一面を埋め尽くすほど、乳白色の花弁を持つ花が咲き乱れている。白色の絵の具で塗り潰されたとしか形容出来ない光景に、息を呑む。

宙を舞う花弁が顔の擦れ擦れを通過し、甘い香りが漂う。薄い雲から差し込む日差しも緩やかで、綺麗に咲き誇る花の恵みになっている。不思議とここは、気温に左右されず、一年中同じ光景を保ち続けている様に思えた。

『カレン、どうしてここに来たんだ？』

体の融通が利かない。思考だけが動き、体や視界の動きは支配されている。

俺は、そう、白レッチ。カレンなんて名前の奴は知らないし、こんな場所には心当たりも何も無い。口を動かし言葉を発している、この人物は誰なのだろうか。見れば身に着けている服装も、嫌に古臭い印象を受ける。

そして、花の野原に座っている、俺の前に立つ人物。視界が捉えた、その姿に息を呑む。

『また来ちゃいけない、なんて聞いてなかったけど？』

『前の時も、歓迎はしてないがな。大体、どうやって君がここに来れているのか不思議だよ』

この体の持ち主がカレンと呼んでいる人物。

茶を主体にした膝まで覆う地味なチュニックに、花畑と同色の綺麗なエプロン。長く、風に揺れる金色の髪。腰に手を当てて、こちらを覗き込む仕草。吊り上がり気味の、強い意志を感じさせる瞳。

エメラルドグリーンの瞳と服装だけを除けば、全てが俺の知っている少女と一致する。

『簡単だけど？この景色を思い浮かべて、また行きたいなっと思ったら』

『普通はそんな事ではここに来れないんだがね』

ここ、と言うのは花畑を指しているのだろうか。大体、景色を思い浮かべると来れる場所って何なんだ。俺はこんな景色、記憶に全然無いんだが。

カレン、そう呼ばれている少女は微笑みつつ、俺の隣へ腰掛ける。近くで見ると更に似ているな。瓜二つとは正にこの事だ。同じ服装で、アイツと並んだら見分ける自信がない。複製かと言いたくなるほど似ている二人は、何か関係があるのか。いや、俺の夢ならば楓が出て来ても不思議じゃないが。

『良いじゃない、………トと、また会いたかったんだから』

変な夢を見た気がする。

軽い眩暈を覚えながら視界を動かすと、周囲には乳白色に染め上げられていた光景とは一転して、薬臭い無機質な場所。見た感じからして、医療関係の所だろうか。

掛けられている布団を退かしつつ、上半身を起こすと、鈍い頭痛の刺激で最悪の目覚ましの完成。痛みを訴えている体を見ると、包帯で巻き上げられた我が身。巻かれた包帯の所々に赤い染みがあり、このまま棺桶に収納されていて何ら不思議は無い。

「あら、起きた？」

上手く状況が把握し切れていない時に、更に厄介な人物の声。

見ると、俺が寝ているベッドの横で座り優雅に小説を読んでいた銀髪の少女が、栞を挟みながら俺に視線を向けている。黒タイツに包まれた脚を組み直す動作で、黒羽だと認識する俺は、息子としてどうなんだろう。

意識が朦朧としている時に義母を見ると小学生にしか見えない。黒羽自身に言うとは地獄を体験する事になるから絶対に口には出さないが。

「黒羽……ここは何所だ？」

「学園の緊急治療室。まさか春に増築して直ぐに使う生徒が出るとは思わなかった」

緊急治療室なんて物まであるのか、この学園。お世話になりたくない場所だが、至れり尽くせりだ。

っていうか義母よ、お前が爪楊枝で刺して食している兎型の林檎って、俺の御見舞いの品ではなからうか。こいつが自分で果物買って食べる事なんて滅多にないし。ほら、そんな事言ってるで一匹がまた犠牲になる。息子の見舞いの品を無断で食べる母親って。

「あ、これ？買って来たんだけど、白が三日も寝たきりだったから食べといた。果物は足が早い」

その起床した息子の前で食べ続けるか。無駄に腐らせるよりは万倍良いが、正に鬼畜の所業。

「今回は三日か……中々長かったな」

「あの剣、使ったでしょ？それと解放も。倒れるに決まってる」

黒羽の言葉が正論過ぎて、反論の余地がない。

緊急事態だから仕方なかった、とは言え、あの剣を出したままの解放は我ながら馬鹿だったな。もっと冷静な状態であれば、最悪剣を出したとしても解放は行わなかっただろう。もう後の祭りだが。

銃器ではない 光りで覆われた剣

俺の本当の神葬具は、

防御特化の剣で、体力と精神力を桁違いに消費する。比喻抜きに舞佳の解放の5倍は消耗しているに違いない。下位と中位の天人の攻撃を一遍に防ぎ切るとは言え、代償が寝たきり。

原理は分からないが、創造可能な銃器を常時使用しているのは、この為である。

銃器の方が、見返りは少ないが対価も少なくて済む。この場合、俺は体術も織り交せて戦闘に挑む事になるが、戦闘中に気を失うよりは遥かに良い。

多分、俺の神葬具はエリーゼと同じ中位との刷り込みで創られた神葬具だ。記憶を失う前に刷り込みを行っていたから確かではないが、下位の神葬具に、ここまで対価を求める物はない。舞佳の大剣も、対価で言ったら相当だとは思うが。

何故か逃げるのを躊躇う楓を見て、咄嗟に解放を唱えたんだよな。我ながら謎だが、あれで戦況が持ち直したのも事実。

万が一あの状況で対物ライフルを創造したとしても、片手ではどうにもならなかった。片手で射撃可能な銃器の威力なんて高が知れている。拳銃を創造していたと仮定すれば、俺は死んでいるに違いない。

そこでふと、一番被害が甚大な腕の部分の思い出す。あの激痛からして、複雑骨折でも違和感がないが、

「治ってる……？」

あらん方向へ曲っていた腕が、本来の位置を保っている。それ処か、動かす事も可能。

神経が生きている事は確認していたが、骨折していなかった、は確実にない。記憶に残っている限りでは、あの場で楓を庇い、出現陣から現れた下位の槍の穂先で骨は折れた筈。無論、人間の俺に再生能力なんて物はない。

体中に刻まれた傷跡も、内部的な痛みはあれど、外傷は跡形も無く消失。これが人間の治癒能力由来ならば、自分の事ながら気味が悪い。

「結構大変だった。複雑骨折の右腕に、打ち身、擦り傷、切り傷、打撲、おまけに肋骨2本にヒビ。それに加えて三日間眠ったままになるほどの過労。流石に肝を冷やした」

「く、黒羽が手術したのか……？」

その外見で医師免許は取れるのか疑問だ。いや、試験を受ければ医学部通りそうではあるけども。患者との面談では先ず初めに年齢確認から始まるに違いない。

俺の問いに溜め息を吐く黒羽。三角口と常時半目の瞳が、呆れていますと顔に表している。

そして、証拠を提示するように挙げられた右手。その手の中指に嵌められた漆黒の指輪。真ん中に、門の形の装飾があり、それは封印されているかのように鎖で雁字搦め^{がしから}。趣味で身に着けているとしたら随分と悪趣味。

「もしわたしが手術出来たとして、あんな傷、二、三日で完治する筈ないでしょ。これの力」

説明しようとして忘れていたな。黒羽の神葬具、つまり彼女の中指に嵌められている指輪の事を。

俺の銃器を創り出せる光の剣も、エリーゼの蒼炎もかなり個人的ではあるが、黒羽の神葬具は異端と呼んでも差し支えない物だ。普通ならば戦闘用の代物である神葬具が、全く違う機能を所持している。

黒羽に聞いた限りだと、先ず初めに想像召喚。自分で想像した物を具現化する能力。これは学園の迷宮探索に使われている、練習用天人を創り出している。他にも様々な事が実行可能らしいが、挙げると切りがない。

次に、治癒。神葬具は元々、所有者の傷や体調の回復を少しばかり早める機能があるが、それとは全く違う。特筆すべき箇所は他者の傷を治せる点。ここだけで元来の神葬具とは別物と言える。俺以外に使用している所を見た事は無いのだが。

前者、後者を含めて、黒羽の神葬具は一般的に呼ばれる魔法、という物が使用可能なのだ。

神葬具って元々は天人の物だし、黒羽の指輪も有り得なくはないとは思うが、魔法を使う天人なんて見た事無いんだよな。もしかして、天人が占領した地域が雪色に染まるのと何か関係があるんだろうか。

「これに興味があるの？」

「いんや、その神葬具も謎が多いと思ってるな。普通の物とかなり違うだろう」

「アメリカに行く前から知ってるでしょ。ああ、でも回復以外は見せてないか。機会も無かったし」

指揮系統管理する黒羽が戦闘する機会なんて皆無だろうし、当然か。意気揚々と戦闘に参加する黒羽の姿なんて思い浮かばない。後方で不気味な笑みを浮かべて戦略練ってる方が合っているぞ。本人もそこは自覚しているだろう。

「まあ、息子の体に何も無くて良かった。わたし、これから仕事があるから、ゆつくり休んでおきなさい」

実の処、天人の事や剣の事について聞きたい事が山程あるのだが、黒羽も忙しそうだし、体が全快してからで良いか。あまり時間を取らずのも悪いし、何より睡眠欲が大群で押し寄せて来ている。もう直ぐ城門が破られてしまいそうだ。

林檎の余りを近くのテーブルへ置き、「お大事に」と残して部屋を後にする黒羽。

「さてつと……寝るかな」

黒羽を見送って、後は寝るだけ。

体の回復に努めようとした時、部屋の外、廊下で騒がしく走る音が聞こえて来る。これが本当の病院ならば看護婦に叩き出されそう。確実に全力疾走だ。

「白様！貴方のエリーゼ、やっと来る事が出来ましたわ！」

「おいエリーゼ！まだホームルーム終わって無いのに飛び出すな！わたしが教師に怒られた！」

まだ安静に就寝出来ないのか。しかもこの二人は不味い。まだ楓と灯火ならば救いがあったのに、エリーゼと舞佳なんて、絶対に眠れないじゃないか。

しかも、まだ俺が目を覚ました事を知らないのに、あのテンション。俺が起きていると知ったら、どんな風になるのやら。いつその事、寝た振りに移行するか。その方が安全な気がする。

25 『白の花畑、金色の髪の少女』（後書き）

前の加筆版です。ちと分かり難い箇所があったので修正。説明長いなあと思いつつもそこは弄くれないですね……申し訳ないです。

次回はもっと早く投稿できるといいなあ、と思ってたり。

26 『あたふただらけの深夜看護』

（落ち着くによ、小波 楓！あたしは見舞いに行くだけ！そう、助けて貰った御礼も出来てないし！）

三日。あの事件から、レッヂが眠り続けている日数。

毎日、放課後になれば脚を運んでいるのに、病室へ続く渡り廊下で絶対に右往左往する。自分を納得させる為の言い訳探し、なんて思われるだろうけど、あたし自身は必死なのだ。

病室に入ったらレッヂが目を覚ましていて、あの顔で微笑んで来て、なんて事を考えると自分でも呆れる程落ち着きが無くなる。あの事件で助けて貰ってから、ずっとこんな調子で落ち着かない。

毎日通っているのが誰かに知られたりしたら恥ずかしい、なんて理由で真夜中に泥棒のように息を潜めているあたしは、我ながら何をしたいんだろう。潜入任務並みに辺りを警戒している自分に虚しさを覚えた。だからと言って真正面から堂々と入室なんて恥ずかしくて出来ないんだけど。

（眠い……なんか廊下で寝れそう）

夜中に病室に忍び込み、寝込んだままのレッヂを介抱して、そのまま病室で寝入ってしまう。早朝、寝惚けている頭を無理矢理覚醒させて、他の生徒に見付からないように寮へ帰宅、なんて生活が続いたせいか寝不足気味。

そのせいか今日の朝、寮で灯火に起こされた時にシャワー室にてうつ伏せで熟睡していた。我ながら殺人事件と勘違いされそうな画よね。

灯火は全然驚いてなったようだけど、何でだろ。普通は相部屋の生徒がシャワー室で寝てたら驚愕するんじゃないかなろうか。もう慣れ

ました、と言わんばかりの顔をしていた気がする。

(でも、なんか寝ちゃうのよね……レッチの寝顔見ると)

看病初日は張り切って徹夜付きっ切りまで予定していたが、レッチの寝顔を眺めていたら唐突に睡魔に襲われた。自分でも驚くほど抗えずに寝入り、ふと目が覚めると、病人のレッチの体を枕に座ったまま熟睡。

病人を枕にしておいて何だけど、椅子で座って眠ると体の節々が痛む。もういつその事寝袋でも持っていこうか。確か避難時用のが各部屋の洋服箆笥の中に入っていた筈だけど。

(レッチの隣で眠っていると、安心するのよね……ずっと綺麗な花畑の夢ばかり見れてるし)

この学園に入学して、灯火と相部屋になってから始めて自覚した事。あたしは、一人で眠るのが怖い。

傍に誰かがいる安心感が無ければ、また悪夢が襲って来る。忘れない両親が殺された日の事や、無力なあたしを責める自分の姿どちらも、あたしの後悔から生まれた夢。5年以上経つ今でも、悪夢は鮮明に蘇ってしまう。

でも、灯火の傍だと夢は消え、レッチの傍だと純白の花が咲き誇る野原の夢を見る。もしかしたら、自分で気付かない部分で、人に甘えたがっているのかも知れない。

「カレンじゃない。何やってるの?」

「ひっ!? ち、違うの!これは隠れてるとかじゃないし、レッチの看病に来たとかじゃないのッ!」

こんな時間なら誰もいないだろう、そう高を括っていたせいかな驚

きが二割り増し。そして口が滑る。

言ってから気付いたけど、自分で自白してどうする。どんな犯罪者でも警察相手にはもっと粘ると思う。取調べ室に入って瞬間自供って何よ。喋りたがりか。

(……って、カレン?)

一瞬人違いかとも思ったが、記憶の中に一人だけ、自分をカレンと呼ぶ少女がいる事を思い出す。何度も楓だと言っているのに、直してくれないのは態となのだろうか。

「もしかして、白のお見舞いに来たの？」

振り返ると、舞佳先輩よりも幾分か身長の低い少女の姿。

特注で作ったと思われる小柄の制服を着込み、モミアゲが長い印象的な銀髪。幼い外見ながら見惚れるほどの端正な顔立ち。制服姿でなければ学園に迷い込んだ小学生と勘違いしそうである。

「黒羽……お願いだから会う度に背後を取るのはやめて」

「カレンの反応が面白いからよ。間を開けると油断してくれるから、驚いてくれて嬉しいわ」

喋り方や雰囲気から見て取れる外見不相応の立ち振る舞い。同じ女性としては手本にしたいくらいだ。だからと言って、あたしが実践したら絶対に粗が目立つ。実際、やってみたら灯火に引かれたし。あの時は流石に傷付いた。

口元を隠し小さく笑う黒羽に不満を言おうとするが、先程の失言を蒸し返されては堪らない。

この少女、黒羽という子は、あたしが灯火と仲良くなる前の、明星学園に入学して間もない頃に来た友人。苗字も知らなければ、

学年も分からない。本当に自分の事を語らない捻くれ者の黒羽だが、それでも時折姿を見せてくれると素直に嬉しい。天人と戦争をしている時代だ。今日明日で、友達の一人が死亡、なんて事があっても不思議じゃない。

「でも、黒羽は何でこんな所に？それに、レッヂを知ってるみたいだけど」

レッヂを白という名前で呼んでいた事。そして滅多に姿を見せない黒羽が、深夜にレッヂの寝ている緊急治療室付近で姿を現した。普通に考えれば、レッヂの知人なんだろうか。あの蒼炎使いの例もあるから、無いとは言い切れない。変に人脈広いんだから、あの男自信を持って言える事は家族ではないという事。だって当然でしょ。レッヂは苗字こそ外国の物だけど、名前から外見は東洋人の物。対する黒羽は、背の小ささと綺麗な銀髪が相まって精巧に作られた西洋人形のように。家系で唯一金髪だったあたしも人の事は言えないけれど、これで家族ならばどんな家系だ。

「あら、カレンがわたしに質問なんて珍しいわね。白の事が気になる？」

「な、なんでそうなるのよ！ただその……そう！知り合いみたいな口振りだったから気になっただけッ！」

「カレンは昔から素直じゃないのよね。そこまで全力で否定すると、肯定している様にも見えるわよ」

黒羽とは学園に入ってからからの付き合い、つまり出会ってから半年弱しか経過していない。なのに、まるで遠い先祖の代から友達だったような人心掌握され具合。いや、もしかしたら、あたしが分かり易過ぎるのだろうか。断じて認めたくないけど。

「ふふ、カレンを苛めるのは面白いけど、やり過ぎて嫌われるのも怖いから今日はここまでね」

あたしの横を通り抜けて、学園の校舎側へ向かって行く黒羽。

何時もの事だが、その自由奔放さに驚いて放心し掛けた。まるでレッヂを思わせる。今思えば、黒羽とレッヂは一つと言わずに、雰囲気なんか結構似ているんじゃないだろうか。

「ってちよつと黒羽！あ、あたしは、レッヂの為に来たんじゃないんだから！」

「素直になつた方が人間得よ、カレン。先人からの教えと思って試してみなさい。じゃあ、また会いましょう」

急いで黒羽の勘違いを弁解しようとするが、既に黒羽の姿は見えない。

相も変わらず神出鬼没な友人だ。一度で良いから腰を据えて話したい物である。名前の間違いに、今の誤解や出会う度に脅かす件について煮詰めるくらいにじつくりと。

結局レッヂとの関係もはぐらかされたし、あたしのからかわれ損じゃない。なんかレッヂの看病する前に疲れてるんだけど。また病室で寝込みそうな気がする。

『一年学科 白「レッヂ」』

病室の前の名簿欄に書かれた名前。病室の扉の前で再度周囲を念入りに警戒し、一息吐く。

先程の黒羽の件もあるから本当に気が抜けない。警戒を解いて油断した途端、あの蒼炎使いが突然出没、なんて事も有り得なくはないのだ。そうなれば黒羽との遭遇以上に面倒事に発展するのは必至。

(正直、これまでの三日間で蒼炎に会わなかったのが奇跡よね)

蒼炎のレッヂへの執着具合を考えると、あたしみたいな徹夜どころか授業無視して丸々一日付き添っているというのも考えられる。むしろ、この三日間で蒼炎と会わなかった方が不気味。

そう考えると病室前で思案しているよりかは、発見されない内に病室に入った方が安全かも知れない。

一度深呼吸をして腹を決めると、目の前の扉の取っ手に手を掛けて回す。

(もし起きてたら、どうしょ。まともにレッヂの顔を見る自信がないんだけど……って何怖がってるのよ小波 楓！御礼を言うんでしょ！そ、それと出来たら、最初に会った時の御礼も素直に言うの！格好良かったって……助けて貰って嬉しかったって！)

あたしは出せる今の勇気を振り絞り、取っ手を掴んでいる手に力を込めて扉を開ける。

暗いままの室内で一番最初に見えたのは、眠っている所ではなく、ベッドに座りつつも上半身を起こしているレッヂの姿。月の光が窓辺から差し込んで、レッヂを照らす。

普通ならばレッヂの目が覚めている事に驚いている所だが、それよりも気になる事がある。

何故か振り返ったレッヂの体は寝巻きに包まれておらず、上半身が剥き出しの状態。タオルで体を拭いている、というのは分かるが、あたしの脳は理解する前に過熱。きつと傍から見たら顔が逆上せ上がっているに違いない。

「な、なななななんで裸なのよ!？」

「いや、人が体拭いてる時に入ってきたのはそっちだろうが」

満月が暗黒の空に映える夜。普段ならば学園の生徒が行き来する道も、不気味なほど静まり返っている。街灯と月光だけが照らしている夜道は、女子一人で歩くには少々心細く感じた。

僕、野々宮 灯火は、薄い寝巻きに上着を羽織っただけの格好で、夜道にゆっくりと歩を進める。

「……そういえば、白とここを通ったっけ」

天人の襲撃を受けた日の夜。僕が、初めて誰かを夜の散歩に誘った日。

恥ずかしくて、でも嬉しかった。普段一人で何気なく歩いている道が、彼が隣にいるだけで違って見えた。きっと、自分でも制御出来ないくらい舞い上がったたんだと思う。男の人と一緒に出掛けるなんて、夢にも思わなかったから。

だからかな、こんなにも寂しいのは。物足りなく感じてしまうのは。白と散歩をした日から、夜の散歩が苦痛に思えてしまう。あの時、勇気を出して白を誘わなかったら、こんな気持ちにはならなかったのかな。

(あれ、なんか光ってる?)

目の前の道で薄く発光している小さな物体。見る限り、懐中電灯等の人工的な明るさでは無く、蛍の光のような淡く魅せられる様な光。何の光も当たっていない暗闇で輝いている処を見るに、反射ではないらしい。

まるで蜜に引き寄せられる虫。警戒心を持たず、無用心に近付いて行く。

光を頼りに、茂みの中へ足を踏み入れると、直ぐに目的の物を発見。普段なら絶対にそんな事しないんだらうけど、小さく発光し続ける物に恐れを持たず手を伸ばす。

「これ……カラスの羽根？でも、光ってるし……何より、大きい」

こんな羽根を持つ鳥は、正に人間と同等の大きさなのだろう。冷静になってみると、驚く程木目細かく綺麗な羽根だ。このまま装飾に使っても問題なく機能するに違いない。

でも、僕はこの羽根に見覚えがある。そう、これの赤黒い物ならば、何度も目視しているのだ。

「天人の……羽根っ？」

26 『あたふただらけの深夜看護』（後書き）

加筆版です。伏線が追加されていますね、はい。
この次々回では、新章に突入予定です。では、また次回。

27 『アンタの大きな背中』【挿し絵】

「んー、もうちょい強い方が良いな」

「こ、こう？こんなに力入れたら、痛く……ない？傷口に染みたり……」

「もう大半は塞がってるから大丈夫だ。そんな事気にしてたら消毒も出来ないぞ金髪」

あたし、小波 楓は男の人の半裸を直視した事がない。ずっと訓練に明け暮れている上に、元々恋愛に興味が無いのも加わって、男の人とまともに会話したのも随分久方振り。本気で記憶を引き出すとしても、父親とレッヂくらいしか話した記憶が無い。

そんなあたしが、上半身裸の男の背中を濡れタオルで拭いている。正直に言うと、黒羽からの助言と恥ずかしさで頬が沸騰しそうな程熱い。今直ぐタオルを放り投げて、悲鳴上げながら逃げ出したい衝動に何度も駆られてるけど、自分でやると言ってしまったんだから仕方がないのだ。

「か、看病しに来たんだから……ま、ままま任せなさいよ！」

こんな言葉でしか引き受けられない自分が恨めしい。もっと素直に、アンタを心配して毎日病室に通ってたの、と言えたらどんなに良いか。

レッヂの背中当たてた濡れタオルに先程より力を入れつつ、慎重に動かす。本人は大丈夫と言っているが、それでも刻み付けられた傷跡は痛々しい。看病中にも少し見えちゃっただけ、胸部にも傷があるのよね。

世界一位の神葬具使い。普段の雰囲気忘れちゃいそうになるけど、レッヂは何度も激戦を潜り抜けて来ている。体中にある傷の量

は、あたしの比では無いだろう。神葬具を扱う技量も、到底及ばない差がある。あたしや一般人の目の前で、躊躇いもせず下位と中位の攻撃を受け止めても見せた。

「どうしたよ金髪、いきなり黙って」

だからこそ、危なっかしい。

レッヂの背中にある傷跡の中で、一番真新しい傷。きっとこれは、あたしを庇った時に出来た物。あたしはまた、誰かに守られて生き長らえている。力を手に入れて、やっと自分一人で生きていけると思ったのに。

「き、金髪って……呼ばないで」

こいつが来てから、あたしはずっと弱くなった。何でも一人で乗り越えられるって、痩せ我慢してた自分が、徐々に裸にされているようで　怖い。自身で飾り付けた見栄が、崩れ落ちて行く音がするのが怖かった。

敵を目の前にして、守ってやる、そう言ってくれたアンタに、何もかも委ねてしまいそうで。でも誰かに頼ったら、あたしは絶対に前へ進めなくなってしまう。

突然声色が震え始めたあたしに驚いたのか、振り返ろうとしたレッヂの体に温もりを求めるように抱き付く。一番は、泣いている顔を見られたくないからだけだ。

「お、おいっ!?!」

「こっち向かないで……お願いだから」

本当は何度もアンタの寝顔を見て泣いた。このまま起きなかつたらどうしよう、あたしがあの時アンタと逸れなければって、何度も

後悔し続けた。それこそ、胸が締め付けられる程に。

その時、やっと解ったんだ。あたしは、弱いんだって。アンタに守って貰えて、嬉しかったんだって。

レッヂの体を抱き締めながら、その広い背中に顔を埋める。こうでもしないと、強くしゃくり上げているのが聞かれてしまいそうだ。

「言えなくて、ずっと引き伸ばしちゃったけど……初めて会った時も……また、助けてくれて」

緊張で唾が喉を鳴らす。あと一言。あと一言を何としても彼に伝えなくてはいけない。

今、鏡で自分の姿を確認したら、恥ずかしさで死ぬんじゃないかなろうか。

> i 3 1 5 2 7 — 2 1 3 <

「……ありがとう」

ただ御礼を言っただけなのに、心臓が痛いくらい高鳴ってる。レツヂに抱き付いているから、というのも勿論あるんだけど。今は緊張等々で頭が上手く回らないけど、後で自分の行いに激しく身悶えそうだった。

とつくに学園全体の消灯時間が過ぎ、月明かりだけが差し込む薬臭い病室。

傍目から見て、上半身裸の男に背中から抱き付いている女子の姿はどう映るのだろう。

「あ、あたし……これから、アンタの事……し、白って……呼ぶから」

頼り切るのは許されない。だけど、せめて呼び方だけでも、他人行儀な物から変えたかった。

口から心臓が飛び出さんばかりの勇気を振り絞った言葉に、白が頷く。

背中側だから表情は見えないけど、白はあたしと違って普段通りに冷静な顔をしているに違いない。証拠と言っては何だが、背中に耳を直に当てて聞こえる心拍数は全く変動無し。

女の子が身近にいるんだから、少しは緊張しなさいよ　と不満を露わにしそうになるが、何とか塞き止める。恥ずかしさよりも怒りが上回って爆発しそう。

「まあ、俺も名前と呼ばれた方が楽しいな。楓の好きにすれば良いんじゃないか？」

「べ、別に言われなくたって、そうするわよッ」

意識が飛ぶか飛ばないかの狭間くらいまで緊張し切ったのに、全然興味なしと言わんばかりの態度。

流石に我慢の限界で、何時もの声量で怒鳴り散らすと、背中を向けている白が笑い声を上げた。怒鳴られてるのに笑えるなんて、やはり人事か。いつその事噛み付いてやるうか。

我が物ながら鋭過ぎる八重歯を凶器にしようとした時、白が少しばかり首を傾け、あたしに横顔を見せて微笑む。

「しおらしい時より、そっちの方が似合ってるぞ、楓」

またもや憎らしい台詞を吐くのかと思いきや、優しい声で心臓を挟る強烈な一言。しかも、この男は意識せずに名前まで呼んで来るし、加えて男子の背中に抱き付きながらの状態。普通の状況で名前を呼ばれるのとは訳が違う。

「な、なななな何言ってるのよ、バカ！」

「ちよつと待て。俺の発言の中にバカと呼ばれる要素が一つでもあったか？」

羞恥心でいっぱいになり、限界を感じて白から体を離そうとした時に、突然病室の扉が開く。

予期せぬ出来事が起こると寿命が縮むって本当ね、凄く実感した。白に抱き付いている現場を目撃されるのだから尚更だ。間違いなく十年は軽く縮んだ。

「しろ、さま……？こ、これは……どういう状況ですの？」

『おお旦那様、お嬢様が湯浴みの最中に違う女性と破廉恥三昧とは不届き千万！拙者は奥方は一人に絞るべきだと思っております……お、お嬢様、そんなに力まかれると苦しいでございます……！』

『甲斐性も必要だと思いましゅよ。従者としては、姫しゃまを大切にしたいでしゅけど』

振り返ると、あたしの金髪よりも大分白み掛かった長髪を持つ女子生徒の姿。全体的に蒼で統一されたゴシック調ドレスを着込み、腕で子犬を抱き、頭に大福猫を乗せている。病室の雰囲気からして、場違い感が否めない。

色白であるう顔色が驚きで青白く染まり、有り得ない物を見たと言っている。

そしてこちらは、有り得ない物を見られたと顔面蒼白。自害に至る過程としては十分過ぎた。

「やばいな……エリーゼが乱入とか洒落になってないぞ」

冷静だった白の声も少し焦りが混じった物になりつつある。焦り

とはここまで伝染する物なのか。エリーゼと呼ばれた女子生徒の抱いている子犬は別の意味で危機に瀕しているようだが。

「ふ、ふふふ……わたくし、まだ少しのぼせているみたいですよわね。頭を冷やして落ち着きましょう、それが良いですよ」

「おい待てエリーゼ！お前こんな所で蒼炎使ったら」

白の呼び掛けも虚しく、エリーゼの腕に灯る蒼い炎。不気味に笑う蒼炎使いの周囲の温度が加速度的に低下し出す。一言で表すならば、北極を彷彿とさせる極寒の訪れ。上半身裸でいたりしたら凍死も夢じゃない。

「寒ッ！頭だけじゃなくて心臓も冷えるわ！止めるエリーゼ！」

「白様……夢とは覚める物ですよ。きつと目が覚めたら、白様がわたくしを抱き締めてくれる素晴らしい現実が待っている筈ですから」

「お前これ、起こす用の寒さじゃなくて心中用の寒さだろうが！それと楓、いい加減離れろ！」

そしてあたしは、今の状況を目撃された事が衝撃的過ぎて、白に抱き付いたまま放心。口から生気が離脱していても不思議じゃない脱力具合だ。

「も、もう見られたなら仕方ないわ。アンタと一緒にこのまま……！」

「お前も無理心中希望！？」

因みに、この出来事が発端となり、白は高熱を出して再度病室へ搬送。驚異的な回復力を見せて天人との交戦の怪我は三日で癒えた

ものの、風邪のお陰で入院は一週間に伸びてしまった。逆に四十度近い熱出して四日で治るっていうのも凄いわよね。

それから、あたしとエリーゼが白に病室で謝り倒したのは言うまでもない。

「どうしよう ……この羽根」

もう夜も遅い。楓は何時も通り白の病室に通っていて、僕は一人、寮部屋のベッドに寝転がっている。寝巻きを着込んで就寝の準備は万端だというのに、一向に眠気が訪れない。

原因は、どう考えても昨日発見した、未だに淡い光を放ち続ける黒い羽根。

見付けた当初は焦っていたが、今日の学園で上位の天人の噂は一つもなく、自分の杞憂だったのかと結論を出しそうになっている。

「白に相談したいけど、楓と二人っきりにしてあげたいし」

気付くと、また楓を引き合いに出して逃避している自分の姿。黒い羽根を眺めつつ溜め息を漏らす。

僕がもつと遠慮しない性格なら、こうは思わなかったのかな。躊躇せず正面切って突き進めるような人間だったなら、何か得る物があったのだろうか。

「ッ!? い、痛いっ ……!」

後悔を如実に表すように訪れる頭痛。羽根を発見してから、まともな睡眠時間を取れていないせいかな、こうして鋭い頭痛が頻繁に起こる。睡眠不足からの頭痛にしては痛みが強過ぎる気もするけど、

それも直ぐに収まってしまふ。

実際の時間としては数十秒だろうけど、体感時間だと数十分に感じる。余りの激痛に脂汗が滲んだ。

「はあ、はあ……み、水……」

昨夜の苦い経験を生かして常備していた頭痛薬とコップ一杯の水震える手で何とかそれ等を掴み、錠剤を口に含むと一気に水で押し流す。即効性ではないので、また再発する可能性も捨て切れない。結局の処、薬も絶対ではないのだから。

「はあ……体が、熱い」

まるで熱湯に全身浸かっているような感覚で眩暈さえも覚える。寝巻きのボタンを何個か外して、整わない息のまま目を瞑った。どうにかして今夜も乗り切らなければ。昨日もそうだったし、一度眠ってしまえば朝までは大丈夫な筈。

「楓に……心配、掛けられないからね」

27 『アンタの大きな背中』 【挿し絵】 (後書き)

加筆版です。前より良くなってるかなーと自己満足中。
次話は早く挙げられると思います。

28 『頭がぶりっ』

「ったく。まさか必須課題忘れるなんて思わなかったぜ」

薄暗い深夜の学園校舎内。その二年の教室で、普段自分が座っている席の引き出しを探る。見回りの職員がいるのも考慮しなければならぬので、当然明かりは無し。絶賛手探り中。

匂坂 舞佳、一生の不覚。まさか提出しなければ居残りの課題を、提出日前日になるまで忘れているとは。受け取った直後に引き出しに入れて頭から消失していた。

「ん〜と……これか？」

数枚出現した紙を月明かりが照らす窓際まで持って行き、月の光りを頼りに目当ての物を探す。

「うわ、先月の課題だ。こんな所に入ってたのか」

むしろ熟成されていたと言い回した方が言い訳になるかも知れない。予習を怠っていたせいで、数学の課題に関しては引き千切りたくなる衝動が芽生える。元々苦手科目なのに輪を掛けて苦手になっているな。自分で言うのも何だが、進級出来るだろうか。

「白と同級生になった上に、またバカとか言われる未来……」

無事に進級出来た未来よりも安易に想像可能な点が泣ける。登校拒否に陥るかも知れない。

深い溜め息を吐きつつ、人生に絶望を抱いていた時に、三枚目辺りでやっと目的の物を発見。課題の題名の横に赤字で記されている

日付の締め切りが、どう足掻いても明日だ。

「英文の翻訳……か」

やばい、超捨てたい。英語が大名行列の如く、大量に並んでいる
図に涙が出そうだ。

明日の三時限目までにこれを全部翻訳とか無理に決まっているだ
ろう。わたしの勉強の出来なさを舐めるなよ。クラスメイトに勉強
を教えて貰ったら苦笑された程だぞ。端から端まで満遍無く分から
なかったんだからな。

正直、同室生の外国人に頼めば一発なんだろうけども、エリーゼ
が教えてくれるとは到底思えないんだよな。明日が白の退院日だと
いうのもあって、滅茶苦茶早く就寝してたし。朝の何時から迎えに
行く気だお前は。

「ま、いつか。明日にでも誰かに見せて貰えば」

ん？」

必須課題を発掘した事に満足していると、背後から突然腹の虫が
鳴ったような音が響く。わたしもよく訓練してて昼食を食べ損ねる
事が多いし、自分からしてみれば聞き慣れた音。

だがしかし、思い出して欲しい。

ここは深夜の学園教室。わたしは身軽になる為に単独で潜入中。
つまり連れ立った仲間無し。なのに背後で、わたし以外の腹が鳴る。
何だこれ、下手な怪談話よりも万倍怖い。

がぶりっ。

あの天人の都心襲撃事件から緊急治療室に入院して一週間後。体

の鈍りを感じながら、やっと全回復。問題の傷は黒羽の神葬具の力のお陰で三日で治り、残りの四日間の風邪は全面的に楓とエリーゼの騒動のせいなのだが。見舞いに毎日訪れてくれたし、元々恨むつもりは更々無いけどな。

それから一日様子見の期間を経て、やっと学園の授業へ復帰。病室の白一色を見慣れたせいで、学園全体が色鮮やかに思える。

今まで何気なく食べていた学食のからあげ定食も、病院食に比べれば万倍良い。学内食堂の騒がしさも後押しして少しばかり感動を覚えた。

「やっぱり病院食って味気ないよな。こう、健康してますって感じで」

「お前人の話全然聞いてないだろ！？ この包帯の事、聞いて来たの白からだよな！？」

「白様白様、わたくしの作ったサンドイッチも食べてみませんか？白様の好きな卵サンドもありますわよ」

「テメエも人の話を聞け！っていつか今気付いたけど相談する相手悉く間違えたよ！」

先日まで病人だった後輩に怒鳴り散らす先輩と熱烈に好意をぶつけて来る先輩とは、これ如何に。

というか、エリーゼって俺の一つ上なんだよな。日頃の態度と敬語のお陰で同級生かそれ以下にしか見えない。俺が記憶喪失で実年齢不明というものもあるので、実際の年齢は分からない訳だが。

頭に包帯を巻き、手の箸を握り締めて怒り狂う舞佳。普段の力チユーシャが包帯になっている点は、少し新鮮味がある。もっと大人しくしていれば大分絵になっただろうに、残念過ぎる美少女。

「襲われて嘔まれたんだったな。犬か何かか」

「知るかよ……でも結構ばっくり行かれたぞ。血は出てないけど」

まだ少々傷口が傷むのか、後頭部辺りを擦り洗い顔をする舞佳。背後から襲われたのは間違いないみたいだが、舞佳曰く、殴られたという訳ではなく絶対に噛み付かれたとの事。

無論、この学園の敷地内に野良の動物は生息していない。飼い主がいる場合も同様。

『はぐはぐ……今日もご飯が美味でござるな！』
『犬と呼ばれるのは嫌なのにドックフードは食べるんでしゅね』

俺の隣に腰掛けているエリーゼの足元で、戯れている二匹の無機物生命体。こいつ等は動物とは違う系統だから無視しよう。事実、息してないからな、二匹とも。食べた物も全てエリーゼの体力や精神力の回復に回されるらしい。味覚があるのかは凄く疑問だ。

「大剣使いは噛んだ犯人を見ていませんの？」

「そんな余裕があったら捕まえてるだろ。走って振り解こうとしても全然離れないし、いざ離れたって思ったら誰もいないし」

舞佳の証言だけを採用すると幽霊の仕業になり兼ねないな。聞いていても意味不明だ。

纏めると、深夜に課題の用紙を取りに校内へ。教室で机を漁り、何とか物を発見。安心して帰ろうとした時に背後から腹の虫が鳴るような音。そして振り返ろうとしたら背面から一噛み。

なんか見事にホラー映画とかで一番最初に死ぬ奴の行動だな。咄嗟にそう思ってしまった。

「もしかして犬、お前じゃないだろうな……？」

『ま、舞佳殿酷いでござる！拙者達は夜にはお嬢様と一緒に寝ていたのでござるよ！それと拙者は誇り高き狼でござる…』

「ダイゴロウではありませんわね。先ず大剣使いの頭に届きませんし、ご飯はちゃんと食べさせていますわ。むしろ、そんな意地汚い真似をしたら犬小屋に首輪で繋がりますから」
『しくしくしく……』

舞佳からは疑われた上に犬呼ばわりされて、主からは犬小屋に住まずぞ宣言。滂沱の涙を流すのも頷ける。床中水浸しになるのは頂けないが。

「何か手がかりは無かったのか？犯人が落としたような」

神葬具でも大剣使いの舞佳ならば、日頃から体力は有り余っているだろう。だとしたら、振り解こうと激しく動き回っている間に犯人の身に付けていた品が転がっていても不思議じゃない。あわよくば犯人を特定する証拠が上がるかも知れん。

俺の問いに少しばかり唸り、突然思い出したと言わんばかりに鞆を漁り出す舞佳。忙しないな。

「相手が落としたのかどうかは知らないけど、何かの羽根っぽいのが落ちてたんだよ」

鞆に突っ込まれていた舞佳の手が再び現れると、その手に握られている大きな羽根。

漆黒の色といい、一見カラスの物にも見えるが、大きさが目に見えて違う。これ程の大きさの鳥類だと海外に行ってもお目に掛かれるかどうか疑問だ。先ず日本には生息していないだろう。

舞佳から羽根を受け取り、様々な角度から観察。羽根を見た瞬間から嫌な予感はしていたが、まさか大当たりだとは。予想が当たっ
ていても全く嬉しくないな、これは。

「お前……これが手がかりじゃねえか」

「だってこれ鳥の羽根だろ。確かにちよつと大きい気がするけど」

人類の敵だし、戦っていたら気付きそうな物だけだな。戦闘中は空中に何枚も舞ってるし。色違いだから気付き難いというのものもあるんだろうか。いや、きっと舞佳は天人学という授業の成績も悪いに違いない。でなければ重要な羽根の色の違いには気付く。

「天人の羽根ですわね。それも……色違い」

下位、中位の天人から察せられるように、天人の翼は血色で統一されている。故に俺が今まで見て来た天人の翼は全部が赤色。

だがしかし、上位の例外を忘れてはいけない。実際、人間駆逐宣言をした二位の翼は灰色。写真でしか目視してないから本当かどうかは分からないが、諸説では上位の天人の羽根の色は違うと言われている。

生命の樹の色で考えると、何故五位の色の筈の赤が歩兵に使われているのか疑問に上がるが、こちらは天人の情報なんて一切無いも同然。肝心要の神葬具の事すら全然解明出来ていないんだから当然だ。

「もしかしたら、上位が学内に侵入してるのか」

それならば黒羽お手製の警報が鳴ると思うのだが、引つ掛かってないとしたら、上位は姿を消す能力でもあるのか。普通に生活していて背中から強襲されたとか洒落にならんぞ。

これが天人の物だと早合点するのもいけないが、このまま放置するのも不味いな。噂として広まる前に、黒羽にでも相談して置いた方が妥当か。

「よし、決めた！」

「食事中に席を立つのは無作法ですわよ、大剣使い」

舞佳が何を思ったかいきなり席を立ち、俺の持っていた羽根を指差す。というかそこまで元気なら包帯要らなくないか。

「仇討ちだ。夜の学校に出て来るなら、こっちから出向いて真っ向から叩き潰せばいい！」

相手が本当に上位天人ならば舞佳の攻撃に怒って学園全体が叩き潰されそうだ。事を起こしたのが一人なのに集団で巻き込まれる理不尽さ。人、それを巻き添えという。巻き込まれた身としては堪ったもんじゃない。

本格的に、この舞佳をどうしようか思考を回転させようとした時

「し、白！その羽根どうしたの!？」

満員の食堂で、こちらに近付いて来る足音と、俺の名を呼ぶ癒し系な声。残念な子と面倒な子を一手に引き受けていた身としては、この声が清涼剤にも感じた。性格って声にも影響を及ぼしたりするのか、新発見。

焦りが混じった表情を浮かべている灯火。その後を追って食堂に現れた金髪のクラスメイト。

「あ………うわあ」

おい金髪、俺の顔を見てのその反応は何だ。四日前の深夜の自分の行動を思い出しているんだろうか。顔が尋常じゃない程赤味を帯びている。あの日以来ずっとこんな態度が続いていて、俺としては

有難い限り。八重歯を見せて怒鳴る姿も良いが、照れて黙ってしま
う姿も中々評価高いぞ。

「……………げっ」

「あら、御機嫌よう。今日も犬の様な歯が素敵ですわね」

「うっさい！なんでアンタがこんなところにいるのよ！」

「白様がおられる場所にわたくしありですわ。それ以前に、今はラ
ンチの時間ですわよ？食堂にいるのは当たり前。そんなことも分か
らないんですの？」

「相変わらずむかつく　ッ！」

そしてエリーゼを見てからの楓の態度の変わりよう。

病室で看病していた時もそうだが、どうしてそこまで訊きたく
なるくらい不仲だよな、お前等。髪色とか結構似てるのに。いや、
似ているからこそ磁石みたいに反発し合ってるのか。

楓とエリーゼが学内食堂で交戦しないか危ぶんで余所見をしてい
ると、何時の間にか羽根を握っている方の手を、灯火が凝視してい
る。

「間違いない……………これ、僕が持つてる羽根と一緒だ」

28 『頭にがぶりっ』(後書き)

加筆版……今日中に出す事が出来ました…

ふふ、力尽きたぜ…

そしていざ書き直すと1000文字以上書き足している…どっぴうことだ

結局4000文字オーバーの癖に更新速度は何時もより早いです

一日空いてない更新って何日振りだ…

今回も楽しみに頂けたなら幸いです

新章だから無意識に力入ってたのかな…謎である

29 『深夜校内探索』

満月が映える夜の学校校舎前。

校庭で一度集合と決定したんだが、集まった人員に胸騒ぎが止まらない。この腹の奥から込み上げる物を、一般的に不安と呼ぶんだろう。とにかく、先ずは言い付け通りに制服を着用して来た全員に、行き渡らせた物の確認。

「全員、懐中電灯は持ったか？」

「ふふ、白様の明かりはわたくしに任せて下さい。蒼く照らして見せませすわ」

「予備電池を六本持って来てるぜ。これで幽霊の仕業かどうか分かるな」

「きつと懐中電灯が切れた瞬間にパニックになると思いますよ……？」

俺も懐中電灯の光が消えた途端に舞佳が幽霊の仕業と早合点して予備電池を忘れて走り去るに一票。

そもそもお前の所持してる単三電池は懐中電灯に使えないからな。電池を挿入する部分の大きさから見て、どう足掻いても単一電池。

というかお前は肝試しに来た訳じゃなくて、噛んだ犯人をあぶり出す為に来たんだろうが。早速目的を見失ってるぞ、この先輩。先行きが不安過ぎて前が真っ暗だ。

「そっぴいや灯火、楓は？」

普段灯火と一緒にいる楓の姿がないので疑問を抱くと、制服の上に撫子色のセーターを着た灯火が苦笑いを浮かべる。

「もう寝ちゃってたから、起こすのが可哀想で……来たがってたんだけどね」

俺が退院するまでの間、楓はずっと深夜に通って来ていた。俺の記憶にある限りで、病室であいつが眠るのは絶対に二時過ぎ。寝顔を見られるのが嫌だからと、朝は六時起き。体内時計と体調を一遍に崩しても不思議じゃない。

灯火から聞いた話だと、楓は普段0時前には眠っているらしいし、かなり無茶をしていたに違いない。顔色が優れない時もあったから、きっと今は、やっと肩の荷が降りて爆睡中だろう。

「まあ言っても校内巡回だ。無理して参加する必要ないし、寝かせといてやるうぜ」

「うん、白ならそう言ってくれてるって思ってたよ。ありがとう」

入院期間引き延ばされたと言っても、看病して貰った恩がある。

楓には心行くまで熟睡して頂こう。

頬を桜色に染めて微笑む灯火を眺めていると、背後で「こほんっ」と誰かが咳き込む。振り返ると、少しばかり機嫌が悪化しているエリーゼの姿。口元を隠している所作から見ても、彼女が咳き込んだのは間違いない。

「それと白様。言い付け通り、ダイゴロウは部屋に残して来ましたが、意図は何ですか？わたくし、ダイゴロウに羽根の匂いを辿らせようと思ったんですけど」

ここで一つ、寮にダイゴロウを残してくれと言ったのは、決して虐め等ではないと明言しておこう。留守番を任された当人は、今頃与えられた犬缶を満足気に食している。

「ダイゴロウには寮の周辺を見張って欲しかったんだよ。それに、ケルビンだって追跡くらいは出来るだろ？」

『任せてください』

本人は至って真面目に返答しているつもりだろうが、大福餅としか形容出来ない外見と、舌足らずのお陰で逆に不安を煽られた。エリーゼの頭の上で欠伸している点も、緊張感に欠ける。

いやしかし、こいつとダイゴロウには窮地を救われた事実もある。性格さえ考慮しなければ、世界二位の神葬具使いに創造されたという折り紙付き。一旦戦闘形態に突入すれば下位の天人を寄せ付けない実力を所有。この説明だけ聞けば優秀な幻想獣だけで済む。

俺だって二匹をエリーゼの従者と紹介された時は、何の冗談だと首を傾げた物だ。今では犬の方に名前を与えるまで慣れ親しんでいるけども。

「よし、そんじゃ二人一組クジ引きで」

「おい待て舞佳^{バカ}。お前完全に肝試し気分だな、遊びじゃないんだぞ」「マカだつて言ってるだろ、バカつて言うな！つていうか頭鷲掴むな！噛まれた場所なんだよ！」

何時作る暇があつたのか、手に四本の紙切れを握り、意気揚々と肝試しに移行しようとしていた舞佳の小さな頭を鷲掴み。綺麗に額周辺の包帯の巻かれた箇所に触れるが気にしない。自業自得だ、諦める。

大体、最初から二人一組にしようとは決めていた。仮に四人で一斉に突入したとしても、制限時間の制約もあり十分に見回れない事は火を見るよりも明らか。ならば人員を二つに別け、隅々まで見渡せるようにした方が好都合。

（ただ、俺の考えてた組み合わせだとエリーゼと舞佳なんだよな）

振り分けを決定した理由としては、相部屋生だから互いに連携取れるだろう、という安直さ。そして俺自身、灯火という方が精神衛生上、非常に楽なので。

お化け屋敷に対して、はしゃぐ子供のお守り。もしくは貞操の危機が訪れかねない組み合わせ。俺には生憎と、どちらも選ぶ勇氣は持ち合わせていない。本音を言わせて貰えば、本日の予定は打ち切りとしたい。

現在進行形で後悔している最中。黒羽の頼みとはいえ、こんな事を引き受けるんじゃないかった。

『警報が機能してないとは考え難いけど、この羽根が存在しているのだから見過ごす事は出来ないわね。白、夜の見回りを頼めるかしら。わたしは学長室に籠って仕事を片付けてるから、何か起こったら神葬具を展開して知らせて頂戴。報酬は……そうね、久し振りに膝枕してあげましょうか？』

俗に言う丸投げ。しかも報酬は義母の膝枕。黒ストッキングに包まれた脚を、軽く叩きながら言う黒羽に現物支給以上の物を見た。喜んで受け取ると人間として大切な物を失う気がしたので、問答無用で却下である。

結局報酬は要熟考で落ち着いたが、それでも上位天人の件を放置とはいかない。現に頭を丸齧りされた犠牲者がいる訳だしな。本人は健在な上に、元気過ぎて腹が立つ程、活力に富んでいるけども。もう舞佳を餌にして犯人を誘き寄せせるか、という案が浮かぶくらい。

「しゃあない。班を組み直すから待ってる」

「化学実験室は……異常無しみたいだね」

「一斑了解。んじゃ灯火、次は職員室周りを頼む　　って、おい舞佳。勝手に先に行くんじゃない」

月の光が窓辺から差し込んでいて、電気を付けなくとも中々明るい。教室内に、少しずつ空間を開けて連なった横机と廊下側の壁に鎮座した薬品だらけの棚。卓上に置かれたまま放置された試験管やフラスコを棚に戻しつつ、手の平に収まる小型の無線機で白に報告。無線機越しに活動している白と舞佳先輩も巡回は順調そうだ。舞佳先輩の先行し過ぎは気になるけど、白が相方なら問題ないだろう。

「盾剣使い、白様は何と？」

僕の方の相方さんは名前すら呼んでくれないのですが、どう連携を取れば良いのでしょうか。

頭に熟睡状態の猫を乗せたエリーゼ先輩は、白から無線機を託されなかつた事が不満らしく、常時不機嫌で、その刺々しい雰囲気には僕は胃を痛め続けている。このままでは探索終了の時点で胃炎発症も夢ではない。

元々、全くと言って良いほど面識が無い上に、白以外の人との会話に興味を示さないエリーゼ先輩。会話が成り立ちません。今話し掛けて来たのも結局は白絡みだし。

「えっと、次は職員室の周りを中心に探索して欲しいそうです」

「職員室……教職員が集まる場ですわね。案内願いますわ、盾剣使い」

エリーゼ先輩は転校してから日が浅いし、教室の配置を覚えて無くても当然だよな。

この明星学園、寮や校舎、その他の施設を含めれば敷地が村一個

分に匹敵している。地下迷宮の面積がこれに含まれてないのだから更に驚き。敷地内全てを見回るならば、丸一日は掛かる事だろう。

ここまでで分かる通り、校舎も例に漏れず広く建造されている。天人襲撃時には続出する怪我人を搬入する為の医務室から、昼食時に機能する学内食堂も完備。おまけに調理実習室や雛壇式の広い教室。これを校舎が一手に引き受けているのだから、そりゃ大きくもなる。

「そ、そういえば、どうして僕は盾剣なんです？」

舞佳先輩の時もそうだけど、エリーゼ先輩は白以外の人を名前で呼ばない。大抵の場合、呼ぶ相手の使用している神葬具の事を指している。舞佳先輩ならば大剣で、楓なら脚鎧とか犬。後者は主に喧嘩最中に嫌味として。

その流儀に習うなら、僕の呼称は円月輪チャクラム使いになるんじゃないかな。

でも、エリーゼ先輩って僕の神葬具を見た事ないよね。駅前襲撃時も、天人に察知されない様に神葬具は出してなかったし。自分で言うのも何だけど、そもそも円月輪は全然目立たないからね。楓の脚鎧とか、白の銃器みたいに派手なら別だけど。

「貴女の使ってる神葬具の事、ですわ」

「えっと、僕の神葬具は円月輪ですよ？」

自身の武器の形状を伝えると、エリーゼ先輩は普段の余裕のある表情を若干崩す。

「あら……貴女の物を持つ癖と立ち振る舞い、神葬具は盾剣だと思っっていましたわ。意外ですわね、まさか投擲系だなんて。盾剣でなくても、絶対に剣は握っているとばかり……」

まさか所々の所作を観察して神葬具を割り当てていたとは。こちらの方が唾然となる。人の無意識の動きを記憶して癖だと見分ける観察眼なんて、努力だけでは手に入らないだろう。

中位の神葬具の負荷に耐え、二体いる使い魔を常時呼び出し続ける精神力も、戦闘時に見せた動きも、比較的安全と言われていた日本に在る限り到底手に入らない代物だ。今から僕が訓練して会得しようとしても、それこそ得られる可能性は、砂漠の中で砂金を発見する確立に限り無く近い。

「では改めて、こほんっ。行きますわよ、円月輪使い」

『ふあああああ………姫しゃま、朝でしゅか？』

探索自体は中々締め切り切らない班になっちゃったけど、エリーゼ先輩から学べる事は多いし、僕は満足かな。

そして、黒い羽根の持ち主を、早々に見つけなくちゃいけない。天人だから危険、という考えよりも、この羽根の持ち主に会いたいという願望が勝っている。淡く光る漆黒の羽根を見詰めていると、何故か懐かしい感じがして心が痛む。

(欲を言えば ……白と一緒に班だったら嬉しかったかな…)

…なんて)

29 『深夜校内探索』（後書き）

間に合わせました加筆版……いやあ、すごかったっすねえ（文字的な意味で）

辛いが来て、痛い過ぎて、苦しい過ぎて、イキました

まあ冗談はさておき、ちょこちょこ鍵を握るキャラが見え隠れ書き手も面白いです、書いていて

今回は早めに更新できると良いなあ……いつも言ってるな、これ

30 『貴方の腕の中の幸せ』

「あー……しんどい」

舞佳。お前だけでなく、この場に揃ってる全員が愚痴つてると思うぞ。疲労の絶頂だと。

あの初日の探索が不発に終わり、三日間連続で深夜に校舎の調査を行っているが、進展無し。

ここ最近寝不足が続く、男の俺ですら食が細くなる疲労感。女性陣の悲惨な様は言うまでもない。舞佳を除き、元々小食な女子達が更に小食化。飢饉と無縁で餓死なんて洒落にならん。せめて御握り一個分は無理でも腹に詰める。

「はむ、んぐ。やっぱり安売りのパンは良いわね。味じゃなくて経済的に。……侘しいけど」

唯一正常稼動しているのが、初日以降から深夜探索に参加している楓だという点が驚き。一番先にうつ伏せで倒れてそんな役回りなのに。

あんばんを右に、パック牛乳を左手に装備して食べ進めている楓の隣で、色白の肌を更に悪化させた灯火が座っている。目尻に小さく隈を浮かばせているのが、体調の不良さを覗かせた。薄幸の美少女も、ここまですと不憫過ぎる。

せめて一日でも休息を取って貰おうとするが、灯火は頑として首を縦に振らない。

「気にしないで……その、平気だから……ね？」

男は儂い雰囲気的女性には弱い。きつと万国共通だろう。

しかし、執念にも近い何かを原動力にして働き続ける灯火は痛々しく、今夜が限界であろうと判断出来る。

皆が体調崩しては元も子もないし、区切りとしては丁度良いかも知れないな。今夜不発ならば、一旦探索は諦めよう。もし誰かが引き下からなければ、その時は強制しても寮に連れ戻す。力技になるが致し方ない。

「そっぴやエリーゼは何所行ったんだ？」

「なんか、犬ころ連れて羽根の匂いを辿ってるらしいぞ」

道理で騒がしくない訳だ。舞佳の所持していた黒い羽根の匂いをダイゴロウで追跡しているのか。一昨日から昼間に色々な箇所を探っているみたいだが、音沙汰無し。簡単に見付けられたら寝不足になる程苦勞していない。

第一、四日間探して一度も証拠が見付かっていないんだ。手詰まり感が否めん。

もういつその事、カラスの羽根だったと完結させてやろうか。羽根の大きさに、無理があり過ぎると思うが。

『次のニュースです。昨日の深夜にロシアの首都、モスクワで出現陣が発生しました。ロシアが首都を襲撃されたのは、これが二度目。厳戒態勢を布いていたロシア軍は、出現した陣の内五つを破壊し、天人の大群を退けましたが、死者は一般市民を含め千人を超えたとされています。尚、ロシア大統領はこの事実を強く受け止め』

学内食堂に何台が配置されている天井設置型の薄型テレビが、不吉な番組を映す。

約一週間前に、学園と近くの都市が襲撃された側としては他人事で済まされないな。都市部の方の犠牲者は数十人に及び、こちらは大手の新聞の表面を飾る大事件扱い。都市自体は順調に修理が進ん

でいるようだが、完全に復興するには何ヶ月要するか見当が付かない。

徐々にだが、確実に世界中の天人の爪痕は増加している。凍って再起不能な大地は後を絶たない。

(これじゃまるで、一方的なオセロだな)

一度奪われた陣地を取り返す事は出来ず、世界が凍り付いた時、それは人間の完全敗北を意味する。

今の天人側絶対有利な状況から覆す事は可能なのか。思い浮かぶ精一杯の可能性を上げるとすれば、覆せる程の強力な神葬具使い出現。それが無ければ、無力な人間は反撃の手立てなく追い詰められる一方だ。

「ロシア……確か日本も一昨日襲撃されたわよね」

「九州の鹿児島県辺りだね……もう完璧に取られちゃったみたいだよ」

俺も新聞で読んだ知識のみだが、目撃例では陥落した沖縄の方角から天人が現れたらしい。

証言通り、合計八つの出現陣は奄美大島近辺の海域で発見された。そこまでは順調だったが、軍も海上に浮遊する出現陣に手古摺り、その間に鹿児島島の防衛は崩落。昨日まで一寸刻みで白化が進行していたが、灯火の言い方だと、完全に天人に奪われたみたいだな。

「もしかして、沖縄から順々に占領して来たりするのかな……」

「流石に神の考える事はわかんないしな。わたしが神だったら、きっと天人を首都に落とすと思うけど」

天人が姿を現した当初の頃は、舞佳の言う通りの作戦で人間は全

滅していただろう。

だが、今の各国は優秀な神葬具部隊で首都最終防衛線を引いている。中位や下位の大群でも易々と突破は出来ない筈。ただ、上位が出張って来るといふ最悪の一例を除いては。

放課後の時刻になり、他の探索人員が仮眠の為に寮へ帰る中、俺は予め今日重点的に探索する場所を絞り込む作業を行っていた。負担は少ない方が良く、皆には言っていないが深夜探索は今日が最終日。出来る限り労力を最小限に抑えつつ、幅広く見回る必要がある。

と言う訳で最終日の班組み合わせはどうするか、なんて考えていた時に、教室で居残って頭を悩ませていた俺を呼ぶ声。

「白様！わたくし、手柄を立てましたわよ！」

『嗅ぎつけたのは主に拙者でございますが……お、お褒めは無しなのでござるな、お嬢様……しくしく』

突然現れて俺の手を握り、散歩途中の犬のように嬉しがるエリ―ゼ。

犯罪擦れ擦れの尾行や失言が無ければ、誰もが羨む絶世の美少女なんだ、こいつ。至高の寶石を金槌で叩き割るくらい勿体無い。口に出したら調子に乗って褒美を強請るから絶対に言わないけどな。賛美は心の中に留めて置こう。

「羽根の匂いを見付けましたの！それも、今日の深夜辺りの物ですわ！」

「今日の深夜辺りって言えば……俺達が活動してたな。もしかして校舎外か？」

校内は一覧を作り、毎日隈なく調べ上げている。俺と組んだ以外の班が見逃していなければ、穴は無い筈だ。

そもそも人間を駆逐するのが目的の天人が隠れ回るとは考え難い。もしや監視目的で学園生徒に紛れ込んでいるのでは、なんて線も睨んだが不発。朝っぱらから校舎前で神葬具展開して生徒を見張る簡単な職業は骨が折れたぞ。もう二度とやるか。

「いえ、校内で、しかも御昼にわたくし達がいた食堂ですわ」

昼に俺達が集まった場所　　といえは教室抜かすと学内食堂くらいか。あそこも見回りの一覧に入れていたのだが、少なくとも俺は探索中に訪れた事はない。女子陣の負担を最小限に抑える為、特に数の多い教室を重点的に回っているからな。

学内食堂で隠れる場所といえは、業務用の冷蔵庫、大量に設置されている机の下。それ以外にも多数候補は上がる。見落としがあっても不思議じゃないか。

「し、白様、それでその……わたくし、頑張りましたのよ？」

そう言いつつ、上目遣いを送って来るエリーゼ。地味ながらも本当によく働いてくれている。深夜探索の寝不足も積み重なっているのに、ダイゴロウを使用しての匂いの探索。精神的疲労は俺と比べ物にならないだろう。

これだけの働き。普通の女性ならば見返りに何を要求されるか考えるだけでも恐ろしいが、俺の前で目を強く瞑っている彼女は違う。俺としては金品を請求される事と、全く別の方向性で恐ろしい。

「……あー、何がして欲しい？」

「白様、女性に言わせるのは野暮じゃありませんこと……？」

少しばかり疲れが残る顔色で言うエリーゼは、普段とは違つか弱さも覗かせる。祖国では”無き貴族の残した宝石”とも称される完璧な外見。アルフォート家復興目的の婚約話は後を絶たないが、それをかなぐり捨てても俺に付き添おうとするのは何故か。

腰に手を当てて優しい笑みを浮かべる彼女を見ていて、唐突に思い出したのは、エリーゼと出会って間もない頃に聞いた言葉。

『誰も、わたくしの内面なんて見てくれませんもの』

今では他人とも口数少なく話せるが、あの頃のエリーゼは誰にでも塞ぎ込んでいて、話し掛けても冷やかな待遇の連続。正に蒼炎の神葬具の如く、絶対零度の令嬢。

だが俺に依存している彼女を見ると、放って置いた方が良い選択だったのか、なんて思いもする。俺が死ねば間違はなくエリーゼは後を追うだろうし、厳密に言えば彼女を更生させたのは自由に生きて欲しかったからだ。偽善と蔑まれても不思議じゃないが。

『わたくしは……貴方に抱き締めて頂けるだけで、他は何も要りませんわ』

その過去の言葉通り、何かの見返りに彼女に要求された物とすれば、出会った当初からこれだけ。

ここまで尽くす女はそうそういないだろう。だからこそ、俺なんかには勿体無い。自分勝手でお前を汚した俺に、抱き締める資格なんてないのに。

自分の不甲斐無さに苦笑しつつ腕を広げると、待ち侘びていたように飛び込んで来る薔薇の香りの少女。華奢で線の細い体に、服の下から柔らかく自己主張する膨らみは、天国と地獄を同時に味わわせてくれる。

「ああ……幸せ、ですわ」

大袈裟に至福の声を漏らすエリーゼ。クリーム色の髪を撫でると、くすぐったそうに身を揺る。

俺の肩まで届く長身のエリーゼを抱き留めっていると、直に香る髪や体の匂いで酔ってしまいそうだ。

「安い奴だな。金品要求しろ金品。その方が助かるから」

「ふふ、これ以上の価値のある物なんて存在しませんわ……。宝石だって、くすんで見えますもの」

『親代わりからしてみると……複雑でござるな。お嬢様には、ずっとあの笑顔を浮かべていて欲しいものでござる』

30 『貴方の腕の中の幸せ』（後書き）

加筆版です。そこまで変わってない気がするのはいきつと気のせいかと…。

次回からまた新しい展開になります。
作者自身、書くのが楽しみです。

31 『知られざる止まぬ痛み』

学園が放課後になった後、直様寮へ帰宅し仮眠を取ったのだが、疲労が一向に治まらない。一週間程前から続いている頭痛も激しさを増している気がする。元々、軽い片頭痛ではあるが、ここまでの痛みは始めてだ。

痛む頭を擦りつつ、処方された錠剤を飲み込む。水を飲むのも億劫な今、水無し一錠が有難い。

「……頭痛薬って、中々効かないんだよね」

担当医からは生まれ持ったの片頭痛と診断されているけど、実際は現代医療もお手上げらしい。頭痛の原因が解明出来ず、医院で処方される薬も通常の頭痛薬のみ。完治とは無縁の病に成り果てている。

そんな医師が匙を投げる程の難解な病を、医学知識を少々齧った学生では分析なんて不可能。精々、戦闘で受けた傷の手当が限界だ。念の為、隣のベッドで熟睡している相部屋生に視線を向ける。もし楓が起きていたら、余計な心配を掛けてしまう。それだけは避けたい。

「痛い……」

視界が歪み、頭痛の鋭さが増す。吐き気を伴わないだけ、まだ救いがあるだろうか。

眠れば楽になる分、睡眠薬に依存したい気持ちもあるけど、飲むと起床時に負担が残る。戦闘になれば、満足に動く事すら適わないだろう。

それと生徒手帳にも記されている事だが、自力で就寝出来る間は

天人の襲撃等も考慮して基本的に睡眠薬は使用厳禁。万が一使用する際は、相部屋生に確認を取り安全を確保する事。

後者の注意書きが無ければ、僕は躊躇わずに薬を服用していたかも知れない。楓の存在が、僕の理性を繋ぎ止めてくれている。

「えへへ……松尾芭蕉……」

相変わらずの寝相で布団を退け、涎を垂らしつつ寝言を呟く楓。

入学当初は散々な目に遭ったけど、今では楓の寝相が安息材料になりつつある不思議。市販の香より効果があるかも知れない。現に、楓の可笑しな寝言を聞いているだけで頭痛が徐々に和らいでいる気がする。

「ありがとう、楓」

「んふふ ……だあとのばあか」

何時も思うけど、寝言の意味は解析不可能だよな。どんな夢を見ているのか検討も付きません。

『お嬢様、やはり天人の匂いが残っているでござる。かなり最近の物でござるよ』

「ふふ、ビンゴですわね。お手柄ですわよ、ダイゴロウ」

持ち前の嗅覚を遺憾なく発揮し、羽根の匂いを探り続けるダイゴロウ。犬と同じ行為は嫌だと散々吠えていた癖に、主人からの要望だと即座に聞き入れるんだな、この狼。主人に従順なのか、はたまた現金なだけか。

一週間近く継続された校内深夜探索、最終日。

開始当初から集合場所に指定している中庭に一旦集まり、全員の出席を確認。普段ならば班組み決定の為に少々時間を割くのだが、目的地が定まっている今夜は違う。初の総員連れ立っての探索である。

「でも匂いがあるからって、天人が食堂なんかにいるのか？腹空かないだろ、あいつ等」

学内食堂までの廊下で、舞佳が先導している俺を見つつ疑問を口にする。

天人の詳細な情報は未だに不透明なままだが、神が自ら手掛けた駒に不利な点を作るか否か。上位天人ならば未だしも、完璧に戦闘の駒の低位や中位に食欲を与えた所で損益にしかない。

少なくとも俺は今までの戦闘中に腹の虫を鳴らした天人は見た事が無いし、人間における三大欲求すらも欠損してる可能性が高いだろう。何ら機械と変わらないな。

「他に手掛かりがないからな。当ても無く探し回るよりは良いさ」
「確かに隠れる場所は多いわよね、食堂って。冷蔵庫の中とか子供がかくれんぼの時使いそうじゃない？」

流石に天人でも自ら業務用冷蔵庫に隠れるとは思えないが、早合点してはいけない。万が一相手が黒い翼持ちの上位天人ならば、尚更臨機応変な対応が重要だ。それこそ、食堂の食料食い荒らしてるんじゃないか、程度の。本当だとしたら相当意地汚い天人だな。

「流石に食堂の冷蔵庫だと凍死しちゃうと思うけど……？」

「ごもつとも。柔らかく切り返してくれる灯火の暖かさが心地良いな。」

まあ業務用冷蔵庫の中で凍死というのも、天人が恒温動物だった
ら、が前提の話だが。どうせ気温の変化も関係ないだろうし、北極
で鎧解除したとしても、天人ならば平気な顔をしているに違いない。

『ふむ……お嬢様。匂いの強さからして、先程ここを羽根の持ち主
が通過した事は間違いないようござる。近いでござるよ』

ダイゴロウの言う通りならば、食堂に今日まで追跡し続けた天人
が潜んでいる可能性が高い。

黒い羽根を持った鳥類の線が消失している今、遭遇するかも知れ
ない天人が中位か上位かが問題だ。心の底から中位の突然変異型を
望むが、上位だった場合、敵の戦闘能力は未知数。

選択としては、食堂の外側から襲われる事も考慮して、俺とエリ
ーゼで戦力を別けるのが最良策か。

「よし、神葬具出しておくかッ」

「おい待て舞佳。お前本当に期待裏切らないな。落ち着くという事
を知れ」

「バカって言うな！奇襲されたら困るだろうが！」

舞佳の言い分も理解出来なくは無い。全員が神葬具を展開してい
ない状態で天人から奇襲を受ければ、例え中位であっても惨事は免
れないだろう。全てが未知な上位ならば尚更。

だが忘れないで欲しい。神葬具、大剣の燃費の劣悪さ加減を。洒
落抜きに天人探索途中で所有者が力尽きる事も有り得る。楓や灯火
のように低燃費なら別として、高燃費な舞佳に神葬具を長時間展開
し続けるのは到底不可能。

「お前、奇襲に備えられる程持久力ないだろ？」

「そ、そりゃ……そうだけどさ」

舞佳が神葬具を呼び出せる時間は持つて二十分程度。ちなみに神葬具使いの平均的な展開持続時間は活動無しで約一時間。これだけでも驚きの燃費の差が窺える。

食堂内に天人が高確率で潜伏しているとして、内部に潜入する班員は常時神葬具を展開するのが前提。ならば持続力があり、天人を発見しても突っ走らない人員が最優先だ。

「楓と舞佳、エリーゼで食堂前に待機してくれ。俺と灯火で先に中を見て来」

「ちょ、ちよつと白！何であたし達は置き去りなのよ！」

「し、白様！？ 何故、わたくしを差し置いて円月輪使いを御選びに！？ それも、こんな野蛮人と一緒に番だなんて！」

「聞き捨てならない！ という意味よ、メルヘン女！」

危険を最小限に抑える為の最も堅実な案だと思うが、舞佳に次いで、今度は金髪二人に異議を申し立てられた。この学園では理由を話す前に反論するのが流行なのか。まともに作戦会議すら行えないぞ。

まあ正直、班を決定した俺自身も、エリーゼと楓を合わせるのには非常に不味いと思うが、致し方ないのだ。

顔色が悪化しているのを必死で隠そうとしている灯火。万が一、外組が襲われたとして、エリーゼが他人を守るうとしない以上、唯一の手負いは俺が担当しなければいけない。相手の勢力が判明していない分、灯火一人を守るのが精一杯な訳だが。

「し、白……僕で、良いの？」

鋭い八重歯を見せつつ威嚇する楓と、懇願する捨て猫のような顔のエリーゼに、どう説明するか一考していると、驚愕に満ちた表情

のまま灯火が言う。

灯火も自分の体調の悪さは自覚しているのだろう。だからこそ、同行班に選出されるとは考えてなかったに違いない。甘いな、俺は日頃癒しを与えてくれる少女の為ならば自分から逆境に向かう性質だ。

「なあに、灯火の一人や二人、守るのなんて楽勝だ。任せな」

「えっと……僕が二人もいたら困るんだけど。で、でも……選んでくれて有難う、白」

病人と同等に青白く染まった頬へ、少しばかり朱色が染み込む。

初々しい大和撫子って良いな。外国では十分に色香を纏った年上の女性ばかり見て来たから、逆に灯火のように控えめな性格の子が新鮮だ。是非とも初心で純粋なまま育って欲しいものである。

「おい白、行くなら早くした方が良いぞ」

確かに目的の食堂扉の前で話し込んでるのも時間の浪費か、と思いきや苦笑いしつつ舞佳がある方向を指し示す。灯火と俺の視点も釣られて移動。

「あいつ等が気付かない内にな」

「あら、今宵は生意気な子犬がよく吠えますわね！鞭の躰が必要かしら！？」

「言うじゃない青色一号！普段から気に入らなかったけど堪忍袋の緒が切れたわ！天人の前にアンタをぶっ倒す！」

「気品も優雅さも欠如した言葉使いですわね！神葬具使いとしての力量以前の問題ではなくて！？」

「そっちこそ何世紀前の口調よ！服のセンスと一緒に言語まで世紀

「前まで置いてきたってわけ!？」

お互い様な口論を繰り広げる金髪二人の間に、激しく火花が飛び散っている錯覚が見えた。

喧嘩するなら、せめて校舎を破壊しないよう穏便に済ませてくれ。結局、黒羽から説教を被るのは全部俺なんだから。あの黒羽独特の責め立てる説教を知らんお前等には分かるまい。

兎に角、二人の論争に巻き込まれる前に目的を果たさなくては。決して飛び火は勘弁、という事ではないぞ。

髪を結んでいる紐をきつく締め直し、気合を入れた灯火と頷き合っていると、金髪二人の口論を背に食堂の扉を開く。

使用する者がおらず、当然明かり等は灯されていない食堂内。沢山の生徒達が一気に食事へ押し寄せる場だけあって、だだっ広い空間に鎮座した大量の長机。探索の面倒さも然る事ながら、正体不明の敵が潜んでいるとなると、不気味さ加減が軽く五割増。何も見なかった事にして寮へ直帰したい感情が湧き上がる。

「気を付けるよ、二人とも。何か遭ったら直ぐ乗り込むからな」

「ああ。んじゃ、しつかり戸締り頼むぞ」

舞佳の言葉へ応答すると、重々しい音を立てつつ食堂の扉が閉じられる。この学園って、西洋風なのか知らんが無駄に扉厚いんだよな。ほぼ毎日開閉する教室も同じだし、勘弁してくれ。何故日常生活で訓練しなければいけない。これも黒羽の策略か。

31 『知られざる止まぬ痛み』 (後書き)

やっと完全版……しかし、出てもいないのに章が進み過ぎている。
いや、こっちの話です。っていつか夏風邪って長引きますね……結
構辛いです。

32 『漆黒の野菜泥棒』【挿し絵】

「好きだ、エリーゼ」

普段とは違う、聞き惚れてしまう程の凜とした御声。惚けている間に優しく手を握られ、驚く間も無く左手の薬指に指輪が嵌められる。

信じられない光景に目を見開き、視線が嵌められた指輪と目の前の男性を右往左往する。

「し、白様……これって」

「まだ婚約指輪だけだな。本物は、俺がまともに稼げる様になるまで待っててくれ」

本物というと、結婚指輪という解釈で間違いないのだろうか。余りの衝撃的な出来事に思考が働かない。心の中では何人もの自分が万歳三唱をしているというのに。

名残惜しく彼の手が離れると、薬指に丁度納まった指輪が姿を現す。

彫られた『E・S』の文字以外は、全く飾り気の無い指輪。今まで様々な男性に婚約の話を持ち掛けられ、幾度となく指輪を断つて来たが、その中でも一番地味だ。きっと値段も天と地ほどの差があるに違いない。

「流石に宝石とかは買えなかったけどさ。まあ、結婚指輪の時は」

「いえ……いいえ、ただ価値を映すだけの宝石なんて必要ありませんわ」

親指と同等の大きさの宝石なんて要らない。貴方から貰える指輪に比べたら、自分の命すら霞んで見える。

アルフォート家の貴族の名なんて惜しくない。家名復興の為の結婚か、彼への愛かを選ばされたら、名前なんて潔く放り捨てる。”
エリーゼ”レツヂ”、わたくしにはこれだけで十分。

どちらも欲する者がいたら躊躇無く譲り渡そう。自分には必要ない物だ。

潤む視界で愛しい指輪を眺め、どんな宝よりも大切なそれを右手で包み込む。

「わたくしは、貴方に愛して頂けるのなら……他に何も要りませんもの」

「……ふふ、白様あ」

食堂の外に取り残された三名。その中の一人が突然、夢心地のまま薄気味悪い笑い声を上げる。

只でさえ曇り空で月の光さえ届かない状況なのに、無駄に恐怖感を煽るんじゃない。直ぐに発声源を特定出来たから良いが、怖さで鳥肌が立つたぞ。

「おい、お願いだから、お前等の主人の気味悪い笑い声を止めてくれ」

「旦那様が傍にいない時のお嬢様は何も聞き入れないでござるよ。必死で旦那様を想像して正気を保ってます故」

「今の姫しゃまを起こしたら、校舎が凍りつきましゅね」

犬と猫に主人の説得を諭すが、頼みの綱が戦わずして白旗を挙げ

ている。ペット二匹に呆れられてる飼い主って何なんだよ。犬は諦めてる様子で、猫に至っては狂人扱いだぞ。

こちらは神経尖らせて警戒を怠っていないというのに、一番の強者が現実逃避中。まさか置いてきぼりを喰らっただけで、精神的に致命的な大打撃とは。もし今、天人と戦闘になれば、こちらの班は連携なんて皆無。確実に白達の班の方が生存率高いだろう。

「はずれだ……絶対はずれ引いた」

抗えぬ現実に頭を抱えながら、軽い既視感を覚えた。

そうだ、こんな気持ちは一ヶ月前の試験で二科目連続赤点を取った時に似ている。どちらか漏れなく補修付きで二週間の間、苦渋を舐める地獄を味わった、あの時に。

まあ済んだ事を悔やんでも仕方ない、それは分かるが敢えて言わせてくれ。わたし一人だけ持ち場を変えてくれないか。敵と戦う以前に、錯乱したエリーゼの蒼炎による誤射が怖過ぎる。蒼炎に覆われて苦しみながら焼失していく天人を目撃してるから尚更だ。

「し、白様……その女は、誰ですの……？」

夢の中で昼ドラ展開を繰り広げるとは、器用な奴。現実と関係しているとするれば、その女は間違いなく灯火だな。起きてから本人を見て錯乱しないか、とても不安だ。

しかし、普段の行動を見ていると世界二位の神葬具使いの名が霞むな。味方ですら恐怖する強さを誇る蒼炎使いとしてのエリーゼと、白ですら恐怖する狂愛のエリーゼ。互いの印象が国境隔てている位違う。他人の名前を呼ばないのは相変わらずだが。

「遅いわね、二人共……も、もしかして、白の色魔が二人つきりな事を利用して灯火にいやらしい事を!？」

一方で、後輩は忙しく動き回りながら独り言を呟き続けている。何かを想像しては顔を沸騰させ、頭を抱えて大振りした後、また動き出す。気味の悪さとしては同格か、それ以上だな。

先程の発言撤回。警備する以前の問題だ。この三人の班で協力するという事自体が間違っている。

「白……お願いだから早く済ませて来てくれ」

「懐中電灯だけだと大分辛いな」

食堂の広さが仇となり、奥の方は完全に暗闇状態。手にした命綱とも言える懐中電灯の光も、先を照らすと暗闇に呑み込まれてしまふ。

加えて何時、何所から奇襲を受けるか見当も付かず、灯火を庇いながら常時気を張り詰め続けている。

廃屋病院で肝試しを実行しても、ここまで神経磨耗しないぞ。天人と遭遇するよりも、幽霊と鉢合わせした方が殺される危険性は減るし。武器持つて追い掛け回されると、ただ驚かされるだけならば、俺は迷わず後者を選ぶ。

「白……ごめんね。足手纏い、だよね……」

指名した時から覚悟していた事だが、具合の悪い灯火と別々に行動する訳にもいかず、終始二人一組で行動している。

俺は比較的消耗が低い拳銃の神葬具を創り出し、銃口は下げずに構えたままの移動。これならば即座に攻撃に転じる事も出来る。襲って来た敵の天人が上位、もしくは真後ろからの攻撃でない限り、

致命傷の一打は避けられる筈。

「バカ言うな。灯火と一緒に来てくれなけりゃ、こんな怖い所一人で行けないぞ」

「あ……うん、ありがとう」

申し訳無さそうに言う灯火に笑い掛けると、疑問を覚えながら周囲を見渡す。

粗が目立つ探索だが、見回っている間に殺気の類は一度も感じなかった。ダイゴロウの嗅覚が誤認したのか、はたまた敵が消耗するのを待っているのか。

場所が校舎なだけに、派手に動けないのが厳しいな。火力の高い武器で敵をいぶり出そうとすれば、確実に食堂の壁に大穴が空くし力の調節を誤れば食堂丸ごと吹き飛ばしてしまいそうだ。大暴れの戦法に慣れると小回りが利かなくなるのが駄目だな。

「そっぴや灯火。調理場って何所にあるんだ？」

楓と話していた時に話題に挙がった業務用冷蔵庫。食堂の飯を作っている場所にあるのは当たり前として、転入して浅い俺は調理場の位置を知らない。最終日だから、せめて穴の無いよう念入りに見回らなければ。

「配膳を受け取る場所の奥だね。でも、生徒が入れないように鍵が掛かってたと思うけど……？」

「鍵か、なるほど。調べてみる価値はあるな」

調理場なら隠れ場所もあり、食料もありと、隠密する場所としては最適だ。加えて、鍵も掛かっていて、人がいるのは昼間だけ。鍵の問題を無くせば、これ以上の優良物件、他には無いだろう。

万が一、天人が自分の体を透かす事が可能であれば、鍵なんて物は障害にすらならない。そんな能力持ってたら天使というより化物だな、完全に。

「ここか。鍵は……掛かっているな」

生徒が一度に食事をする為に広く建造された食堂。深夜となつては人っ子一人おらず、更に天人が何所から現れても可笑しくない点が追加され、恐怖が増し。

そんな下手な肝試しよりも怖い場所を、懐中電灯の心細い光で照らしながら辿り着いたのは、生徒達が食事を受け取るカウンターの奥。食堂の最深部にある、調理場と記された扉。

白はドアノブを回すと鍵が掛かっているか確認をし、顎に手を当てる。

「どうしたの……？」

「いやな、ここの中から変な感じがするんだ。神葬具出してたら分かると思うぜ」

見ると拳銃を握っている白の手が震えている。いや、違う。白の体で他の箇所は、こんなに異常に動作していない。神葬具の拳銃自体が震えているんだ。

僕も確認の為に神葬具を展開したいけど、今の体力を考慮して断念した。

この扉に近づく度に、頭痛が増長している気がする。今の磨耗した体力で神葬具を展開したら、消耗が少ない円月輪でも倒れる事は必至。情けない事に結局、全て白頼りになってしまっている。

「さてつと……開けるか」

こちらからは背中だけしか見えないので、白が何を実行しようとしているのか窺う事が出来ない。

ただ、鍵を取り出している風には見えないんだけど、気のせいかな。

「え？鍵持ってるの？」

「よく映画であるだろ。ドアノブ一つくらい、安いもんだ」

白の言葉の意味を掴みかねていると、突如目の前から耳を突くような銃撃音。一発でも心臓が破けそうな程驚いたと言うのに、連続して計四回の発砲。銀行強盗も驚く大胆さに、感極まって泣き出しそうだった。

(天人が気付いたらどうするの、白……)

無残に破壊された鍵を無視して、扉を開く白を見て安堵する。まだ蹴り破る行為をしないでだけマシか。

そう考えている自分を知って愕然とする。最近、白の行動に慣れてきている自分が怖い。普通なら拳銃で施錠された扉を破壊する事自体、警察行き決定の行為である。

お願いだから警察沙汰になるような事はしないでね……白。きつと収容した刑務所の方が危ないと思うから。

「え……何？この音」

扉を開けたは良いが、一向に動く気配のない白の大きな背中のお陰で、調理場の内部が全く見えない。

その上で聞こえて来る、生野菜を丸齧りしているような豪快な咀嚼

嚼音。薄暗く不気味な雰囲気の不釣り合いな効果音。気にならない訳がなく、何所かに隙間が無いか探っていると、白の脇の下に空間を発見。棒切れ状態で立ったままの白の脇の間から、内部に目をやる。

「はむ……はむ」

僕も調理場の内部は拝見した事ないので、機材の配置等は全然わからないんだけど、確実に業務用の物と思われる冷蔵庫の光が漏れている。冷気がこちらまで漂って来る程だから、かなり長時間開封され続けていたのだろう。

何より中の食品は大丈夫か心配だ。明日、学食を利用した生徒全員が食中毒なんて大惨事になったら目も当てられない。

「おいおい……マジかよ」

「むぐ……はぐはぐ……ん？」

白からは始めて聞く焦りを露わにした呟き。その視線の先に、冷蔵庫の光に照らされた一つの人影。

目を凝らして見ると、人参を丸齧りし、手にはキャベツを抱え、生野菜を豪快に食している。まだ生肉でないから人体に影響は出ないだろうけど、確実に常軌を逸した行動である。

そして、その小柄な人影が身に纏っている古めかしい西洋甲冑と、背中から生えた大きな漆黒の翼。

「て、天人……？」

> i 3 3 4 8 4 — 2 1 3 <

32 『漆黒の野菜泥棒』【挿し絵】（後書き）

やっと完成形です。長かった……長かった。

次回からようやく中盤です。ゆっくりしていった下さい！

33 『消えて行く人參、逃亡の訳』

悪い夢なら全力で覚めてくれる事だけを祈ろう。半信半疑だった推測が、まさか的中していたとは。

「上位天人……」

光の無い暗闇と同色の、身の丈に合わない巨大な翼。戦闘で天人を見慣れている神葬具使いならば、この色違いの翼に真っ先に視線が向かうだろう。通常、赤で統一されている筈の翼の色が違う天人即ち、上位十神階の一体である。

通常の人とは違い、幾分か軽装の鎧。上位の人ならば中位よりも重装備だと予想していたが、意外や意外。攻撃を受ければ簡単に碎けそうな鎧である。

全ての天人が装備している兜も小型で、頭を覆う所の話じゃない。むしろ御洒落で着けているのかと問い掛けたくなる程。その兜では、確実に頭は守れないな。

「し、白……どうしよう。上位……だよね？」

声を聞くだけでも、灯火が震えているのが分かる。人間誰しも異質な物には恐怖心が湧く物だ。

俺だって、背後に灯火を庇いながらも、目の前の少女を見た途端天人への恨みが全て弾け飛ぶほどの力量差を感じた。神葬具を手にしていたから尚更大きく。まるで全身に刃物を突き付けられた気分がしたぞ。

『……………ん？』

口に啞えていた人参を豪快に齧り切ると、再びこちらへ視線を向け直す少女。

恐怖を覚える前に、彼女の顔の整い具合に息を飲む。血で真っ赤に染め上げられたと言われても疑問を持たない程、朱一色の瞳。その赤眼を際立たせる様に真っ白な、濁りの無い雪色の髪。白髪の長さは尋常ではなく、座っているせいも合って豪快に地面に垂れている。

彼女が鎧姿で無ければ、もっと冷静に容姿を解説出来たのだろうが、正直今の頭の中は脱出経路を探す事で手一杯である。

（背を向けて逃げれば背中からやられるな。灯火だけでも先に逃がせるか？）

最悪、目の前の天人と戦闘になったとしても、背に守っている灯火だけは逃がさなければ。皆に知らせて欲しいというものもあるが、一番は灯火を守り切れる自信が無いからだ。万が一、灯火を庇いながらの戦闘になれば、外で待機している仲間が勘付く前に全滅の可能性も捨て切れない。

取り落とし掛けた拳銃を握り直すと、天人に銃口を向ける。何時襲い掛かれても、何とか迎撃しなくては。

『……………はぐ』

そんな俺達の手汗に汗握る葛藤を無視して、再び手に持った新たな人参を口にする天人。生野菜を齧る小気味良い音が絶え間なく耳に届く。野菜の広告に出演しても問題ないくらい良い音出すな。

野菜嫌いな子供が多い昨今で、農家の人が見たら涙を流すだろう、豪快な食べっぷり。余りの場違いな音に思わず目を疑ってしまった。

「天人が……………飯食ってる、だと？」

生野菜丸齧りを正当な食事と言っているのかは判断出来ないが、天人が食べ物を摂取している。

まさか真正面からの攻撃だけでなく、上位天人自らが兵糧攻めとは。物資が枯渇しつつある世界には強襲と同じくらい大打撃だ。何千何万いるであろう天人の兵士達を総動員されたら、世界に明日の為の食料は残らないだろう。

「し、白……えっと、どうする？」

天人の間拔けな挙動と場違いな音に、先程までの緊張感が全て霧散してしまった。

灯火の声からも怯えが消え、戸惑いが見受けられる。何を隠そう数多の天人を相手して来た俺も、目の前の天人の異質さには度肝を抜かれている。

人間は天人が現れて三十年間、一度も敵の素顔を拝んだ事が無い。絶命した天人の鎧は、神葬具でも、ましてや人間の道具でも解体出来ず、生体解剖は不可能。神葬具として人と刷り込みを行えば亡骸は消滅。人間は天人の体内の構造はおろか、外的特徴まで把握していない。

『ん……ぐうぐう無くなった』

そんな人類の中で天人の素顔を始めて拝んだ二人。歴史に名が残っても不思議じゃないな。偶然の産物ではあるが、月に着陸した宇宙飛行士と同じ程度の快挙だろう。

まあ歴史書に名を残せるのも、俺達がこの場から無事に逃走出来たら、の話。

と言うか先程から頭に直接響いて来るような声は何なんだ。上位天人前にして恐怖の余り幻聴が聞こえ始めたか。恐怖が作用した物

にしては、むしろ可愛く癒される声なんだが。

「今ここで戦っても被害が出るだけだ。平和的交渉を望む」

「て、天人と話し合うの!? 止めた方が……良いと、思うけど?」

有無を言わず襲い掛かって来る天人なら話は別だが、目の前にいる彼女は如何せん、それと同様には見れない。外見的にも仕草的にも。

但し、神葬具を通して伝わる力量は、半端な物ではない。俺が剣を展開し、解放したとしても足元にも及ばないだろう。光の盾を形成して防御したとしても、敵の一撃で塵になるのが明白。

ならば俺は賢明に、より安全な方を選択する。勝ち目が無いなら汚い方法で活路を見出せば良い。生きてれば儲けもんだ。

そして、会談を円滑に済ませる為に銃口を向けるのを忘れない。どんな外見であろうと元を正せば天人。油断は命取り。

「へい、その可愛い天人ちゃん。ちょっと良いか?」

「良くないよ……もうちょっと堅実な話し方の方が良いと思うよ、白。せめて敬語とかで」

親近感を持たせる為に軽い男の男風で仕掛けてみたが、灯火的には駄目らしい。女子の感覚は分かり辛いな。

次なる装いを考えていると、何時の間にか俺の背後にいた灯火が、天人に少しずつ近付いて行く。

不味い、矢面に立つ筈の俺が守られてどうする。

慌てて灯火を引き戻そうと腕を掴もうとした時、天人の少女の視界が灯火を完全に捉えた。威圧を感じさせる血色のジト目が、動きを遮るかのようによく光る。まるで天敵を警戒する猫を彷彿とさせた。

「えっと、その……君は、どうして襲って来ないの？」

少女の視線に晒され、若干言い淀み掛けた灯火が、必死で天人に問い掛ける。

確かに遭遇してから何度も、天人は俺達を攻撃する機会があった。拳銃で牽制はしていたが、その神葬具が震える程の力量差。牽制も意味を為してなかったに違いない。なら、何故殺すべき対象に真っ先に牙を向けなかったのか。

「……………」

灯火の言葉を理解しかねているようで、目の前の天人は、人參を加えたまま首を傾げる。

仕方ない。ここは何百もの天人を相手にして来た俺が、人類と人類の敵との通訳に徹しようじゃないか。平和的交渉を完遂すると言ってしまった身だから引くに引けない。

「何で、お前は俺達に攻撃して来ないんだ？天使なら、人間みたら攻撃するように言われてるだろ？」

天人達は自らを神の御使い、天使と呼んでいる。人間達側の総称の天人では分かり辛いだろう、と考えての配慮も忘れない。

少々荒々しいが、灯火の言いたかった事に大体は合っている筈。

まあ、命令下しているのは十中八九神なんだろう。はたまた、上位の天人達が神の存在をでっち上げているか。どちらにせよ、その神を屠らなければ人間に未来はない訳だ。

「…………敵じゃ、ないから」

彼女は簡潔にそう言うと、小さな腕に抱いたキャベツの葉を一枚

千切り、口に放り込む。それ以上語る事はないと言わんばかりの態度である。

『……攻撃して来る人……敵……教わった』

感情の乗りが皆無な声が頭の中で反響し、慌てて拳銃を背後に隠す。

早まって彼女に向けて発砲していたら、学園全体が消失していたなんて笑い話にもならん。現に、俺の背中で冷や汗が滝のように流れている。無意識の内に、乾いた笑いが口から漏れている。

灯火が真つ先に天人に話し掛けてくれて助かったな。やはり始めは歩み寄りが大事。武力だけで解決しようなんて間違ってる。無論、万が一に備えて拳銃は消さないけども。

「何で、君はこんな所にいるの？」

現状としては、翼生やした美少女が冷蔵庫開け放ってこそ泥してる、としか形容しようがない。言ってる自分でも状況が理解し辛い。どんな事件が起これば上位の天人が調理場に隠密する状況が出来る上がるんだ。

『……逃げて、来て……お腹がぐうぐう鳴って……ここに、行き着いた』

灯火の問いに、あくまでマイペースを貫く天人。小さく、鈴の音のような声が頭に届く。

正直に言つと、言葉の主語が抜けていて、意味が全く掴めない。辛うじて、お腹ぐうぐうという言葉が腹の虫を刺している事は推測可能。

空腹過ぎて匂いを辿っていたら、偶然調理場を発見して食料にあ

り付けた、という所だろうか。しかしどんなに空腹であっても、勝手に学園調理場の冷蔵庫を開け、中身を物色して尚且つ食す、その行為。人、それを犯罪と言う。天人に窃盗や泥棒という常識を期待するのが、そもそも間違いか。

「あー……あれだ、お前の名前は何て言うんだ？」

「……ふおん。サンダルフォン」

サンダルフォン……生命の樹の樹列だと十番目の幹を守護する天使。つまり、上位天人なのは間違いなくなつたな。羽根の色と伝わる力で、既に中位と格が段違いなのは理解していたが、改めて認識させられると素直に驚く。

人類の最大の敵、神。その門番である十体の中の一人が、今日の前で生野菜を豪快に貪っている。

深刻な顔をしている人間二人の内、一人は銃を構えている。そして銃口を向けられた天人は暢気に食事中。本人達が大真面目でも、傍目から見たら御笑い種だな、この光景。

「よしサンダルフォン……長つたらしいからフォンで良いな。お前は何かから逃げて来たんだ？」

正式な名前であるサンダルフォンが長つたらしいので、その場で愛称を作る。きっとサンダルフォンと仰々しく名乗るよりかは、フォンと名乗った方が可愛らしく感じると思うぞ。

しかし、上位天人が人間の世界へ逃げ込んで来る、そんな事例は一切無い。余程の事が天国の方であつたのだろうか。

「……神から、逃げて来た」

33 『消えて行く人參、逃亡の訳』（後書き）

やっと書き終えた……長かった。長かったぞー！

これから最新話をまた随時執筆すると思うと胸が熱くなります……
あおさんの挿し絵と読者様からの応援が執筆を支えてくれます……
なんと33話のぞろ目……実際はプロローグ入れると34話なんですけども、気にしたら負けです。
では次回にまた〜。

34 『白肌の黒翼』【挿し絵】

「あたしは絶対反対よ！何で殺さないといけない相手を養わなきゃいけないの！」

「養うのは俺のお母様だ。あと耳元で騒ぐの止める鼓膜破れる」

何故か妄想に浸り続けているエリーゼを舞佳に任せ、何とか寮の自室へ帰還した訳だが、時間は深夜。眠気を抑えつつ興奮状態の楓を宥める。猛犬を飼っている飼い主の苦勞が身に染みて分かるな。騒がしさで隣部屋の生徒が目覚まさないければ良いが。

そんな俺の心配を気にも留めず、鋭い八重歯を隠さずに威嚇し続ける楓。

こんな苦勞負うならいつその事、エリーゼに一日中抱き付かれていた方がマシに思えてくる。いかん、疲勞で自分を見失いつつあるな。

「とにかくだ、詳しい事は明日話すから、今日は」

「ふお、フォンちゃん！服着なきゃダメだよ！」

これ以上の面倒事になるのが目に見えているので、話を無理矢理区切り、凶暴化した楓を部屋に戻そうとした時に、背後から大慌ての灯火の声。

最近遭遇し過ぎたお陰で、振り向かなくても気付く厄介事の気配。正直、何も無かった振りをして今直ぐ布団に潜り込みたい。防空壕に逃げ込む人々の知恵を利用して、危険地域から逃げ出したい。

見ると先程まで怒り狂っていた楓まで、口元が目に見えて引き攣っている。

教えてくれ、今俺の背後では何が勃発しているんだ。俺は面倒事に巻き込まれるのは御免だから絶対に見ないぞ。

『……熱いの、や』

振り返るまいと決意していた脳に、直接響く澄んだ声。驚きで決心が呆気無く崩れ去り、反射的に振り向いてしまう。

そして移動した視界が収めた物は、体を包んでいた鎧を消し、漆黒の大きな翼を縮めた、華奢で小柄な少女の姿。

膝まで伸びている、光が当たれば解けてしまいそうな雪色の髪。その髪色に負けず劣らず色白な、まじりつけの無い美しい肌。黒羽と同じ位の小柄な背丈に、けだるい感じの朱色のジト目。全てが人形師によって精巧に製作された人形のようにである。

> i 3 4 7 5 7 — 2 1 3 <

「は、はだ……はだ!？」

楓は動揺で舌が回っていないので説明すると、目の前の少女、全裸である。おまけに体を一切隠す気がないので、色々な部分が丸見えだ。上半身は既に視界に収めてしまったから仕方がないとして、下の方には視線を向けないでおこう。英国紳士も真つ青な配慮だ。

しかし綺麗過ぎて全くいやらしい気持ち湧かないな。もはや芸術の域まで達してる彼女の裸体は、絵画を鑑賞している気分にする。させる。

なるほど、芸術は素晴らしいな。ほぼ徹夜状態の眠気を完全に吹き飛ばしてくれる。芸術万歳。

「ばっ、バカ!何ジツと見てんのよ白!」

「し、白見ちゃダメだよ!ほらフォンちゃん、これ巻いて!」

シャワー室から慌てて出て来たジャージ姿の灯火が、手に抱えた

バスタオルを少女に手早く巻き付ける。実際には灯火が現れてからは音だけの推測だが、予測は的中しているだろう。

その間、俺は楓に背後から抱きつかれて目隠しをされている。背中に当たる柔らかい弾力が心地良く、目隠しも良い塩梅だ。このまま寝入ってしまいたいな。本音を言うと眠気が絶頂に達し掛けているから早々に床に付きたいんだよ。

『……へくちっ』

「ほらフォンちゃん、早く髪乾かそうね。じゃないと風邪引いちゃうよ。白、ドライヤー借りても良いかな？」

「どうぞ御勝手に。置き場は分からないぞ」

俺は髪の毛を雑に拭くだけで終わらせるから、全く文明の利器を行使しない。お陰で機器自体が何所にあるかも把握していないのだ。滅び行く地球を思つての節電だよ節電。決して面倒だからという簡単な理由じゃないんだ。

「えっと、この辺りに……あ、あつたあつた。見付けたよー」

灯火達の部屋と物の配置は同じなのか、直ぐに目的の物を見付けて戻って来る灯火。

楓は天人を毛嫌いしているようだし、灯火がいてくれて助かったな。年頃の無口で、しかも天人の少女なんて面倒見切れる気がしない。俺だと、あの長く綺麗な髪を乾かすのも乱雑に済ますだろう。

「こ、こら、逃げちゃダメだってばー！」

ただ、ドライヤーの耳障りな音と、逃げ回る足音を聞く限り、どちらが彼女にとって幸せかは判断出来かねる。追いかけっこは構わないが、せめて部屋の中は荒らし回さないでくれよ。それと深夜だ

から程々にしてくれると助かる。

『ん……良い匂いがする』

自身をサンダルフォンと名乗った、小柄な彼女の体型に見合う衣服を、この場に居合わせた誰もが所持していない。舞佳か黒羽に頼めば解決するとは思うが、生憎と二人ともいない。

その場凌ぎの折衷案として、人類の宿敵である天人が俺の衣服を着用している。寸法が全く合わず、だらしなく伸びた袖。裾は太股を中間まで覆い、逆に艶かしい色白の脚を引き立たせている。

Tシャツだけで済むのだから楽といえば楽だな。下着は無着用な訳だが、下手な事故が発生しない限り大事には至るまい。

「こら、嗅ぐんじゃない」

服の襟を、匂いを確かめるように嗅ぐフォンを嗜める。生憎と俺は自分の体臭を嗅がれて良い気分の特異趣向の持ち主ではない。匂い好きな性癖を持つ天人がいたりしたら嫌だな。人間を殺す敵だとしても、せめて清潔な天使像は保って欲しい物だ。戦場で仲間血に塗れた天人ばかり見ている俺が言うのもなんだが。

『……ん、わかった』

本当に理解してくれたのか凄く不安だ。別に嗅いでも害は無いから良いんだけどさ。

「ちよっと白。話は終わってないわよ」

目の前の白髪少女に苦笑していると、怒涛の勢いで押し寄せる厄介事に次ぐ厄介事。骨折に加えて高熱で寝込み、やっと退院出来たと思いきや約一週間働き詰め。何もかも投げ捨てて眠るくらい許されても良くないか。

そんな俺の儂き願いも、肩を破壊せんとばかりに力む手に却下される。現実是非情成り。

「アンタ、分かってる！？ 天人よ天人！羽根の色とか違っし、鎧着てないけど天人なのよ！？」

楓の言っている事は人間として至極当然の意見だ。突然向こうから殺しに来て、敵と言わずして何と言う。今も俺が抑えていなければ、興奮している楓は直ぐに少女へ向かって神葬具の牙を剥くだろう。

だが、今の人間には戦力の次に不可欠な敵への情報が圧倒的に不足しているのが事実。

どうやって天人は生まれるのか。どんな理由で神は人間を駆逐し始めたのか。そして、何故殺す対象である人間に、神葬具と言う武器を授けるのか。今挙げたのは極僅かで、天人に関する情報は殆どが謎に包まれている。こんな状態で神と戦い続けても、人間は無駄に消耗を続けるだけ。

『……………どうか、した？』

ならば敵である天人を味方に付け、知る限りの情報を流してくれた方が戦闘になるよりも万倍良い。被害は皆無で、こちらは喉から手が出るほど欲しい情報を得られる。

彼女が、フォンが本当に神を裏切っていたら、の話だが。

神の側近である十神階が、それも簡単に主を裏切るだろうか。俺が神ならば、天人の裏切りを防ぐ為に首輪と同等の戒めを付与する

と思う。それこそ、従者が己を裏切れば存在が掻き消える程の。

『……………ん？』

だが目の前の少女は、神を裏切った負荷を微塵も感じさせない。フォンが俺達を欺こうとしているなら、負荷を全く見せない態度は逆に不自然じゃなからうか。本気で騙すつもりだったら、手負いの演技くらいは見せそうだが。

「落ち着け。この子は敵意なんて出してないだろ」

「何で、何でそんな事言えるのよ……………！アンタだって見て来たでしょ！？こいつ等に殺される人を！皆、死にたくななんて無かったのに、首を斬られて……………目の前で子供を殺されて！」

あの映画を観に出掛けた日の惨状を思い出しているのか、必死で震える声のまま問い掛けて来る楓。あんな公開処刑のような大量の死を目の前で見させられたんだ。その仇が眼前に居れば苛立ちが湧き上がるのも無理はない。

白状すると、楓がこうなる前に部屋に帰したかった。せめてフォンが居ない状況で、尚且つ楓が冷静な時に、俺の考えも含めて全てを打ち明けるつもりだった。

「ああ、見て来た」

楓の訴えで、苦い記憶が蘇る。

無残に虐殺された逃げ惑う人々に、目の前で手首だけを残して消した仲間。最前線で何度も天人と交戦して来た俺は、死を間近で見過ぎた。楓が目視した何十倍も、それこそ感覚が麻痺する程。

だけど、一人の友達を失って、沈んでた時に気付かされたんだ。人の死を悲しむ訳にはいかない。悲しめばその分、心に負担が残る。

俺は、明日を戦い抜かなければいけない。

「だったら……何で、何でそんなに冷静でいられるのよ！殺したい相手が、目の前にいるのに……いるのに……ッ」

今直ぐにでも、神葬具を展開しかねない様子の楓の両腕を掴む。

楓の意見に賛同したくはある。だが目的の為に、今は自分の感情は捨て置くべきだ。思うだけじゃ、何も叶わない。本当に死んだ奴を思うなら、血が出るほど歯を食い縛って、耐え抜く事も必要なんだ。

「戦うだけじゃ、救えない物もあるんだ」

俺の言葉に反論するように、楓が掴まれた腕を強く振り解く。

「アンタなら……アンタなら、分かってくれると思ってたのに……」

「白、フォンちゃんにご飯作って来て　うわっ!？」

フォンの髪を乾かし終えた後、腹の虫が鳴ったフォンの為に夜食を作って帰って来た灯火と、飛び出した楓がぶつかり掛ける。人と衝突し掛けても咄嗟にお膳の上の料理を保護する灯火の反射能力は、学園での演習の賜物なのだろうか。

駆けて行った楓の方向と、取り残された俺へ視線を右往左往させる灯火。先程までの雰囲気は消し去るような険悪な空気に、戸惑いを隠せていない様子。

「えっと……ど、どうかしたの？」

お膳を手に戸惑う灯火を見て、俺は首を横に振る。

人の説得ほど難しい事はない。天人の相手をしていた方が十倍は

気が楽だ。死の危険は付き纏うが、余計な事を考えずに済む。

『んあ……良い匂い……』

そして事の発端である天人は、暢気に灯火の飯の匂いに釣られている。

即席で料理したからか、お膳に乗っているのは手間が掛からない、美味そうに焼き目の付いた食パンと目玉焼きのみ。きっと生野菜のみを食していたフォンにとっては、匂いからして御馳走なんだろう。不憫な奴。

(ああ、また面倒な事になったな……)

34 『白肌の黒翼』【挿し絵】（後書き）

挿絵込みの完成版です…！

R15タグとが入りませんよね！？元々ついてますし！

さて、あおくまさんには無理を押し描いて頂き、本当に感謝しか
ございません

毎度毎度可愛いキャラをありがとうございます

そしてお気に入り登録が300行きました

皆様のお陰です。本当にありがとうございます

まだまだ続く神葬具をよろしく願います

35 『首狩りの黒霧』

「本当に、我が息子ながら厄介を抱え込むのが好きね」

「巡回を任したのは黒羽だろ。俺だって予想外だったんだ」

楓への誤解が解けないまま夜が開け、朝早くから授業の一眼目を無視して学園長室に訪問しなければいけない。度重なった寝不足と面倒事で、拷問を受けた囚人のようになりつつある。

そんな疲労困憊の俺へ向けられる義母の言葉の端々に鋭い刃を感じるのは、ただの錯覚だろうか。

最近、夜遅くまでの仕事が続いているようで、若干顔色を悪くしている黒羽。自慢の特注机に頬杖を付き、溜め息を吐きながら放たれる、呆れの混ざった視線が痛い。楓の事といい義母の視線といい、もう部屋に直帰して一切外出しなくなるぞ。

「で、その肝心の天人さんの姿が見えないのだけけど？」

座り心地の良さそうな椅子に背を預け、黒タイツに包まれた脚を組み直す黒羽。我が義母ながら、色っぽい動作。外見年齢がもう少し上ならば、食入って見詰めてしまう仕草だな。

しかし妖艶な身振り以上に目を引く、中指に嵌められた門の形の装飾が施された指輪。なるほど、予め天人を連れて行くとは伝えてあるし、フォンを警戒しての展開か。

『……………しろ、しろ』

くいくい、と制服の裾が弱く引っ張られる。

視線を下に向けると、俺の裾を掴みながら黒羽を指差しているフォンの姿。服装は校内を歩いても違和感の無いよう、大きな灯火

の古着を着用している。灯火も身長が結構高いので、やはり違和感が目立つが、俺の衣服よりは良いだろう。

『……しろ、この人……誰？』

そう言いながら裾をくいくいと引つ張り続けるフォン。

実は、この裾引つ張り、学園長室を訪れる前にフォンから何度も服の生地が破けるような万力で引つ張られ、何とか矯正させた動作なのだ。こういう控え目な力加減ならば可愛く感じる。矯正前までは小熊に襲われている気さえしたからな。

ちなみに一発目の引つ張りでは比喻抜きに服の右袖を丸ごと持っていた。値の張る制服等ではなく、安売りの私服だったから良かった物の、引き千切られた本人としては目を疑う程の大惨事だぞ。

「あら、随分可愛いのね。貴方、お名前は？」

俺の背後に隠れていた目当ての少女を見つけ、優しく話し掛ける黒羽。それに驚き、再び身を隠すフォン。一応言い聞かせてはいるのだが、やはり上着の裾を強く握られると怖い。一瞬で服が再起不能にされそうぞ。

『ふおん……さんだるふおん』

「サンダルフォン、か。見覚えはないと思ったら、そういう事ね……」

案外人見知りなのか、それだけ言うつとフォンは再び俺の背後へ隠れてしまう。天人が人見知りつて物凄く違和感沸くな。天人と言えば、やはり下位や中位の印象しか無かった分、予想外の行動や思考を持つフォンの方が異質に思える。

そしてフォンの名前を聞き、神妙な顔付きになる黒羽。

何時もの事だが、黒羽の物思いは突然開始され、他人を置き去り

にして思考を回転させる厄介物である。こうなると肩を叩くか、大声で呼び掛けるかしなければ現実には復帰しない。確かに知略を巡らせて徐々に責める事が好きなサド黒羽の性格上、かなり相性が良い癖だとは思うが、息子としては心配なのだよ。

「人と意思疎通可能で、知恵も思考も持つてて……間違いなく十神階の子ね。サンダルフォン、貴方の階級とかは分かる？」

階級というと、十神階の事か。確かに羽根の黒色は三位にも共通しているし、サンダルフォンという名前だけで十位だと決め付けるのは早合点。順位交代とかも無いとは言い切れないし、下克上とは何所の社会にも共通する言葉なのだよ。

『階級……十位。十位つて……教え、られた』

フォンは口数が極端に少ない上に、重要な主語が抜けている事が多い。現に今の言葉には、一番重要な誰に順位を決定されたのかの部分綺麗に抜け落ちている。考えるまでも無く、神な可能性が濃厚だが。

取り合えず、サンダルフォンは生命の樹の系列通りに十神階の十位に位置している。それだけでも今は収穫だ。

俺はフォンと遭遇してから、フォン自身の事を詳しく訊こうとは思っていたのだが、フォンが灯火の料理を完食したら直ぐに熟睡してしまったのもあり、訊く機会が無かった。そういや、黒羽と話して終えても楓の事もあるし、エリーゼと舞佳にもフォンの事を説明しなければならぬ。面倒事が積み重なるのは息も吐かせぬ程一瞬だな。

「……生命の樹説は間違えていなかった訳ね。それじゃ次の質問……貴方は本当に神から逃げて来たの？にしては、裏切ったペナルテ

イの類が無い様に見えるのだけど？」

『……………ぐうぐう……………鳴るように、なった。あと、眠くなるように……………なった』

俺の顔を見て解説しろと言わんばかりの表情を浮かべる黒羽。確かにフォンが生野菜を丸齧りしている姿を見ていなければ、天人が腹を空かせて腹の虫を鳴らす、なんて夢にも思っまい。

「腹の虫の事だろ。よく食うぞ、フォンは」

お陰さまで我が食卓のエンゲル係数が跳ね上がりそうだ。

余り食欲が湧かない朝。通い妻の如くやって来た灯火が作った朝食を軽く平らげる。ちなみに男である俺の三倍は食していた。それから校舎に辿り着くまでに、たこ焼きにクレープ、食パン一斤。見ているこつちが胸焼けしそうな大食いっぷり。

灯火は子供を見守る母親のような顔をしていたが、俺は隣で財布の中身を覗いて青褪めていた。銀行から貯金を下ろさなくては自身の昼飯さえ購入不可になってしまう。

「天人に食欲と睡眠欲……………ね。と言う事は、神から逃げる前は二つとも無かったのかしら？」

『……………ん。あと……………武器が、重くなった……………気がする』

流石に裏切った罰が三大欲求追加のみ、は軽過ぎる。しかし、手下の手持ちの武装にまで負荷を掛けて置くとは、敵ながら抜け目が無いな。側近に裏切られる事まで神は想定済みだった、という訳か。

「少し確かめたいわね。サンダルフォン、貴方の武器、出して貰える？」

こんな時に無神経かも知れないが、個人としても上位の神葬具がどんな物か興味が沸く。神葬具を展開していない時でさえ感じる圧倒的な威圧感。何よりも、人類の宿敵である天使達の大本の武器。自分の武器を人間に晒す事を躊躇うかと思いきや、フォンは直ぐに小さく頷く。最大の手札を見せる事を拒まないとは、素直と言うか考えなしと言うか。

いや待て、フォンが神葬具を展開した途端に黒羽に襲い掛かる可能性も捨て切れない。何時でも飛び出せるよう準備はして置こう。

『……森を黒き霧が包み込む』

俺と黒羽の間に立ち、呟くように言葉を紡ぐフォン。それと同時に、服の中へ収納する為に縮めていた黒翼が、狭苦しさから抜け出すように解放される。上着の背部を豪快に破り広げられた巨大な翼と、周囲に散らばる漆黒の羽根が相まって、息を詰まらせる程美しい光景が出来上がる。

何より一番驚いたのは、普段の淡々としている感情乗りが皆無の声から一変した、脳内に澄み渡るような歌声。まるで水面に雫が降り立った時を彷彿とさせる、透き通った声。

『現れるは斬首の鎌……全ての罪を狩りし者』

突如フォンの突き出した両手に、出現陣を思わせる円陣が形成される。歌声に共鳴するように漆黒の翼から光が溢れ、光の粒子が円陣に吸収されていく。

何故か見覚えがある光景だと思いきや、呪文を唱える部分といい、派手な演出といい、楓の神葬具を思わせる動作だ。向こうは単に格好付けだろうが、フォンのは歴とした武器を呼び出す為の儀式なのだろうか。

神葬具という媒体を展開していなくとも、フォンの体に力が集束

していくのが分かる。台風の目を覗いているような錯覚さえして来た。

『彼の名……黒霧ノ森』
エンヴェロッサ

黒霧ノ森。フォンがその言葉を唱えると同時に、彼女の体の周りに黒い霧状の物が現れた。不気味な黒霧は、まるで主人を守るかのように彼女の体を覆う。漆黒の翼には適しているが、身に纏っている本人が小柄で華奢な少女だと不釣り合いに見えるな。

そして、徐々に周囲を漂う黒霧がフォンの突き出した両手に集束していく。

黒羽は真剣な眼差しでフォンを観察しているが、戦意を削ぎ落とされる程の圧倒的な力を見せ付けられている俺はそれ処ではない。今まで何百もの天人を相手にして来たが、それ等全てを総纏めにしても、目の前で武器を展開しているフォンに敵うかどうか。

『ん……久し振り、エンヴェロッサ』

黒霧が形を成し、彼女の手に握られる一振りの黒塗りの大鎌。物々しい鎌の全長は優に持ち主の背丈を越えていて、外見から重量を想定すると、戦闘には不向きにも感じる。刀身は黒霧に覆われていて全体像が把握出来ないが、人間の首なら安易に斬首可能であろう。フォンは呼び出した大鎌に優しく声を掛け、鎌も応えるように黒霧をざわつかせる。

『名前持ち……分かってはいたけど、間違いなく神器ね』
ディバイン・ウエボン
『神器……？神葬具じゃないのか？』

「上位の天人が持つ神葬具の名称。わたしが今決めたわ。神葬具じや統一出来ないから、これは」

神器。確かに、今フォンが手にしている武器は、神葬具の枠組みでは収まりそうにない。人間が手にしている奪い取った紛い物と違い、直々に神から与えられた刃。『神の武器』と呼んでも相違ないだろう。

外見で忘れそうになるが、フォンは十神階の最下位。そう、これで最下位なんだ。

フォンの上に残り九体。そのどれもが神器を展開して俺を絶望させているフォンよりも格上。そして十神階を奇跡的に撃退出来たとしても、最後の敵の神がいる。

「どんだけ人間が絶望的か、再確認させられたな……」

35 『首狩りの黒霧』（後書き）

4000文字まで完了……良かった終わって……

ああ……次回はエリーゼだ……

というより地味に4000文字がきついですね

3000からの1000文字がきつい……

次回もよろしく願います

36 『エリーゼ御乱心』【挿し絵】

「大剣使い！白様から、他の女の匂いがしましたの！」

「ああそうかいそうかい。寝不足でそんな事聞かされたら、どう反応すれば良いんだろうな」

朝早くから昼ドラ紛いな発言を真顔とする隣席のエリーゼに、呆れながら数学の教科書を見返す。まさか今日に限って抜き打ちの小テストとは、不幸ここに極まれり。更に悪い事に、わたしは数学と英語が超の付く程、苦手科目である。

隣席のお嬢様は、小テスト前の時間に話し掛けて来る所から見ても勉強の事等は頭の片隅にも置いて無いのだろう。楽勝だからか、はたまた白の事を考えていると視野が狭くなるのか。

どちらにせよ、小テストですら赤点を獲得すると激不味な状況のわたしは、先程からお嬢様の言葉を大半聞き流している。お願いだから少しでも悪足掻きさせてくれ。日頃の授業態度も爆睡ばかりで最悪に違いないから、こういう場面で失敗すると本当に白達と同級生になりかねん。

（だからって、教科書見ただけで出来たら苦労しないんだよなあ。昨日帰ってから少しでも復習しとけば良かった……）

この後悔の嵐な現状を一言で説明しろと言われたら、後の祭りである。

結局、昨日は食堂内から無事に帰って来た白と灯火が、何も無かったの一点張り。内部から銃声も聞こえた事もあり、その事を問い質そうとすると、夜遅くだからと捲くし立てられて説明も無しに悶絶状態のエリーゼを担いで自室へ。

わたしが眠過ぎて頭が上手く働いていなかったのもあるが、不自

然だったな、あの二人。相変わらず平常運行の白は別として、灯火が物凄く落ち着き無かったような気がする。

「わたくし、今朝はもう驚くほど綺麗に起きたんです。優雅な朝日を浴びながら紅茶を嗜んでいるだけでは物足りず、一日に少しでも長く最愛の白様の顔を拝見しようと、白様の部屋に向かったのですわ」

知ってるよ。お前が朝六時に起床して、シャワー浴びて、ドライヤー掛けて、鼻歌交じりに紅茶淹れつつペット共に餌やりしてた事全て。何せ、お前の立てる物音が逐一煩くて起こされたんだからな、わたしは。睡眠を貪るうとしていた者としては、嫌がらせと形容しても差し支えない。

というか、エリーゼは食堂前の見張りの時から妄想混じりで約十時間の睡眠取ってるんだぞ。そりゃ眠気も飛ぶわ。

「お嬢様が早起きなんて……うう、ここまで感動したのは久方振りですぞー！」

「一年に一度あるか無いかでしゅね」

エリーゼが重度の低血圧と知らなければ、只の怠け者と勘違いしそうな言い分だぞペット共。確かにエリーゼの寝起きの悪さは凄まじいけども。二度寝三度寝当たり前な上、前に遅刻寸前で起こそうとした際には、射殺するような目付きで睨まれた事もある。あの時は本気で心臓が縮み上がった。

「で、何でそこから他の女に繋がるんだ？」

「わたくしが、わたくしが白様の部屋の鍵を無理矢理抉じ開けようとしたら……中から円月輪使いが出て来たのですわ……ッ！」

うん、先ず抉じ開けようとする時点で自分の行動の不自然さに気付こうな。普通なら警察呼ばれて騒ぎになる行為だぞ。常識皆無なお嬢様だから、扉を蒼炎で吹き飛ばさなかっただけ良かったなんて考えてしまう時点で、常識が麻痺して来ている証拠だ。

しかしエリーゼと面識があり、白の部屋にいた円月輪使い、と呼ばれる生徒。わたしには灯火しか候補に挙がらないんだが。

大方、料理の作れない白の代わりに朝飯でも用意していたんだろう。大抵の男は料理不得意って言うし。いや、主夫なんて言葉がある以上、そうとは限らないか。

「エプロンを付けて呼び鈴に出て……それはわたくしの役目ですのに！」

後輩が要らん所で恨み買ってるな。苦労人は自分から面倒事に巻き込まれる訳じゃなくて、苦労が他所から訪れる方が多いと思う。

「こほんっ……違いますわ。本当に重要な事は泥棒猫の方ではありませんの」

もはや確証も無しに泥棒猫呼ばわりか。何時か、こいつが神葬具を持ち出して白の傍にいる女子に襲い掛からないか心の底から不安である。灯火、世界二位からの逆境に挫けずに強く生きろよ。

周囲の席の生徒からの視線を感じ、少しばかり声量を落としたエリーゼが咳払いをしながら話を切り替えて来る。

皆、小テストの勉強で必死だから、こいつの良く通る声は気が散るだろうな。いや、わたしも早くテスト勉強しなきゃいけないんだって。真面目にエリーゼの話題に付き合ってる場合じゃないんだって。

「実は……白様の部屋の中から、天人の力を感じたのですわ」

「おい待て、勉強が手に付かなくなる話題は今止せ！後で幾らでも聞いてやるから！」

昨日の不自然な態度と、食堂内に入った白と灯火が今朝、白の部屋にいる状況。そしてエリーゼの天人の気配を感じたという証言。確かに全部の辻褄が合うが、考え出したら切りが無い。加えて考えていたら、わたしの小テストの点も無くなってしまふ。

もう話し掛けて来るエリーゼを完全に無視してでも勉強するしか

「あら、鐘の音ですわね。大剣使い、次の休みに詳しく話しますわ」

授業開始の鐘の音。つまり悪足掻き終了のお知らせ。

鐘の音を聴くと、エリーゼは直ぐに雰囲気を作り替えて自分の机に向かう。切り替え早いな、お前。わたしはもうダメだ。お前の言った言葉が頭から離れない上に小テスト対策が皆無である。来年は本気で白と同じ教室かも知れん。

もしわたしが来年も二年生を過ごす事になったら本気で恨むからな、エリーゼ。

「これで……よし」と

ドライヤー等使った事の無い男の俺なら未だしも、何時もポニータールに髪を結んでいる女子の器用さは見事の一言。

フォンの膝まで届く白髪を二つ分けにしてゴムで結び、その結び目に縞模様のリボンを手際良く巻き付けると、灯火は一仕事終えた職人のような声を出す。長年培った経験が存分に発揮されたな、灯火よ。

「フォンちゃん、どう？動き易い？」

『……ふっふ』

> i 3 6 4 0 8 — 2 1 3 <

色気より食い気を体現しているフォンは、外見を整えられても判断に困るのだろう。天使という存在で生を受けた恩恵か、フォンの容姿は磨かなくても光り輝いてるからな。世界中の女性の半数を敵に回しそうな子だ。

束ねず無造作にしていた髪をツイテールにされ、傍目からだとも機動性が上がった様に見えるが、どうなんだろう。

髪を結ばれた本人は、相変わらず感情を表に出さない無表情で灯火の手鏡に映った自分を凝視している。何を考えているか検討も付かないが、一応喜んではいるのか。

「白はどう思う？フォンちゃん、可愛いよね？」

ついでに昨日から一番俺が戸惑っているのは、フォンの存在でなく、黒羽にフォンの面倒を任された事でもなく、灯火が天人であるフォンを猫可愛がりしている事である。

実際、昨日の楓の反応が一番まともなんだ。人間を何万人も殺し、人によつては両親まで天人の襲撃で亡き者にされている。加えて楓は新聞の一面を飾る事件となった都心襲撃事件で真っ只中にいたんだ。仇の天人と仲良くしろと言う方がどうかしている。

「ああ、似合ってるんじゃないか」

目の前で首を傾げている、ツイテール型に髪を結んだ少女。一見無害そうに見えるが、その実、人間を数え切れないほど血祭りに上

げて来た天人の親玉。

情報を掴む為に割り切ったとは言え、俺でもフォンに接する事は若干の躊躇いが残る。

「フォンちゃん元が良いんだから、もつと見た目に気を使わないと駄目だよ。お風呂もちゃんと入らないとね」

「……熱いの……嫌い」

だからこそ、灯火のフォンへの態度の不自然さに疑問を感じざるを得ない。

灯火も、対天人育成学科が組み込まれている学園に入学している時点で、天人に対して何らかの因縁は抱いている筈。ならば何故、フォンに対して姉妹のように接する事が出来るのか。もし仮に、フォンが洗脳を掛けているとしたなら、俺も例外なく洗脳されているだろうし。

「でも、灯火は良かったのか？四限目すっぱかしたりして」

今現在、俺達がいるのは二階の空き教室。普段ならば真面目に教科書開いて勉強に勤しんでいる筈の時間だ。

俺はフォンを一度、寮の部屋に連れて帰らなければならない使命があるので授業を怠るのも学園長直々に許されているが、一生徒の灯火はそうはいかない。授業を欠席すれば漏れなく補修の報復が待っている。

何度も補修に苦しむ舞佳の事例を見ていて尚、自分を犠牲にして天人であるフォンの世話をしたがる灯火は物好きの範疇を越えていると思う。

「朝から楓が物凄く不機嫌で……僕の避難の意味も混じってるから、気にしないで大丈夫だよ」

済まない灯火。その楓の不機嫌、間違はなく上手く説得出来なかった俺が一番の原因だ。楓の性格上、一週間は機嫌最悪のままだろうし、同室の灯火には本当に迷惑掛けている。それでも微笑を絶やさない灯火は聖母でも目指しているのか。

『……………お腹……………空いた』

灯火の気遣いに涙し掛けている時に、空き教室内で響く豪快な腹の虫。遅れて、暢気に空腹を告げる少女の声。

敵陣の真っ只中にいるというのに、本当に緊張感ないな上位十神階。まさか外部から攻撃するのではなく、内部から徐々に敵勢力を切り崩していく作戦か。無表情で腹を鳴らし続けている天人でなければ、その可能性も疑っていたな。

36 『エリーゼ御乱心』【挿し絵】（後書き）

今回挿絵は僕の描いた物です
良いか悪いかわからないのですが、
楽しんで頂けたら幸いです

37 『何時もの光景』

『戦っただけじゃ、救えない物もあるんだ』

昨夜に白から言われた言葉が、頭の中で何度も反響する。それこそ、あたしを一日中不機嫌にさせるくらい、絶え間なく。

加えて今は憎らしい天人学の授業中なので、苛立ちも頂点に到達。今の精神状態なら中位三体にだって躊躇なく特攻出来るだろう。返り討ちに合うのは必至だけだ。

「下位の天人は基本的に歩兵という考えで構いません。出現陣が現れた際には、可及的速やかに下位の集団を抑え、出現陣の迅速な破壊が望まれます。しかし、相手も易々と自分達の出現する為の陣を破壊させてはくれません。さて、出現陣を破壊する際、神葬具使いが気を配らなきゃいけない事はなんでしょうか。今日は　そうね、小波さん、答えてくれるかな？」

あたしも理由を知らないけど、意外にも灯火が報告無しに授業を欠席しているので、普段は優等生の灯火がいるべき場所が空席。

天人学の教師は、その事を知らずに真面目に答えてくれる灯火を指そうとしたのだろう。欠席している灯火の代わりに、矛先は偶然教師と目が合ってしまった、あたしへ向けられる。占いなんて何時もは信じないけど、今日ばかりは十二位の運勢を認めざる終えない。

「……はい。出現陣を発見した際に確認するのは、先ず中位の存在です。中位は指揮系統も管理しているとされ、基本的に中位を倒すと下位の動きは鈍ります」

溜め息を吐きながら席を立つと、もはや一年生でも常識である常

套戦術を答える。

天人を解剖する手段が皆無な人類は、圧倒的に敵の情報不足していて、どの国も中位と下位の違いは力量差くらいしか明確に出来ていない。今答えた物も、教科書頼りの模範解答。

でも現実はずう。都心が襲撃された時、門番的役割の中位は出現陣の防衛を無視して、あたしを取り囲んでいた。神葬具を展開していなくて、只の学生状態だったあたしを。

「その通りです。小波さんの言った通りで、中位はその武装だけでなく」

思い出すと吐き気と共に後悔が次々と現れる。そして、それ以上に恐怖も。

あたしの背後を指差し、出現陣を展開した後、自分の事を世界の救世主と名乗った少女。あの時、あたしは威圧感に吞まれて、何も出来なかった。白に守られてなければ、出現陣から現れた槍の穂先が胸を抉っていただろう。

「この学園の中に、上位がいるって知れ渡ったら……どうなるんだろ」

あたしの後方の生徒達は卓上の授業だからか緩み切って、居眠りしている生徒すらいる。

今この広い教室にいる何人が、下位一体と互角に戦えるか。体験した身だと安易に想像がつく。絶対に五人にも満たないだろう。灯火のような後方支援の神葬具なら未だしも、前衛系を含めてこの数字。

「あの上位一体で、この学園は……皆殺し」

きつと世界最強の白だって、手も足も出ない。アイツはそれを承知の上で、裏切る可能性のあるサンダルフォンを匿うと言いつつ、あたしにだって、貴重な天人の情報を手に入れたっていう意図位は理解出来る。

でもあたしは 認められない。家族を目の前で殺した天人を。どんな事があっても、許せる筈がない。

「苦しいよ……白」

沢山の人が目の前で死ぬ。そんな光景を数多く間近で見えて来たであろう白だから、天人を拒絶する気持ちを分かってくれると思ってた。アンタだけは、あたしの味方でいてくれるって思ってたのに。

胸がきつく締められる感覚と同時に、制服に包まれた両腕が鈍く疼く。目の錯覚なのか一瞬だけ制服越しに微かに見える程度で、両腕に奇妙な文字列が浮かんだ気がした。

顔をしかめながら袖を捲くったが、あるのは戦闘や訓練で付いた消え掛けの傷跡だけ。確か前に実習授業で教わったつけ。傷は勲章なんかじゃなくて、死に掛けた明確な目印だって。

「何であたしは、弱いままなんだろう……」

「白様、つい放課後まで待ち切れず貴方を訪ねてしまったわたくしを御許し下さい」

「……なあ、お前等のご主人様、下級生の教室の扉に頭下げてんだけど？」

そしてわたしは通り過ぎてく下級生達に同類を見る目を向けられてるんだけど。

止めてくれ。わたしは普通に日々を送りたいだけなんだ。御願いだから扉に頭下げてるエリーゼとわたしを、舞佳を同類にしないでくれ。只でさえ試験で気が落ちてるのに、重ねてこの仕打ち。もはや涙も枯れたわ。

『流石お嬢様！礼儀を忘れない高貴な心！拙者感服して……うう、涙が止まらぬでござるよお！』

飼い主命の自称狼は滝の如き涙を流しながら器用に前足で鼻紙を使い鼻水をかんでいる。お前に意見を求めたのが間違いだっただか。

『姫しゃま姫しゃま、旦那しゃまの匂いが薄いでしゅ。ここにはいないみたいでしゅね』

「あら、折角授業を終えて最速で参りましたのに……残念ですわ」

頭の上の餅猫の報告を聞くと、エリーゼは頬に手を当て物憂い気に溜め息を吐く。

こちらは溜め息すら出ない。お前のお陰でわたしは試験の後悔を引き摺る暇もなく連行されたんだからな。

試験時間終了と同時に隣席のエリーゼに手を引かれ、答案用紙を教師に提出する事すら叶わなかった。机に置きっ放しの答案が、きちんと受理されてるか心底不安だ。冷静に考えると顔が蒼白を通り越して青紫に変色しそうである。深く考えないが吉。

「ふ、ふふふ……まさか白様、授業を受けずに円月輪使いと一緒にいたりしませんわよね……？」

「いや、わたしに聞かれても知らないって！それとエリーゼ！右手から蒼い炎が出るけど校舎内は基本神葬具の展開は厳禁だからな！お願いだから仕舞え！ってかお前等も見てないで自分の主人を止めろ！」

『お菓子が美味しいでしゅ〜もぐもぐ』

犬は未だに泣き続けていて、猫に至っては飼い主の頭上で何時の間にか取り出したクッキーを食している。本当に傍から見ると使い魔失格な二匹だな。普通なら解雇されないのが不思議な程だが、主人は甘やかしているし愛玩用としては都合が良いのだろうか。

「…………げっ」

エリーゼをこのままにしておく、白の近くにいる女子相手に無差別凍殺事件でも起こしかねないので教室に連れて帰ろうとすると、論議していた前の教室の扉が開く。

顔を出したのは、エリーゼの白み掛かった物よりも純粋な金色の髪を持つ女子生徒。心成しか顔色が昨日会った時よりも悪く見える。正直、エリーゼを楓と会わせるくらいなら、白と一緒にいる灯火と鉢合わせした方が平和な会話になると思う。灯火に対して何度かエリーゼが凶器を持ち出しそうではあるが、口喧嘩から本気喧嘩に移行されるこちらよりは幾分かマシだ。

「あら子犬さん、御久し振りですわね。相変わらず野蛮な言葉使いですこと」

「うっさいわね青色一号！なんでアンタがここにいんのよ！」

「人に物を聞く前に、先ず始めは挨拶でなくて？そんな事も判断出来ないなんて、日本の神葬具使いの程度が知れますわね」

「アツタマ来た！日本バカにすんな飯不味島国！」

やっぱりこうなるか。想像通りというか期待を裏切らないというか。校舎内部が損害を受けないよう祈るばかりだ。止めに入ったら巻き込まれる事必至だからな。自分の身を犠牲にするほど馬鹿じゃないぞ、わたしは。

37 『何時もの光景』（後書き）

随分遅れて申し訳ないです。

作者少しスランプ気味でしたが、若干抜け出す事ができました。

スランプ状態だと日常パートすらまともに書けないって酷い……もつと精進したいと思います。

修正版は明日にでも上げられるかな、と思っています。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111s/>

神葬具 † AVENGE WEAPON †

2012年1月7日15時49分発行